

# スターダスト・シティ(1)

笹本祐一



ソノラマ文庫

ソノラマ文庫

スターダスト・シティ(1)

笹本祐一



朝日ソノラマ

目次

S   7	S   6	S   5	S   4	S   3	S   2	S   1
最 <sup>ポ</sup> 基 <sup>ト</sup> 底 <sup>ム</sup> 湖 <sup>レイク</sup>	幽 <sup>スリ</sup> 靈 <sup>ラ</sup> 屋 <sup>ハ</sup> 敷 <sup>ウス</sup>	閉 <sup>デ</sup> 鎖 <sup>ッド</sup> 区 <sup>ゾ</sup> 域 <sup>ン</sup>	旧 <sup>オ</sup> 要 <sup>ールド</sup> 塞 <sup>イ</sup> 区 <sup>シユタル</sup>	月 <sup>ル</sup> 色 <sup>ナ</sup> 広 <sup>ティック</sup> 場 <sup>・バート</sup>	市 <sup>シ</sup> 街 <sup>テイ</sup> 区 <sup>プロ</sup> 画 <sup>ック</sup>	港 <sup>ベ</sup> 湾 <sup>イ</sup> 地 <sup>エ</sup> 区 <sup>リア</sup>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
224	186	159	91	63	36	5

S 1  
ベイ・エリヤ  
港湾地区

『やーあ、この放送を聞いてくれてる宇宙都市のみんなと通りすがりの旅人たち、元気でやっているかい？ 今朝も我がガーランド中継点の母星ベルネードはぎんぎんに輝いてるぜ。付近の空域じゃ、近日点に接近してるホレイシヨ彗星が素敵なロングヘアを太陽風になびかせてる。珍しいことにエリア内じゃニュースになるような大事故はまだ一つも起きちゃいない、とびっきりのさわやかな朝だ。こんな朝にはちよつと古めのなつかしいメロディをお送りしよう。そう、この曲、  
#星に願いを#』

誰かの汎用受信機から、ガーランド中継点名物の海賊放送タンシング・スターが聞こえている。ウエストサイドの港湾地区に流れるロックアレンジされた陽気な歌声にリズムをとりながら、シエルミーは主通路を行き交う雑踏をながめていた。

外宇宙や辺境区への不定期便や貨客船、それに時々海賊船や幽霊船なども入港するという発着デッキである。銀河系中央部にある核恒星系からの定期便や豪華客船が専門のセンターポート

にくらべて、歩いているのは柄の悪い連中が多い。

壁面の半分破れた色褪せた船会社の観光ボスターの下に置いた、傷だらけの大きな特殊金属地むき出しのトランクにどっかとお腰をおろしたシェルミーは、波止場へ——あるいは都市部へ向かう人の波を、値踏みするような目で見ていた。

荷物運びのカート・トレイラーや一人乗りのささやかなモベッドが、ずいぶんすり減った紋様入りの床面を走っていく。発光材が褪色して変色しているらしい高い天井の照明の下で、流行遅れの旅行用ドレスに身を包んだシェルミーは溜息をついた。

「ろつくなのがないんだから」

ひろげたひざについていた肘をはずし、頭の上で指を組んでうーんとのびをする。脚を組んでトランクに手をついた。

うす汚れた旅人や団体客、むさくるしい宇宙船乗りが主通路を歩いていく。

どう見ても宇宙旅行向きではないロングドレスの少女がずいぶんと大きな態度で海賊波止場の異名を持つウエストサイドの港湾地区に構えているのだから、人目をひかぬはずはない。シェルミーは気づかないふりをして、ゆるいウェーブのロングヘアをかきあげながら左手首のブレスレットの時計儀を見やった。

けたたましいエンジン音が主通路に響きわたった。市街区の方角から数台の改造車が主通路を

暴走してくる。

「なに、あれ」

呟つぶやいて、シエルミーは目をそらした。

「——？」

先頭車の影がシエルミーの前で急停車した。リムジンにでも使うような大型のガスタービンエンジンエンジンを装備したチョッパートライクの三輪車から、縫い傷だらけの雲つくような大男がシエルミーの前に降り立った。

「はあ……？」

きょとんとして見上げたシエルミーを、坊主頭の巨人は機械仕掛けの両眼でねめつけた。

「シエルミー・エル・フィダーさんですね」

変調機イコライザーをかけたような声が腹に響く。目を見開いたシエルミーは、うさнкуさそうに大男をにらみ上げた。

「人違いでしょ」

後から来たコンバットバギーと見かけ倒しの改造カフエレーサーが、壁ぎわのシエルミーを取り囲むように停まった。低い音をたててどろどろと回転アイドリングするガスタービンや水素エンジンがシエルミーを威圧するように不規則に回転をあげる。

「シェルミー・エル・ライダーさんですね」

大男は、シェルミーの声が聞こえていないように、耳ざわりな声で繰り返した。

「間違いないエ、そいつだ」

コンバットバギーのオープンシートから立ち上がった細身のピエロみたいな男が、左腕に装着したハンドブラスターをさすりながら言った。シートの後ろには対軌道戦でもやるような大型のミサイルランチャーが取りつけてある。

「一緒に来てもらいやしよう」

大男が二、三本指の欠けたごつい手を出した。シェルミーは軽く大男の腕を払った。

「人違いだっかってんでしょ、このウド！」

大男は腕を止めた。表情のない両眼のレンズが焦点を絞るようにわずかに回転した。

「ほお、そりゃあ困った」

改造バイクにまたがった肉まんじゅうみたいなデブがハンドルに肘をついた。

「君がシェルミー・エル・ライダーでないとする、誰なんだろね、一体？」

「関係ないでしょ」

目をそらしながら、シェルミーは太腿に巻いたホルスターにスカートの上から触ってみた。護身用にと持ち歩いているビームガンは、子供のころから触り慣れてはいるが、とにかく大きいの

でおいそれとは扱えない。

「人違いでもかまわん。とにかく来てもらおう」

大男の丸太みたいな腕がのびてきた。シエルミーは思わず悲鳴をあげて、後先考えずにスカートの下からライトライン・ミリタリー・モデルⅦを抜き出した。

ドッキングブリッジから、ズタ袋一つを肩にかけて降りてきたマクレーン・シーカーは、ぶつくさ言いながら接岸デッキへ振り向いた。ガラス張りの気密隔壁の向こう側、接岸デッキに係留されている旧式な高速貨客船に毒づく。

「は、あのくそ船主！ この天才パイロットをあっさりクビにしゃがって、一生後悔すりゃいいんだ！」

ボート側の排気煙や噴射煙でくすんだ多積層グラスの向こう側の高速貨客船「ザッバー」の左舷側第三船倉のあたりに、軍仕様の複合装甲を突き破った大穴がぼっかりと口を開けている。このベルネード星系に進入してから海賊船に追いかけて、七年前の最終戦争で破壊されたもと第四惑星レティシアの小惑星群の一つに逃げ込んだ時、岩塊にまぎれこんでまだ生きていたキラ―衛星に徹甲ミサイルを打ち込まれた跡である。

信管がぶっ壊れていたために船倉の一つに大穴を開けられただけで済んだのだが、破壊された



船倉に積んであった三つ星級の天然の貴腐ワインは全部おしゃかになった。これが保険金をけちった船主の怒りを買ひ、当直パイロットだったマックことマクレーンが退職手当も無しに放り出されたのである。

「誰の操縦で自動操縦オートパイロットと航法システムのいかれた船がこの港まで帰ってこれたと思うんだ……」  
船首操縦区画の信号灯が、マックに別れを告げるように点滅した。

「しかし……三〇樽分の貴腐ワインはちーともつたいなかつたね」

顔をしかめて、マックは歩き出した。いつまでドッキングボートたなすに付んでいても、仕事にありつけるはずがない。グラス一杯が船長のサラリー一ヵ月分に相当するという天然ものの貴腐ワインの味を想像しながら、マックは主通路メインズトに出た。三ヵ月ぶりのガーランド中継点ジャンクジョンだが、人の種類と数は相変わらず多い。

「かか風穴開けられたいのお！」

完全に裏返っちゃった叫び声ベィグメントが主通路を貫いた。

「おほ、相変わらずですなあ」

ウエストサイド——に限らず、ガーランド中継点ジャンクジョンでのケンカ沙汰は珍しいことではない。意外に近くから声が聞こえたこともあって、マックはひまつぶしとばかりに騒ぎに足を向けた。

「こんな所でそんな大型銃モを発射したら……」

軋こじむような声をたてながら、大男はわずかに後退あとひきした。シュルミーの握ったライトラインの口径七七の銃口はぶるぶる震えながらも大男の胸に向けられている。すぐ目の前でこれだけ標的が大きいと、命中させない方が難しい。

「やろーってのかい、お嬢ちゃん」

バギーのやせっぽちがシートから立ち上がって腕のプラスチックの安全装置を解除してシュルミーに向けた。エネルギーの充填じゆうてんと銃身の予熱におよそ十秒。

「やめな」

大男は棍棒みたいな手を上げてバギーの男を制した。「キズもんにしちゃ元も子もねえ」

「なによお！」

重いビームガンを勢いよく跳ねあげたシュルミーは、脅しとばかりに高い天井へ向けて引き金をひいた。ライフル並みの発光を伴ったビームが斜めに照明材にからみつき、たて続けに二つを爆発させる。老朽化した部品が細かい破片となって雪のように主通路メインパスに降り注いだ。

「うへ、やっちゃった……」

マックはいささか啞然あざんとして呟いた。当然のことながら、ステーションや宇宙都市内での火器の使用には細心の注意が必要である。うっかり外壁を貫いたり安全装置をぶっ壊したりすると、自分の命まで危うくなる。

ビームでイオン化された空気が金臭い。シェルミーはカメラ・アイのため表情の見えない大男へライトラインを向けた。

「ちゃんと撃ち方だつてわかつてんだから！」

素人はルールも何も考えずにぶっ放すから怖いのである。

「どーすんのよ！」

甲高い声でシェルミーが喚いた。男たちは顔を見合わせた。こういう常識外れの無茶苦茶なのが一番扱いにくい。

「まずいですね、これは」

マックは、女手には大きすぎる軍用拳銃を構えた少女を見た。この調子では通行人や構造物に被害が出てもおかしくない。集まっている野次馬連中もそれを知ってか、声もなく事の成り行きを見守っている。

「ん——？」

細腕で必死に大型銃を支えている少女と目があつた。マックは肩をすくめた。

「しゃあないね。はい、ちょっとごめんなさい」

マックは爆発寸前のシェルミーと引つ込みのつかなくなった海賊風の男たちとのにらみ合いの中へ割って入った。

「なんだおめえ」「何よあんた!」

「はい、あたしゃただの通りすがり」

大男に軽く手をあげて、マックは少女に向いた。

「本気でこんな所で銃撃戦やる気か?」

突然に訳のわからない事を囁かれたように目を見開いたシエルミーは、あわてて首を振った。

「オッケ、その方が長生き出来る」

マックはいきなりシエルミーの腕をつかんで引き寄せると、耳元に口をよせた。

「な、なに!」

「逃げた方がいいよ」

マックは悲鳴をあげかけたシエルミーに言って、男たちに向き直った。軽く一礼する。

「では、いづれまた——それ!」

「ちょ、ちょっと待って、あたしの荷物!」

「あーったく手間がかんだから」

シエルミーのトランクをひつつかんで、マックはいきなりダッシュした。

「あ、待て、この!」

大男とバイクの間を抜けて野次馬の中に飛びこんだ二人へ、体をひねったデブが大声をあげた。

「誰が待つつか」

「どこ行くのよ！」

主通路の端から真ん中まで出てきたマックにシュルミーが叫ぶ。高速のホバーや大型トラックが飛び出してきた二人にけたたましいクラクションを鳴らして減速もせず走り抜けていった。思わず立ちすくむシュルミーを、マックは右腕一本で抱え上げた。

「キャ、何すんの!？」

「いちいちうるさいお嬢さんだね」

いかついボンネットをした六〇トンクラスのトレーラーが低圧タイヤを軋ませながらかすめるように突っ込んでくる。悲鳴をあげるシュルミーを、マックは通り過ぎるトレーラーの荷台に放り上げた。続けて自分のズタ袋と彼女のトランクを投げ上げ、ジャンプして荷台の縁に手を掛ける。体がぐいっと持っていかれた。

「——なんと、まあ」

大男は眼のレンズをズームさせて二人が飛び乗ったトラックを追った。

「おまえ、あいつらを追え！」

「あいよ」

言われるが早いか、四輪の低圧タイヤを空転させながらバギーが野次馬を蹴散らして急発進し

た。

「てめえ！ 先に戻ってボスに報告しとけ」

「うへーい」

指示されたデブはロータリーエンジンにすさまじい金切り声を上げさせてバイクをその場でスピンターンさせると、市街区に向けて派手に前輪を上げて走り去った。

「あーらよっと」

マックは疾走するガスタービン・トレーラーの荷台へよじのぼって来た。ジャガイモや小麦粉のような雑多な大袋が広い荷台に積まれている。

マックは開放式オープンの運転席で大きなハンドルを握っている男へコインを投げた。

「街まで乗せてもらうぜ」

「止まらねえから好きな所で飛び降りな」

後ろも見ずにコインをキャッチした運転手が野太い声で返事をした。

「さて——」

マックは野菜袋の上にへたりこんだまま大きく肩を上下させている少女を見た。両手で握りしめた大型銃が目に入る。

「一個連隊でも相手にする気だったのかい？ そんな旧式のライトライン・ミリタリー振りまわして」

「余計なお世話よ」

やっとそれだけ言って、シュルミーは顔を上げた。

ライトライン・ミリタリーはライフル並みの機関部を持つ、かなり旧式な——前世紀の遺物みたいな大型銃である。マックがかつて所属していたベルネード宇宙軍でも制式採用されていたが、口径七七のモデルⅦとなると重装備の野戦部隊か機動歩兵でもなければ使っていなかった。

「しまつとした方がいいな。そんなもの握っていると背中から撃たれたって文句言えない」

やっと巨大なビームガンから片手を離して手をついたシュルミーは、横のマックへ顔を向けた。

「……助けてくれた……の？」

マックは肩をすくめた。

「<sup>パイプメント</sup>あんな所で戦争おっばじめようなんてね」

「吹っかけられたのよ」

シュルミーは口をとがらせると、マックに背を向けた。袋の上に横すわりに脚を流してスカートをまくり上げる。

「あれま」

なんとなく見ているマックの目の前で、右太腿に巻いたホルスターにライトラインを戻す。

「シェルミーは、マックに顔を上げた。」

「ね、あなた、トラッカー？ ドライバー？ それともナビゲーター？」

「バカにするんじゃない。ばりばりのエースパイロットです」

「マックはシェルミーから目をそらした。」

「撃墜王？ うっそお」

「シェルミーは手をつけてマックの顔をのぞきこんだ。」

「ふーん……」

「シェルミーは、マックの頭のとっぺんからブーツの先まで見つめてから、ニコッとうなずいた。」

「決めたわ。あなたを雇ってあげる」

「え？」

「マックは体ごと少女に振り向いた。」

「雇うって、俺を——え？ えー？」

「シェルミーはわずかに首を傾げた。」

「何よ——先口でもあるの？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」



マックはあらためてウエストサイドには場違いな少女を見た。新品のブーツに古風な旅行用ドレス、核恒星系出身の上流階級らしい顔立ち——年季物のビームガンと、少女の一人旅には似つかわしくない頑丈一点張りの軍用トランクケースが気になるが、ようするに良家の子女の、冒険家気取りの一人旅らしい。

「無理にはいわないけど——ガーランド中継点には詳しい？」

「そりゃ母港だからね。しかし——」

失職したてで、すぐ次の仕事の当てがあるわけではない。それに、最近の就職戦線は労働力の供給過剰気味で買い手市場になっている。金持ち相手ならいいアルバイトだと考えて、マックはうなずいた。

「オツケ、条件を聞こうか。俺はマクレーン・シーカー——マックだ」

「あたしはシエルミー・エル。よろしくね」

シエルミーはマックの差し出した右手を握った。

ウエストサイドの港湾地区開設以来一度も閉められたことがないという巨大な気密ゲートをくぐると、市街区に入る。巨大宇宙都市であるガーランド中継点の西エリアや下方に偏って広がるダウンタウン。主通路から集積場に向かうインターチェンジの手前でトレーラーから飛び降り

たシェルミーとマックは、ジェニー・ストリートの名で呼ばれる通りに入っていた。

とつくに調節機構が壊れて色褪せた青空が投影されている高い天井の下に、種々雑多な建築物が並んでいる。宇宙都市内といっても天井や上層からの水もれや結露による雨があったり、時折、剝がれたパネルなども落ちてきたりするから、ここらへんのブロックのビルには一応屋根がついている。

しかし、いかがわしい衣装を着けた踊り子が淡い立体映像で浮かびあがっている簡易プレハブのストリップ劇場、ゆがみだらけの広告スクリーンを屋根にのせた崩壊寸前の食堂、寄せ集めの部品で組み立てたようなブラックや長距離宇宙船の居住区をブロックごと持ち込んだものなど、ろくな建物が無い。

脇道や細道だらけの通りを、小型のモベットやコミューター、カラフルなファッションの市民や旅行者が動きまわっていた。

「あなたの言ういい店って、こういうのなわけ？」

シェルミーは店の正面の傷だらけの一枚ガラスから往來の雑踏を見ている。

「そうですよ」

しみや傷だらけの軽合金製テーブルの前の細いスツールに、なるべく体重をかけないように爪

先立ちで座ったシェルミーは、落ち着かない様子で店内を見回した。壁際にずらっと自動販売機があり、後始末用のこ汚いロボットがせこせここと動き回っている。

「ダウンタウンで安心して飯を食える数少ない店だぜ。少なくとも他の所みたいに一世紀も前の固型食糧や一発で廃人おしやがになるような薬入りの酒なんかの心配はない」

「あっそ」

シェルミーは、レーザーの焼け焦げまである薄汚れた天井を見上げて溜息をついた。

「食べないでいいの？」

調子の悪い自動販売機を蹴とばして引っ張り出してきたB定食のパッケージを開けながらマックが訊いた。

「ここじゃ空腹は大敵だぞ」

「いいわよあたしは」

物を食べるような雰囲気のお店ではない。ジュースのカップを一つだけ前に置いたシェルミーは、ごろつきやメカむき出しのサイボーグがうろついている店内へ目をそらした。

「それじゃ——まず、経歴から聞こうかしら」

「振り出しは宇宙軍」

フォークで、見かけより内容優先の合成食をぱくつきながらマックは答えた。

「十六で正規軍に入隊、十八で我が母星がぶつつぶれて軍が消滅するまでは航空宇宙軍でベアトリーチエに乗ってた」

「ベアトリーチエ？ 何それ？」

「中型の艦載機。まあ迎撃から偵察、哨戒任務まで何でもやらされたね」

「それから？」

「あとは失職パイロットお定まりのコースだ。定期便のナビゲーターからはじまって、運び屋、飛ばし屋——核恒星系じゃ密輸に手エ出して星系軍と追っかけっこしたこともある——んな所でいいかい？」

「脚色してなければ。けど、意外に平凡ね」

「勝手に言ってくれ。で——」

マックは興味深げに店内をきょろきょろしているシェルミーに顔を上げた。

「わざわざパイロットなんか捕まえてやらせたい仕事ってのは何だ？」

「大したことじゃないわよ」

ぼやけた立体映像ホログラムの広告を浮き出させた清涼飲料の自販機の前で整備用のロボットと高速言語で言い争っているサイボーグを見ながら、シェルミーは言った。

「ちよっと探しものしたいの」

マックは食事パックに伸ばした手を止めた。

「俺は探し屋じゃない。パイロットなんか雇って何を探そうっていうの？」

「死んだおじいちゃんから手紙が来たのよ」

入り口のすりガラスのすぐそばで起きた喧嘩けんかに目を移しながら、シュルミーはぼつりと言った。

「あたしの学校に、最後の手紙。ガーランド中継点ジャンクポイントに行けって。だから学校やめて飛び出して来たの」

「早い話が家出ですな」

「大変だったのよお。刑務所みたいな全寮制の学校から脱走して、船に乗って……」

「あのね」

シュルミーの話のあまりの展開のなさに文句を言おうとしたマックは、自動ドアのそばの争いに目をこらした。

「きゃー！」

突如、店内を走った閃光が、シュルミーの前のジュースを瞬時にしてカップごと蒸発させた。とっさに自分の食事を持ち上げたマックの腕をかすめて落書きだらけの壁に突き刺さる。

「おっぱじめやがったあ」

マックは、思わず首をすくめて硬直しているシュルミーの腕を片手でつかんで引き寄せると、

テーブルを蹴とばして倒した。バリケード代わりにテーブルの陰へ身を沈める。

「な、何が起きたのよお」

テーブルを背に食事を再開したマックに、床にすわりこんだシュルミーが声をあげた。

「お前さんが港でやってたのと同じ事」

マックは口をもぐもぐさせながら答えた。店内に喚き声とビームや弾丸の発射音、爆発音などが充満する。

「うっかり首なんか出すなよ。テーブルは軍用の複合装甲の外板使ってるから壊れないけど、流れ弾丸はよけちゃくれない」

「あ——あのねえ！」

シュルミーに顔を向けたマックは、片眉だけをしかめてみせた。

「この程度で腰抜かしてるようじゃ、家に帰ってままごと遊びでもしてる方が身のためだけだ」

「誰が家になんか帰るもんですか？」

びっくりするような大声で喚いたシュルミーに、マックは耳を押さえた。

「……じゃ、おとなしくして騒ぎが終わるの待ってようね」

騒ぎを背にマックが食事をかきこんでいるうちに、銃撃戦はじまった時と同様に、唐突に終了した。

「終わった」

デザートのシャーベットを一口で平らげたマックは、防護壁にしたテーブルの上からそろーつと顔を出した。

「どんな感じ？」

あわてて首をひっこめたマックは、ごくりとシャーベットを呑み込んだ。

「えらい奴が来てる……」

「へえ？」

テーブルから顔の上半分だけ出してドアの方向を見たシエルミーは、目を見開いた。改造ライフルだのカスタムガンだの、どう見てもまともでない改造を施した火器を持った私兵風の連中がずらりと並んで店内に銃口を向けている。開いたままのドアから列を割って、鮮やかなシルバー・メッシュの長い髪をなびかせた親玉らしい美女が現れた。

シエルミーは首をひっこめた。

「誰？ あの派手な女——ひと港湾地区ベイエリアのチンピラまで揃ってるけど」

「コニーだ……なんでまたブラッディ・コニーがこんな所に……」

「知り合い？」

「誰が！」

「シュルミー！」

ハスキーボイスが名を呼んだ。ぎょつとして首を縮めたシュルミーが、テーブル越しのドアへ目を向ける。

「いるのはわかってるのよ。手間とらせないですぐ出てきなさい」

「おい……」

マックは目を丸くしてシュルミーを見ている。

「おまえさんのお客だぜ……」

「ね、コニーって誰なの？」

「あんな有名な人知らんのか？ この地元コネクションで最大手のアヴドールの大幹部だよ」

「ギャング団の女ボスって訳——ねえ、どうしよう」

「どーしよーって、俺が知るか。大体なんでおまえさん、あんなのに追われてるんだ？」

「早く出てきな！ こちとらヒマじゃないんだ」

コニーはいらついているようにブーツの踵かかとを鳴らした。

「ぐずぐずしていると風穴あけるよ！」

言葉づかいが乱暴になってくる。

「えらいことになってきたな……」



マックは額に手をあてた。シエルミーは何をしているのかわからず、へたりこんだままマックを見つめている。マックは肩をすくめた。

「おいおまえさん、死にたくなかったら言う通りにした方がいい。あの連中怒らせたらどうなるかわからん」

「やだ！ 絶対やだ、あたしまだ何もしてない」

「とほほ……えらいのと関っちゃった……」

「出てくるの、出てこないの！ 早くどっちか決めな！」

脅しのつもりか、一条のビームが店内を走って自動販売機に突き刺さった。

「しゃあない——さっきの光線銃貸せ」

「ぴかり？ 何？」

「ライトライン貸せていってんの」

シエルミーはあわててスカートの下からライトライン・ミリタリーを抜いた。使い込んだといふより使い古した感じの「手持ちライフル」をマックに手渡す。軍でたたきこまれた習慣で簡単にチェックをしたマックは装弾用の装填ボルトが動かないのに気づいた。

「またこりゃなんつーボロだ。ちゃんと手入れやってる？」

「メンテってなに？」

弾倉<sup>マガジン</sup>を引き抜いて装弾を確認する。エネルギー・カートリッジに貼られた変色したラベルを見て、マックは軽い頭痛を感じた。

「なんだこのカートリッジ、耐用期限を倍も過ぎてるぜ」

コンコースでシュルミーが撃った時、口径七七の派手な光のわりにライト二つしか壊れなかったのを思い出して、マックは納得した。装填機構のいかれた機関部に期限切れのカートリッジでは、発光したことすら奇跡に等しい。弾倉<sup>マガジン</sup>から大型のタイプVエネルギーカートリッジを抜き取ったマックは、左利き用らしく右側についている機関部のコッキングボルトを力まかせに動かした。内部でひっかかっていたカートリッジが装弾口から抜け落ちる。

「こりゃ、爆発したって文句は言えないな」

やっと口を開いた、本来なら使用済みカートリッジが排莖されるエジェクション・ボルトにカートリッジを差し込み、ボルトを力まかせに戻す。

「わ、わわあ！」

シュルミーが声をあげた。たて続けに何本もの光線が店内を走る。

「どうするんだい！　そこで凍結乾燥してやろうか!？」

「わかった、今出てく」

パワーボルトを最大<sup>マキシム</sup>に調節したライトラインを右手で握ったマックが返事をした。シュルミー

がぎよっとしてマックを見る。

「正気？　ちよっと、やめてよ」

「あたりまえでしょ、あんなの言うこと聞いてたら命がいくつあっても足りんわい。ちよっと待ってな、今出てくから」

左手一本で、器用にカートリッジを二つ三つ、<sup>マガジン</sup>弾倉から送り出して取る。

「参ったなー。帰ってきたばかりだったのに、ブラッディ・コニーなんて大物相手にするとは思わなかった」

マックはカートリッジを握った左手を肩の後ろにひいた。

「目ェ閉じて」「えー？」

「やりな」

待ちきれなくなったコニーが、メッシュの髪をかきあげて手下に突撃命令を下したのと同様だった。着弾のあとも生々しいテールブルの向こう側からカートリッジを放ったマックは、<sup>フル</sup>最大パワーのライトラインで空中のカートリッジを狙い撃ちにした。

間の抜けた破裂音とともに、通常パワーなら五斉射分の容量を持つタイプVのカートリッジに封入されていたエネルギーが解放されて、店のど真ん中に小さな太陽を出現させた。爆発した一発が、間を置かずに残り二発を誘爆させる。



「来い！」

床のパネルをライトラインで吹き飛ばしたマックは、自分のズタ袋とシェルミーを引っ張って床にぽっかり開いた穴に飛び込んだ。

爆発光が消えるまでの数秒、コニーたちコネクション一同は動けなかった。光球が消えてから、溶けたジルジス鋼の床と熱くプラズマ化した空気の名残をよけて一団はシェルミーがかくれているテーブルの裏へ殺到した。

「チッ、キャップ、逃げられやした！」

手に手に火器を持った男たちの間から出てきたコニーは、切れ長の目を細くしてシェルミーが消えた穴に立った。

「世間知らずのお嬢さん一人と思ってたんだけど——甘かったね」

シンプルなお飾りのついた細身の剣をくるくる回しながら地下へ開いた穴をねめつける。

ガーランド中継点リヤクシオンに詳しい、それもそこらへんのチンピラではないガイドがついているらしい。コニーは謎めいた微笑を浮かべた。

「あなた、一体何やったの？」

「前に乗ってた船の艦長に教えてもらった手だ。カートリッジ爆発させたんだよ」

二人は、異臭のする薄暗がりの中をシュルミーの胸のペンダントの光をたよりに四つん這いになって進んでいた。

「んじゃ、ここは？」

「ジュニー・ストリートの床下。下の階層から見りゃ天井裏ですがね」

腐蝕しかけたような上下水道のパイプや、まだ使われているのかもう廃棄されたのか、とっくに耐用期限を過ぎていつ爆発してもおかしくないようなエネルギー・チューブなどが縦横無尽に走っている。上から滴り落ちた汚水が得体の知れない水溜りを作っていたり、放りこまれたゴミが山となっていたりして、長居したい所ではない。

「ばかでつかいネズミやアメーバに指なんか喰われんように気をつけてな」

先をいくシュルミーは声を上げた。

「やだ、ここそんなまでいるの!？」

「ハーレムみたいにキマイラや寄生虫がうろちょろしてないだけだよ。さてと……」

おどかさされてペンダントに仕込んだサーチライトの照度を上げたシュルミーに、マックは顔を上げた。

「お前さん、いったい何しにこんな所まで来たの——いいケツしてるな」

すぐ目の前で動いているスカートごしの形のいいお尻に思わずそう言ってしまったとたん、も

のすごい音がした。

「いったー……ヘンなこといわないでよ！ 頭ぶつけちゃったじゃない」

「……すまん。で、何しにガーランドへ？」

しばらく、答えるのをためらうような沈黙があった。ペンダントの光が拡大投影された二人の影をゆらしている。

「——おじいちゃんの宝物を探しにきたの」

今度はげんなりした沈黙がそれに応えた。

「宝物は何？ お、その下水、右だ」

ちよつとだけ考えてから、シエルミーは答えた。

「希土類金属が十トン」

「レア・メタルだったってピンからキリまであるぜ。種類は？」

「レディウム」

また、ものすごい音がした。びっくりして肩越しに振り向いたシエルミーに、マックは伝導バンプにしたたかぶつけた頭を押さえてまくしたてた。

「レディウム十トンだ?! 星系国家の年間予算に匹敵するぞ！ おまえさん正気で言ってるのか!？」

「あのねえ」

「ちょっと待て、お前さんそのお伽話とぎばなし、誰かに話した？」

「べつに、言った覚えはないけど……どうして？」

「レディウム十トンなんて情報ネグが流れたら、一匹狼の流れ者から大手の海賊まで、それこそガーランド中が動き出したって不思議はないが——娘っ子一人だけの無名マイナーな情報なんてのは、スビーカーでがなりたてるような真似でもない限り、そう簡単に有名メジャーになるもんじゃないんだがな」

マックは考え込んだ。

「どうしてブラッディ・コニーなんて大物が出てきちゃったんだろ」

「あたしが有名人だからでしょ」

冗談めかしたシエルミーの言い方に、マックは頭をかかえた。

「わかったよ。それで、『おじいちゃんの宝物』とやらは確かなの。レディウム十トンなんて、どっから出てきた？」

「レディシアにレディウムの産出地と精製工場があったのは知ってる？」

「軍の最高機密で、俺たち下っ端は場所も知らなかったがね」

「半径五千光年以内で最大の産出地——推定埋蔵量五〇トン。七年前の最終戦争でレディシアが砕かれてから関連資料はすべて消失、有数の鉱物資源を持つ惑星は文字通り星屑になった……」



説明書を棒読みするようなシエルミーの口調に、マックはぶっきらぼうに応えた。

「探知器持った鉱石屋が今でも小惑星群をうろついでるよ。もっとも宝の山掘り当てたって噂は聞いてませんがね」

惑星大の総質量を持つ小惑星群は、七年ぐらいの年月で分散安定するものではない。惑星であった時とほぼ同じ公転周期でベルネードのまわりを周回している。密集している上に、レティシア崩壊時の熱が冷めていない。燃えかすが大部分のため、発掘作業は困難を極める。

「全部……じゃないけど、一部の精製済みレディウムは惑星破壊の土壇場にレティシアから持ち出されていたのよ。純度九九・九九九九九九のレディウム十トンがね」

「そのお宝の山はどこにあるんだ？ あ、そのの伝導チューブ左へ行つて」

「だから、それ探しに未たのよ」

ばたん、と妙な音がした。シエルミーはペンダントを握って振り向き、ついて未ているはずのマックを照らし出した。

「このガールランド中継点のどこかに、必ずおじいちゃんのお宝があるはずなのよ——何やってんの？」

マックは力尽きたというように床に突っ伏していた。

「いや……おまえさん、ここの広さ知ってる？」

「知らない」

マックはこめかみを押さええて起き上がった。

「アーバイン・ラネット都市惑星どこの騒ぎじゃないってのに。いいよ、上へ出よう。そろそろキャンサー・サー・サーカスに入ったはずだ」

S  
I 2  
市街区画

シテイ・ブロック

静電容量式のセンサーに軽く触れると、間髪を入れずに冷たい水がシャワーから進ほとほしった。

「さっすが高級ホテル」

ペンダントだけをまとったシェルミーは、冷たい水流を全身で受け止めた。「キャー気持ちいい」

「金持ちのやることわからん」

バスルームのインターホンを通して流れてくる声を聞きながら、マックはライトライン・ミリタリーを分解していた。

「なんでわざわざ高い金払ってまで、生のまま飲めるような水で体を洗いたがるんだろね」

「なんか言ったあ？」

「よくこんなボロ、平気で使ってたな！」

ライトラインの銃身バレルをはずし、出力増幅コイルを抜き出す。

「おーお、反射板はくもつとるわ照準は狂つとるわ、よくこれで暴発も爆発もせず<sup>も</sup>に今まで保つたもんだ」

手ぎわよく分解した部品をホーム・バーの磨<sup>みが</sup>きぬかれたクリスタルガラスのカウンターに並べていく。

「そう出回ってる銃じゃないし、大体タイプVの軍用カートリッジなんて、そこらへんのドラッグストアじゃ手に入らん」

「なんとかなるんでしょー」

ぬらした柔らかい髪にしゃしゃかしゃかとシャンプーの泡をたてながら、シエルミーは気楽に言った。

「あーあ、あんな所うろついたらから、かつらだ中べつとべと。あなたも次はいつてきれいにしてよ。汚いパイロットなんて嫌<sup>や</sup>だからね」

「へーへ。まったく何がいいんでホテル・プレシドの最上階なんか……」

生返事をしたマックは、豪華なクリスタルのシャンデリアが下がった広い居間を見回した。

「ガーランド中の顔役でも招待して宝物の話でもするつもりかね。——しかし」

マックは、分解した部品の向こうにクーラーに入ったびんと一緒に置いてあるタンブラーに手をのばした。うっすらと霜のついたタンブラーには地元ガーランド中継<sup>ジャンクション</sup>点の銘酒ヴィー・リユー

シュがオンザロックで満たされている。めったに飲めないような高級酒もカウンターの中にはあったが、飲み慣れた酒でないと落ち着かない。

「ただ酒が飲み放題とゆーのはいい事だ」

「でさあ、これからどーすんの？」

バスルームのシェルミーが気楽に訊いてくる。

マックは肩をすくめた。

「おいおい、まだ引き受けるとは言ってませんが」

『ここまで来て、降りるつもり？』

それきり、あとは鼻歌で軽いメロディが水音と一緒にきこえてくる。マックは、今回港に入ってからまだ一度も行きつけの船員相手の酒場に行っていないのを思い出した。

いつ行ってもひまな船乗りと乗員探しのオーナー、それに手数料を取って中継ぎをする仲介人があるから、仕事を選ばなければ五分で、ちょっと楽をしたくても二、三軒まわって一週間もねばれば次の仕事にありつける。

「うっかり乗ると命が危ヤくなりそうな話なんだが——」

マックは銃身を終わって機関部の分解をはじめた。

「わかったよ、早く出てこい。作戦会議をはじめよう」

「まあだ」

コックセンサーを軽く中指で触れたシュルミーは、シャワーから流れるお湯で髪の毛を流しはじめた。

「たかが体を洗うだけで、ドーしてあれだけ時間をかけられるんだろぅねえ」

マックはぶつくさ言いながら、整備もなしでかなり酷使したらしい機関部の部品をならべはじめた。

室外からの呼び出し音がインターホンから流れた。手をのばしたマックは受信ボタンキヤツチを押した。

「はい、何ですか」

『こちらフロントでございますが、シュルミー・エル・ファイダー様はご在室でいらっしやいますでしょうか?』

敬語だらけのフロントマンの言い方に辟易へきえきしながら、マックは一瞬考えた。

「ファイダー?—ああ、あのお嬢さんなら今風呂だ。急用なら呼ぼうか?」

ブレシドほどの超高級ホテルになると、同室者ならともかく、プライベートな場所へは外部から直接呼びかけることは出来ない。

『いえ、それなら結構でございます。どうも失礼致しました』

「ふん?」

インターホンが切れた。妙な違和感を感じたマックは、多用途コントローラー組み込みの必要以上に豪華なガラス細工のインターホンを見た。

『どうしたの？』

鼻歌まじりのシェルミーがバスルームから訊いてきた。

「いや……」

返事も終わらないうちに、また呼び出しの電子チャイムが鳴った。

「ちょっと待ってて——はい、何ですか」

受信ボタンを押したマックが返事をする。

『ルーム・サービスです』

ドアのすぐ外から、落ち着いたバリトンが返事をした。

「はい、ちょっと待ってて——」

ドアロック解除のボタンに指を滑らせたマックは、ふとひっかかるものを感じてインターホンを切り替えた。

「おまえさん、ルームサービス頼んだ？」

『頼んでないわよお』

「あっそ」

マックは、部屋違いだらうと言おうとして、ボタンを押す手を止めた。思い直して、モニターシステムのスイッチを入れる。

壁の重そうなカーテンが開き、上映会でも開けそうな大型の複合スクリーンに映像が出た。

ドアの外、ふかふかのカーベットが続く広い廊下に、古風な礼装をびしっと決めたボーイが数名、料理を載せたワゴンと一緒に立っている。

「——なに？」

サービスマンよりは軍人のような直立の姿勢が気になって、マックは映像を拡大させた。

「こいつら……」

先頭の男のジャケットの内懐に、中型銃らしい銃把が見えた。スクリーンの中で、もう一度チヤームを鳴らす。

「はい、ちょっと待って、今開けるよ」

返事をしながら、マックはスツールから腰を浮かした。クーラーポットからヴィー・リニューシユのびんを抜いて中のドライアイスをカウンターにぶちまけ、分解したライトライン銃の部品をかき入れる。タンブラーの中の酒を、勿体ないから一気に飲み干し、ついでにヴィー・リニューシユのびんも部品の中にぶち込んだマックは、その足で必要以上に広大な洗面室に飛び込んだ。

「……え？」



たちこめる湯気の中でシャワーを浴びていたシエルミーは、突然闖入してきたマックにきよんと考え込んでから、あわてて悲鳴をあげてバスタブの泡の中へ飛び込んだ。

「なァに考えてんのは無礼者——！ 物事の手順でこと知らないのこのどスケベ！」

喚き散らすシエルミーの頭に、タオル地のガウンが降ってきた。ぬれた前髪をかきあげたシエルミーは細目に開けたドアからバスルームの外をうかがうマックが自分の事を全く見ていないに気づく。

「どしたの？」

「お客さんだよ」

マックは外を見たまま、手もとのポットから部品を出して組み合わせはじめた。泡から首だけ出したシエルミーが目を丸くする。

「またあのギャング団？ だってここ、プレシドの最上階よ？」

核恒星系でも大手の、伝統と格式を誇る高級ホテル・チェーンである。いかに都市を牛耳るコネクションと言えども、おいそれと入りこめる場所ではない。

「別口らしい」

マックは、かつて軍にいた時の経験から、外の連中がプロらしいことを感じていた。

「軍か、それに近いような……」

「えー？」

「んなことやってる間に逃げよう。いけるか？」

「いくつて、どこ逃げるの……」

シエルミーは、マックに背を向けてバスタブから立ち上がった。マックは思わず手を止めて泡だらけの背中に見入ってしまう。

「おー、なかなかのプロボーション」

「見るな！」

後ろ足で泡をとばして、シエルミーは手早くガウンの袖に腕を通した。

「ねえ、ドライヤーかけてる時間——」

「未だ」

チャイム音とともにドアが開いた。マックは舌打ちした。「マスターキーまで持つてるよ」

「——ないみたいね」

「出来るだけ大量に泡たてて」

耐用期限を過ぎた信用出来ないカートリッジを装填して、<sup>マガジン</sup>弾倉をライトラインに装着した。

「え？」

「目くらましにはなる。さあ、早く」

「これちょっときわどくない？」

やけに丈たけの短いガウンのベルトを結んだシェルミーは、あらかじめ温度調節されてある湯栓のダイヤルを全開にした。人魚を形取った華奢きゃしゃなガラス容器からボディシャンプーをありったけぶちまける。

マックは細目に開けていたバスルームのドアを閉じた。

「さてと、どこをぶち破ってやろうか……」

マックは黒い鏡のように磨みがかれた壁のファインセラミックのタイルをノックした。部屋の配置をホテルの外観にあてはめてみる。

「ここらへんが外壁かな」

シャワーのついている壁面に手をあてる。

「ね、ちょっと、急いだ方がいいと思う」

盗聴器代わりに、インターホンで室内の物音を聞いていたシェルミーが顔を上げた。

「こっち来るみたい」

「さっすが高級品、泡立ちのいいこと」

マックははやくも足もとを埋めはじめた肌理きめの細かい白い泡に感心してかきまわしたりしている。

「三分もしないうちにバスルーム全部泡になっちゃうから。一ピン丸ごとぶちまけたのよ」

「よいよい。そっちのすみに引っ込んで」

壁から離れたマックが銃の機関部をいじりながらドアに下がった。シュルミーが目を丸くする。  
「何するの？」

「逃げ道つくるの」

「ちょ、ちょっと、やめてよ、ここでそれ撃つつもり？」

「完全とはいわないけど、性能はかなり戻ってるはずですよ。安心しろ、新建材ぐらい一発だ」  
出力を最大まで上げて、収束率を一杯に落とす。照射面積当たりの破壊力は落ちるが、その分大きな穴があく。

「きつ来ちゃうー」

インターホンで室内の様子を盗み聴きしていたシュルミーが声をあげた。

「騒ぐなって」

マックは壁に向けてラインメタルの引き金をひいた。銃口からまばゆい白光が放たれる。

「はら」

黒い鏡面タイルを直撃したはずのビームはそこで放射状に拡散したかと思うと、そのまま何事もなかったように雲散霧消してしまった。

「何よこれー!!」

「カートリッジが古くなりすぎてたんだ——このっ」

マックはライトラインのコッキングボルトをひいて次のカートリッジを装填した。今撃ったばかりのカートリッジが排莖されて、ひざままで未だ白い泡の海に消える。

「来るう！」

ロックしたすりガラスのドアの向こうに人影が立った。

「あやば……潜れ！」

とっさにバスタブの中へ飛んだマックはシエルミーの首根っ子をおさえて泡の中へ身を沈めた。マスターキーを持っていたらしく、ドアロックは簡単に解除された。一気に開けられる。

「うわっ、なんだこりゃ」

ポイーの正装に、麻酔弾パラライザーランチャーをセットした小型銃を握った男が声をあげた。泡の海がバスルームからどつと流れ出す。

「キヤップ！ 見当たりません」

「他のドアからは出ておらんのだ！」

居間から怒鳴り声が返ってくる。「探せ！ 部屋のどこかに隠れているはずだ！」

「わかりました」

拳銃を握ったボーイは、一面雪のような泡で埋められたバスルームに入ってきた。

山盛りの泡があふれているバスタブから、ライトラインが銃口だけのぞいた。壁に向けてゆっくりと狙いをつける。

銃口周辺の泡を瞬時に蒸発させて、今度こそ破壊的な光芒とともにビームが発射された。バスルーム内が激光に包まれたかと思うと、壁が一面まるごと吹き飛ばされる。

「未い！」

シュルミーの手を引くというより引っ張る感じで、マックはバスタブから飛び出した。衝撃の余波でシャボンが舞うバスルームを駆け抜け、吹き抜けになった壁から飛び出そうとしてあわて急ブレーキで止まる。

足もとに高層八階、約四〇メートルの奈落がぼっかり広がっている。

「どーすんのよ！」

はるか下方の市街路をのぞきこんだシュルミーが蒼い顔をして喚わめいた。

「動くな！」

ビームで吹き飛ばされて壁に叩きつけられたボーイが後方から銃を向けた。シュルミーがびくつとして手をあげる。

「るせー」

見もせずには後ろ向き一発の威嚇射撃でボーイを黙らせたマックは、吹きさらしのバスルームの厚さ三〇センチほどの建材から首を出して上を見上げた。すぐ目の前が空——に偽装された天井——である。

「よし、上だ」

「どーやってくの」

「つかまって」

シエルミーにライトラインを渡したマックが背を向けた。

「登るしかないでしょお」

もう一度下の街路に首を出して、はるか下方でびっくりして上を見上げている小さな通行人を見たシエルミーは、両手で顔を覆った。ホテル・ブレシドはまわりの建築物より一まわり高いから、連なっている屋根の海が一目で見渡せる。

「それとも素直に捕まってみる？」

力一杯首を振ったシエルミーはライトラインを持ったまま、腰を落としたマックの広い背にかみついた。

「お、意外に重い……わ、わかったわかった」

立ち上がったマックは、シエルミーがまわした腕に首をしめられながら外壁に手をかけた。見

かけ通りの石造りなので、足場には苦勞しない。

「待てェ！」

ボーイの団体がバスルームになだれこんできた。泡で滑って、二、三人がこぼれ落ちる。

「遅いよ」

器用に石壁を登り、屋上のへりに手をかけたマックの手元に一条のビームが突き刺さった。

「動くな！ 次は脅しじゃなくなるぞ！」

体の動きを止めたマックは、背のシェルミーと顔を見合わせてから下を向いた。バスルームから顔を出したボーイたちがダース近い銃口を壁にはりついた二人に向けている。

マックは肩をすくめた。

「撃つんならどーぞ。ただ生け捕るつもりじゃないのかい？ ここから落ちたらこのお嬢さんの命までは保証できないぜ」

「ご自由に。硬化弾や粘着爆弾ボンド・ボムの用意もある、心配することはない」

「だと」

マックはもう一度、背中のシェルミーと顔を見合わせた。

「やっごらんなさいよ」

「わっバカやめなさい、ケガするぞ」



マックの肩に羽交いにした左腕を残して、シェルミーは右手のライトラインを下に向けた。

「パワー最大だからね、あんたたちくらい一発で黒焦げよ！」

本来ならその通りなのだが、カートリッジがいかれているから光が出るかどうかも怪しい。しかしボーイたちはそんな事情は知らない。

「危ないからよしなさいっての」

「さあ、どーすんの！」

シェルミーはマックのささやきも無視してボーイたちを睨みつけた。

「危ないからよしなさいっての、わかった、降りてくよ——わ、わ、ちょっとたんま」

シェルミーはぎょつとしてマックの肩にかけた腕で首を絞めにかかった。

「何考えてんのよ！」

「だからね……」

げほげほと咳きこんだふりをして、マックはシェルミーの耳に口を寄せた。

「飛び降りる。怖かったら目を閉じてて」

目を見開いたシェルミーに返事をする間も与えず、マックはぐいっと体を持ち上げて身を縮めると、力まかせに石壁を蹴とばした。

「きゃあ！」

悲鳴を残して、あわてたボーイたちが乱射するビームの中を、街路一つ離れたビルの二階層分下の屋上にある四角い給水タンクへ飛ぶ。思わず硬直しちゃったシュルミーの体を支点に一回転して背中の彼女を抱きとめ、前屈みに着地準備したマックは、妙に足応えがないなど感じる間もなくひびだらけの上板を突き破ぶった。

「なんだあ!？」

大穴をあけて空っぽの給水タンク内に落ちた二人はその勢いそのまま底板を突き破り、パイプを組み合わせたタワーの中で本来の屋上に着地した。

「なんなのよお」

経年劣化した給水タンクのプラスチックの破片を浴びたシュルミーは、ぶかぶかになった化粧パネルで覆われた屋上にひぎをついた。

「逃げるっていったでしょ」

マックが言い終わらないうちに、タンクやパイプを突き抜けたビームが屋上に突き刺さった。二人のまわりでパネルや構造材がはじけ飛ぶ。首をすくめたマックはシュルミーの腕をとって立たせた。

「場所替えよう」

思わずうなずいたシュルミーの腕を引いて駆け出す。

ホテルから、ビームガンを持ったボーイが二、三人飛び降りてきた。

一気に屋上の端まで駆け抜けたマックは、メッキの剝がれた細い非常梯子に手をかけた。シェルミーが横から下をのぞきこむ。梯子は、一、二階降りたところで切れている。

「こんなとこ降りるの？」

とたんに数条のビームが二人をかすめた。マックは梯子に手をかけて素早く屋上から飛び降り、今にも折れそうな細いパイプに足をかけた。

「無理には言わないけど」

するすると降り始める。一瞬迷って後ろを振り返ったシェルミーは、次のビームの乱射を喰らってあわててマックの後を追った。

「こら、ちょっと待って」

数段も降りないうちにマックの頭に素足をおろしてしまう。

「何やってんのよ！」

「待ってなさいっての。一発じゃ無理かな……」

梯子の横に大きなスモークグラスがはめ殺しにされた窓がある。梯子から足をあげたマックは、一枚ガラスに力まかせに回し蹴りを喰らわせた。ガラスは一発で砕け散った。

「わーすごい、えらいえらい」

「なんて手抜き工事だ——来い！」

マックは割ったガラス窓から室内へ飛び込んだ。続いて、半分ヤケで飛んできたシェルミーを抱きとめる。

「……何なのここ」

シェルミーは、スポンジのような足応えのないカーベットの上で、ゆっくり回転する極彩色のシャンデリアから悪趣味な原色の光を浴びながら呟いた。ねっとりとした甘ったるい匂いが鼻をつく。

「何のにおい？」

「媚薬——お取り込み中失礼します」

マックは、部屋の半分を占領している巨大なベッドの上で事の最中だったらしい二組の男女へ手を上げた。

「忙しいんで、これで」

啞然として抱き合ったままこっちを見ているカッブル二組にあいさつも終わらぬうちに、蹴破った窓からボーイが二人たて続けに飛び込んできた。

「わは？」「わ」

マックはあわててシェルミーの手をひいて羽根ぶとんの下へダイビングした。ベッドの中の裸

の女性が、訳のわからぬまま悲鳴をあげる。

「何ちゆう仕事熱心な奴らだ」

「こんなところもぐりこんでどーするのぉ！」

「ベッドの中でくらいおとなしくするもんだぜ。せーの！」

バカでかい羽根ぶとんの下で仰向けに寝返ったマックは勢いよく立ち上がった。ふとんをはがされた裸のカップルが悲鳴をあげ、ポイーはベッドから突然立ち上がった羽根ぶとんに思わず後退さる。

「それ！」

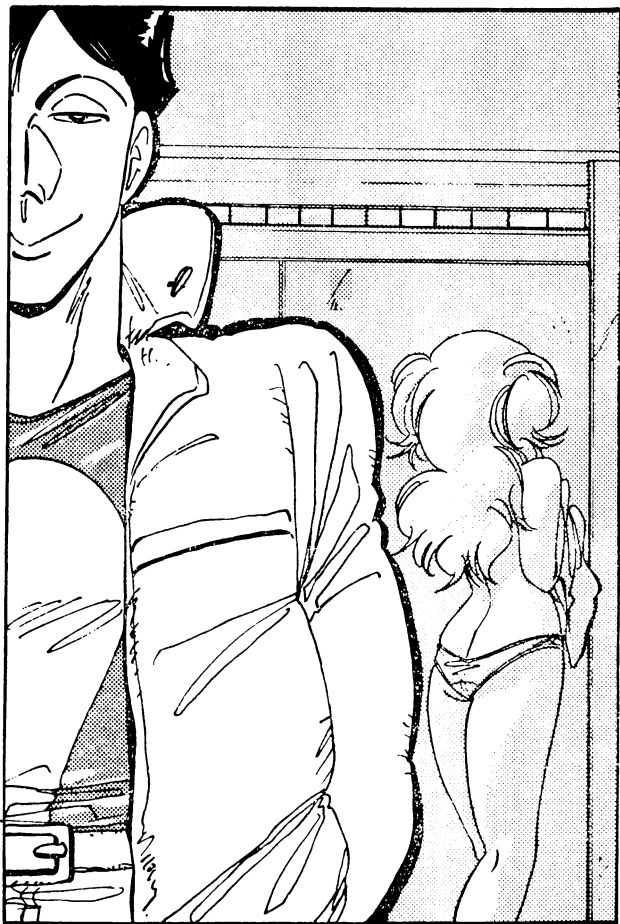
広げた両手でふとんを支えたマックは、ベッドのスプリングをトランポリンにしてジャンプした。反射的に撃つビームも気にせずポイー二人に上から投げかぶせる。ビームで開いた穴から雪片のような羽根が舞った。

「それ逃げろ」

巨大な羽根ぶとんの下でもがくポイーとベッドの上の裸のカップルを残して、二人は部屋から逃げ出した。

「何持って来たの？」

出掛けにカーベットのの上に散らばっていた服を拾って来たマックを見て、シエルミーは目を丸



くした。

「おまえさん、ガウン一枚で逃げるつもりですか？」

下に何も着ていないのを思い出して、シェルミーはあわててガウンの前を合わせた。

悪趣味な装飾のドアがならぶ通路を抜けて、見かけだけは豪華な狭いエレベーターに入る。マックはボタンを押しながら服をシェルミーに渡した。

「下に着くまでに着れる？」

「向こうむいてて！」

入れ替わりにライトラインが渡される。

「へーへー」

マックは言われた通り壁に向いた。マジックミラー風のパネルに映る着替え風景を横目で見ながら、ライトラインのカートリッジを装填しなおした。

「シェルミー・エル・フィダー？」

「なに？」

返事をしてから、フルネームで呼ばれた事に気づいたシェルミーは、ワンピースのマグネットを止めかけたまま顔を上げた。

「あのフィダー？」

シェルミーは服のマグネットを止めた。サイズはほぼ合っているが、胸と腰のサイズにかなり余裕がある。

「ふんだ」

ゆったりしたブーツをはきにかかる。

「まだ言っていないと思ったけど——いつ気がついたの？」

「ん、さっき、フロントから呼び出しがあった。サイズは？」

「合ってるみたい」

とんとんと足踏みしてブーツが合っているのを確かめたシェルミーは、はっとしてマックの背に指鉄砲をあてた。

「こらぁ、見てたな」

マックは黙って手を上げた。

エレベーターのドアが開いた。出ようとするシェルミーの肩をマックが止めた。

「まだ二階だ」

「え？　なんで？」

「古典的な手トリックだけどね。ひっかかってくれらるかどーか」

エレベーターが二階で止まったのを見れば一階の追っ手は階段で二階に駆け上がってくるはず



である。

トリックが効いたのかははじめから未ていなかったのか、いかがわしい機械やら訳のわからぬ芸術彫刻などが置いてある暗いロビーにはボーイはいなかった。

ロボット仕掛けのカウンターの前を抜けて回転扉から外に出る。比較のおとなしいホログラフのサインを見上げたシュルミーは、思わず口もとを押さえてマックの背中をはいたい。

「やっだー、ここラブホテルだったの」

「そーよ。きて」

マックは街路を見廻した。ダウンタウンの中でも比較のお上品なブロックだけあって、石畳風のすり切れた路面には街路樹まである。

「どこ行こうか……ん？」

マックは前衛彫刻風の裸体像が置いてあるラブホテルの表玄関を振り返った。

「あ、やば……」

思わず額に手を当てる。奥の階段からロビーに降りてきたボーイの一団が、玄関の外にいる二人を見つけて突撃してきた。

「逃げろ！」

マックは、シュルミーを引っ張って走り出した。そこらへんのレティシア杉の下に停まってい

た小型のコミュニーターに飛び乗る。二座席ツイセアのコンソールが点滅して、ディスプレイに『毎度ご利用ありがとうございます』の文字が出た。

「何これ？」

風防もないオープンのも、あまり座り心地の良くない固いシートに押し込められたシエルミーが訊いた。

「タクシーだよ。全速でルナティック・パーティーへやって」

スリットにコインを放り込む。スピードより効率優先の電磁モーターを唸らせて、コミュニーターは急発進した。シエルミーは体をひねって背バックレストもたれに手をかけ、後ろを見た。

ラブホテルの回転扉から飛び出したボーイの一団がどんどん小さくなっていく。シエルミーは手を振った。

「バイバイ」

「次のが来ればすぐ追われるよ」

「じゃ、どこ行くのよ」

「ん、いい所。で、だ……」

マックは完全自動操縦のコミュニーターに運転を任せ、ヘッドレストに腕をまわしてシエルミーに向いた。

「おまえさん、本当にあのファイター・コンツェルンの人間なのか？」

「おじいちゃんは、ね」

シートに体を戻したシェルミーは、前を向いたまま言った。

「あたしは傍系もいいところ。直系らしいけど正統じゃないし」

「たまげたねこりゃ。傍系だろうが何だろうがあそこの名前持ってれば不自由なんかないだろうに」

ファイター・コンツェルンといえば、全銀河でも三本の指に入る巨大企業集合体である。重戦艦から日用雑貨まで何でも扱い、私有している星系も五つや十ではない。

「本当にそう思う？」

「いや……一航海でクビになったが、中央航路の豪華客船に乗ったことがあるけど……しかし」

「どうしてクビになったの？」

シェルミーは面白そうな顔をしてマックの顔をのぞきこんだ。マックは面倒くさそうに顔をそらした。

「あの手の船は性に合わなかったの。おまえさんは——家出って言ってたな？」

「そんなじゃないわよ」

今度はシェルミーがマックにそっぽを向いた。

「ご同様——ファイダーの名前持つてる人間て二百人以上いるからね、末端の方なんかにいると、ほとんど部外者なんだ。なまじ正統の血が混じってるから、かえって邪魔者扱いされるわけ」

ファイダー・コンツェルンの中枢は、その名の通りファイダー一族によって占められている。特に重要なポストは創設者エフィラス・ファイダーの直系のみが継ぐことになっており、その血統主義は一族内での権力争いのすさまじさとともにつとに有名である。

「ひどいもんよー。おかげで完全寄宿制の女子高なんてところに放り込まれちゃってさ。知ってる？ 寄宿学校って」

マックはうえつと息をついた。

「まだそんなもんが実在してるのか」

「退屈で死にそうだったんだから。だから無断退学して飛び出して来ちゃったの」

「それで見当がついた」

マックはモベットやトラックの間を走るコミュニーターから後ろを見た。

「あのボーイ、コンツェルンの私兵だったんだな」

「私兵って？」

「私設軍隊。装備と数に頼って頭も体力も使わないなんてのは軍隊の発想だよ。とわかればやり

ようも——ああ!？」

後続の大型タンクローリーの陰から一条の細いビームが走った。思わず首をすくめたマックの頭をかすめて斜め前を走るトラックのコンテナに突き刺さる。

「もう追いついて来やがった」

「どーするの!？」

シートに身を沈めたシュルミーは後ろを気にしている。

「心配するなって。もうすぐルナティック・パーティーだ」

「その名前からして不安なんだ、あたし」

「いい店を知ってるんだ。そこで作戦会議やろう」

急に左側へ進路変更したコミュニーターは、やがて脇道に入って停車した。

S 1 3  
ルナティック・パーティー  
月色広場

「ア、ああ……」

天井からの鎖で両手を吊られた少女が切なげな吐息をもらした。ピンクのバックライトに浮かび上がった細い裸身がかすかに震えている。

強力な催淫剤が使われているらしい。とろんとした濡れたような大きな瞳は何も映していない。

少女は客席からステージに突き刺さるいくつもの視線に耐えかねたように体をよじった。ひざをすりあわせ、悩まし気に頭を振る。

ステージの背後から、何本もの細い触手が這いあがってきた。バックライトに不気味なシルエットを投影して、サイボーグとも生身ともつかない巨大な粘液質の化け物が現れる。

磨かれたステージ上をヘビのように這ってきた長く細い触手が、ねっとりした動きで少女の脚にからみついた。束の間まともな意識を取り戻した少女が吊られた腕越しに背後を向いた。瞳に

恐怖の色がよぎる。

透き通った悲鳴が店内に響き渡った。

「あなたの言う『良い店』って、こういうのな訳？」

熱っぽいスローバラードが流れている店で、シエルミーは、ほの暗いテーブルライトの向こう側に座っているマックをにらみつけた。

「そーよ」

ボックスシートの向かいのマックは、右腕で肘をついたままステージから目を離さない。

「わかった」

シエルミーは、テーブルの上でグラスを持ったマックの左手を思い切りつねった。

「あなたって、根本的にスケベに出来てるんだわ」

「うわっち」

声をあげたマックが左手の甲をおさえた。ふーっと吹く。

「あのね、おまえさん、俺がどうしてこの店に入ったのか、まだわかんない？」

「わかるわけないでしょ！」

半徑三〇光年で最大の歓楽街といわれるルナティック・パーティー。たっぷり四区画ブロックを占める

この究極の風俗営業地帯の人の多さにまぎれてあっさり追っ手をまいたマックは、その足でシエ

ルミーを酒場兼用のボルノ劇場に連れ込んだ。

フェアリーダスト・シアター。目一杯悪趣味な劇場入り口の立体<sup>3D</sup>広告にあった演目は『恐怖のぬとぬと・美少女のいけにえ』。立体映像<sup>ホログラフ</sup>で十五秒おきくらいに繰り返し返されるさわりのシーンを一目見たマックは、「お、ここだ」の一言であっけにとられているシュルミーに有無を言わさずに入ってしまったのである。

「だいたいね、この程度で騒ぐもんじゃないぜ——あ、それともこのての、はじめて？」

軽く訊かれたシュルミーは、一瞬返事に口ごもってから、マックの意味あり気な笑みに思わず喚いた。

「はじめてなわけじゃないでしょ！ こう見えてもこういうのには結構詳しいんだから！」

マックはわざとらしく驚いてみせた。

「ほー、詳しいの」

「あたりまえじゃない！ もー大人よあたし！」

「初恋いつ？」

突然の問いに、シュルミーはまたも口ごもってしまった。

「えっ……と、七歳のときに……」

マックが声をおさえて笑い出した。のせられたことに気づいたシュルミーはぷーっとふくれて



ふんとばかりにマックから顔をそらした。

佳境に入ったステージが目に入った。急に目をそらすわけにもいかず、シエルミーは全裸の少女の体じゅうにまわりついた触手が微妙に蠢く<sup>うごめ</sup>のを見ている振りをした。自然に耳が熱くなってくる。

「無理すんなっての」

シエルミーはマックが注文してくれた幻覚剤、酩酊剤抜き、微量のアルコールのみという「ガキ向けの」カクテルを一気に飲みほした。

「ほー」呑みっぷりに感心したマックは、テーブルに身を乗り出した。「それじゃ、そろそろはじめようか」

「ぶはあ」

息をついたシエルミーはグラスを置いた。「なにを」

「作戦会議。ここなら盗聴機や、あいさつもなしに襲いかかってくるような礼儀知らずの心配はないからね」

言われて、シエルミーは店内を見回した。暗いライトにタバコや薬の煙<sup>ドラッグ</sup>が漂うその下で、八分の入りの客はステージのショーに歓声をあげ口笛を吹いて騒いでいる。

「へえ……それでなの」

少しは見直した——と言おうと思つてマックに向いたシェルミーは、眉根を寄せた。鼻の下をにへら、とのぼしたマックの目は、テーブルの横をモンローウォークしていった挑発的なコスチュームのバニーガールのヒップラインを追いかけている。

シェルミーは、テーブルの上のマックの左手をまた思い切りつねり上げた。

「あち！」

「ふんだ、あんなのがいいの!」

「人の手を破壊する気か?」

マックは左手を押さえてシェルミーを見た。

「そりゃまあ色々人には好みとゆーものが、え、と、作戦会議はじめよーか」

「つーん」

シェルミーはステージに顔をそらしかけて、あわてて反対側にそっぽを向いた。

「もー、知らない」

それきり、こちらを向こうとしない。

「おい……」

マックは両手をあげた。

「了解、わるかった。作戦会議が終わるまで他の女の子は見ない。これでいい?」

「……」

シエルミーは、マックを横目で見た。

「まあ、許してあげる」

「へーへ、ありがたいことです。で——そのお宝とやらは、この広いガーランド中継点ジャンクションのどこにあるんだい？」

「えーとね……」

シエルミーはわずかに首を傾げて額に指を当てた。

「まずね、要塞を探せって」

「要塞ね——地元コネクションの本部にでも殴り込みかけろってか？」

「そんなんじゃないわよ。もっとずーっと古くて、昔っからあるような要塞」

「旧要塞区のことかな」

本来、ガーランド中継点ジャンクションは、かつての母星レティシアが対外敵防衛のために作った軌道要塞その原型とする。中継ステーションとしての増設に次ぐ増設で、本来の要塞はとっくの昔にステーションの内部に埋没していた。

だが、軍用ということで設置されたバカみたいに巨大なエネルギー炉は未だに生きていて中継点全域にエネルギーを供給しているし、その中央部に装備された恒星破壊くらいしか使い道がな

いような超大口径の粒子砲の砲口は、今でもウエストサイドの港湾地区をびたりと狙っているという。

「まあ、この街にそんな場所ゴロゴロしてるからね。で、それから？」

「これからが本番。要塞のまわりにイシュタルって街ある？」

「さてね。イシュタルなんざここじゃありふれた地名だ」

「えーとね、イシュタルの唇とか舌とか、そんな感じの」

「イシュタルの牙かな」

旧要塞がイシュタルと呼ばれていたので、その周辺にはイシュタルがらみの名が多く残っている。イシュタルの牙は巨大粒子砲近く、武器屋や部品屋が多く集まっている地区である。

「牙だったかなあ……あ、うんとね、おっきなお化け屋敷があるところ」

「お化け屋敷？」

急に深刻な顔をして、マックは飲みかけたグラスの手を止めた。

「それならイシュタルの喉だ。有名な幽霊屋敷があった」

「そ、それよそれ。知ってんなら言ってくればいいのに。でね、そこのお化け屋敷の——」

「ちょっと待て」

顔色を変えたマックが、ゆっくりとグラスをテーブルに置いた。

「イシュタルの喉——確かか？」

シュルミーはきよとんとして、急に顔色が失せたマックに目を合わせた。

「だと思うけど？ どしたの？」

「冗談じゃない、あそこは閉鎖地域だぞ」

「デッドゾーン？ 何それ？」

「三年前に強制封鎖されて以来、誰一人としてあそこに入入りした奴はいない——それどころじゃない、少しでも命が惜しいと思う奴なら、あんな所に近づこうなんて考える前に港のドッキングポートから身を投げるはずだ」

マックは、ささやくように身を乗り出して声を低くした。

「あそこは墓場だ——ミイラとガイコツしか住んじやない」

ひととき甲高い悲鳴がホールをつんざいた。はっとしてステージに向いたシュルミーの瞳に、ぬとぬとの化け物にまわりつかれた全裸の少女が足首から喰われはじめてるのが映った。

思わず口もとを押さえたシュルミーはマックの肩をつかんで揺さぶる。

「食べられちゃう！ ねえ、食べられちゃうよ」

「はいはい、いけにえショーなんだから食べられちゃうの」

マックはシュルミーの頭を引き寄せて、耳もとにささやいた。

「安心しろ、トリックだよ。本当に消化されたりするんじゃないんだから。けどな」

「な——なに？」

シエルミーはマックへ顔を上げた。

「閉鎖<sup>ゾド・ゾーン</sup>区域てのはこんなトリックやスリラーハウスの特殊効果の産物じゃない。正真正銘、生きては入れない死人の街だ」

冗談ではないマックの目の色に、シエルミーは体を離れた。

「なによ——いくじなし！」

「は？」

「死体やお化けが怖くて、よくもパイロットだなんて言えるわね！」

「あのね——」

グラスのカクテルを一口飲んだマックは溜息をついた。

「恐怖心失<sup>な</sup>くしたら人間お終<sup>しま</sup>いよ。それにね、閉鎖<sup>ゾド・ゾーン</sup>区域で怖いのは幽霊やミイラじゃない」

「なによ」

精一杯意地を張ってにらんでいるシエルミーに、マックは一言で答えた。

「細菌だ」

「さいきん？」

シエルミーは目を丸くした。「さいきんて、あの黴菌ばいきんとか、微生物とかの細菌？」

マックはうなずいた。

「伝染病でもあったの？ それならそこらへんの病院で——病院でももぐりの医者でも、あるでしょ。ワクチン射うつてもらえば——」

「ワクチンで片がつくような病気なら、ガーランド中がよってたかって一区画まるごと密閉して封鎖するような騒ぎにはならないさ。事故だか何だか知らないが、生化学兵器が洩れ出したらしい」

「生化学兵器？ だってあれは汎銀河条約で生産も保有も禁止されて——」

「んなもんが守られるくらいなら世の中平和ね。」

旧要塞区のみわりつてのは、もともとダウンタウンダウントウンみたいなにぎやかな所じゃなかった。それが七年前のレティシア崩壊でガーランドにどっと避難民が流れこんで急に街をでかくしたんだ。で、何とか新しい街が出来上がって、いくらもたたないうちに、それが起きた」

首まで化け物に喰われたステージ上の少女が断末魔の悲鳴を上げた。シエルミーは反射的に耳を押さえた。

「イシユタルの喉に、死に神が団体で乗り込んだんだ。どっかのバカが、生化学兵器のタンクのふたを、街のど真ん中で開けちまったのさ」

「それで……」

シエルミーはかすれ声で訊いた。

「どうなったの？」

マックは両手を上げて肩をすくめた。

「洩れ出したのは、スピリット五五とかいう無茶苦茶に<sup>どうも</sup>獐猛な菌だったらしい。軍が戦略用に作った<sup>しろもの</sup>代物で、強力過ぎて使えないような奴だったそうだ。——何せ空気感染で死亡率百パーセント、一つの惑星を死の星にするのに半年かからないって話だからな」

「それで……？」

「最初の犠牲者が出た時、ジャンクション全域でチェーン経営してる病院のオンラインシステムで、とんでもない事がはじまったのがわかった。計算した奴によると、その細菌のおかげでガーランド中継点<sup>ジャンクション</sup>が全滅するのに七週間と三時間と出たそうで、ジャンクション中は一致協力してそれを回避する手段に出た」

「どうしたの？」

「被害者が出たブロックを、そっくりそのまま密閉しちゃったのさ。空気の循環システムを止め、エネルギーチューブを全部切って、全部の通路とダクト、その他ありとあらゆるイシュタルの喉のまわりの壁を、全部きれいに溶接しちゃった。イシュタルの喉っていう街一つを、そっくりそ



のままガーランド中継点ジャンクセッションの中から切り離したんですねえ」

「そ——れ、で？」

かなりショックをうけた様子でクッションの効いたシートに沈みこみながら、それでもシエルミーは訊いた。

「それっきりだ。犯人は旧ベルネード宇宙軍の残党だとか、星系軍の陰謀だとか、イシュタルに住んでた一人の人間が自殺するのにまわりの人間全部を道連れにしたとか、うわさだけは色々と言いたがね。あの時に、感染してたのと、そうでないのと、あわせて六〇〇万人も閉じ込めたまま封じ込められたイシュタルの喉は、それっきりそのまんまだ。もつとも、今でもあの街の外壁まで行くと、三年前に死んだはずの死人たちが盛大なカーニバルをやっているのが聞こえるって話だけどね」

血の気を失なくしたシエルミーは、ぶるっと肩を震わせた。

「知らなかった……」

「——他の鍵は？」

「え？」

シエルミーは顔を上げた。

「イシュタルの喉以外のヒントはないのかい？　まだお宝の山がイシュタルの喉にあるって決ま

「た訳じゃないからね、他のヒントから埋めていこう」

「あとはこれだけ」

首の後ろに手をまわして鎖をはずしたシェルミーは、胸もとからペンダントを出してマックに見せた。

「これだけ？——ちょっと見せて……」

ペンダントを手を取ったマックは、顔をしかめて見入った。もともと細工物にきく目など持っていないから、大したことはわからない。角が丸い五角形のメダルの中に、対角線を結んだ形で星型が刻まれており、それぞれの頂点にはスペクトル三原色——赤、青、黄——と白と黒の小さな宝石が埋めこまれている。星の中央には逆五角形がよくみがかれたプリズムがはめこんであり、内部に仕込まれた小さなエネルギーバックによってポケットライト代わりになるくらいの光を発生する。

裏側には、凝こったかざり文字で『提督アドミラルより船首フィギュア・ヘッド像へ、航海の幸運を祈って』と彫ってある。

「何のこと？ このフィギュア・ヘッドってのは」

「あたしのお母さんのことでしょ。船首像って大体女神だから——カッコつけてんのよね」

「ほー」

マックは、傷一つないペンダントの重さを確かめるように手のひらにのせた。

「大した値打ち物ではないな」

「それ、全部レディウムよ」

あっさり言われて、マックは危うくペンダントを取り落としそうになった。

「一財産だ……これだけの分量があれば高性能の宇宙艇が新品で手に入る——もつとも、この首飾りが確かにお宝のカギなら、戦略艦隊を司令部ごと揃え<sup>そろ</sup>られるけどな」

マックはシェルミーを指招きした。なに、と身を乗り出したシェルミーの首にペンダントをかけて、鎖を留める。

「大事にしまつとこう。他には？」

「それだけ」

シェルミーは、ペンダントを胸元に入れた。

「イシュタルの喉に行つて、スリラーハウスの占い師に会え、あとはこのペンダントだけ……」  
「それはまた何とも……」

グラスに残っていたカクテルを一気に飲み干したマックは、シェルミーに空のグラスを上げてみせた。

「幻となった宝物に乾杯」

「えっ？　なんで？」

「肝心の鍵が閉鎖区域クローズド・ゾーンの墓場の中じゃやりようがないでしょ。宝物なんてのは手の届かない所にある方が夢があっていいんだから。残念だけど宝探しはここで終わり」

通りがかりのウェイトレスに酒の追加を注文したマックは、ついでに彼女のヒップをつるんとなでて嬌声をあげさせた。

「ガーランドの中でどっか行ってみたい所があるんなら案内してやるぜ。それで……」

「や……やだ……」

シエルミーはうつむいたまま小声で呟いた。

「ん……？」

すーっとテーブルの上ののびてきたシエルミーの指に、向こうから歩いてくる銀色のバニー・ガールに色目を使っていたマックはあわてて左手をひっこめた。

「人の商売道具を壊す気か」

「なによ！ たかが細菌じゃない！」

裏返りかけた声で、シエルミーは喚いた。

「目に見えないような怖がるなんてバツカみたい！ 密閉されて三年もたつんなら、病原体だって死んでるかもしれないじゃない！」

「あのね」

「なによ、あっさりあきらめちゃってさ。考えればいくらだって方法あるでしょ。空気感染なら宇宙服着てくとか、オバケが怖いんならお守り持ってくとかあ」

げんなりした顔で話を聞いていたマックは、しばらく考えてからはあはあ息を切らしているシエルミーの顔を見た。赤くなった左手の甲をテーブルに出す。

「ドーぞ」

「よろしい」

シエルミーは出された手の甲を力一杯つねった。

「うわあ、ちつと……俺の左手再起不能になるんじゃないだらか——ん？」

「こらあ！」

出演者がひっこんだステージへ目をやったマックを、シエルミーはどなりつけた。

「他の女の人見ないっていったじゃないかあ」

「はいはい、だから誰も出でないでしょーが」

ステージ横のカーテンからのぞかかれていたような錯覚を覚えて、マックは目を戻した。

「ねえ、どこ行くの？」

下着同然のカッコした街ストリート・ガール 娼ソゴロや男妾が客相手にたわむれているせまい路地を歩きながら、シ

エルミーは先を行くマックに声をあげた。慣れた様子で人混みをすいすい歩いていくマックについていくのが精一杯である。

「着いてからのお楽しみ」

振り返ったマックは、意味あり気な笑みを返した。まわりにはいかがわしい器具やらオモチャ、薬などを売る店やサロン・バーが軒を連ねている。

「そんなこと言ったって、どこ行くのよ……」

不安そうにあたりを見ながら、シエルミーはぶつぶつと呟いた。立ち止まったマックに衝突しかける。

「心配？」

顔を見上げてなによ、と言いかけたシエルミーに、マックは面白そうな顔できいた。

「ふんだ！」

シエルミーはマックの足を思いきり踏んづけて、体を払って前を向かせた。

「行くんなら早く行きなさいよ！」

ぐいっと背中を押す。

「ど、どこ行くか、楽しみにしてるんだからあ」

「それはたのしい」

陽気に笑って、マックは歩き出した。細い路地へ入っていく。

かすれたネオンサインや色褪せた広告スクリーン、ぼやけたホログラフなどが、路地の周辺を飾っている。

ここでは、金さえ払えば出来ないことはない。どんな趣味にも、どんな好みにも応じる店が揃っている。その規模の大きさと内容の多様さでは、ここに比肩するのは自由都市タルトベガスの歓楽街ナイトバースくらいしかない。

「ねえ……」

ちらちらと後ろを見ていたシェルミーが、マックに追いついてきて腕にしがみついた。

「尾けられてない？」

「あら、やっぱり気がついた？」

「ええ？」

シェルミーは事もなげに言ったマックの顔を見上げた。マックは振り向きもしない。

「おまえさんにまで気づかれるようじゃ、尾けてんのは素人だね——それともわざと気がつくようにやってるのかな？」

マックは、いきなり横道へシェルミーを引っ張り込んだ。

「な、なに？」

「先に用事済ませよう」

「用事って……どこ？」

シェルミーは、ゴミカンや屑くずだらけの路地裏に建っている開拓星向けの簡易住宅を見上げた。

耐久性第一のカプセルハウスとはいえ、いつ崩れてもおかしくないようなくたびれ果てた外観をしている。

「クスリ屋だよ」

マックは、そこらへんの壁面パネルを応急でくつつけたまま使っているようなドアを開けて、中へ入った。

「うわ」

店内へ足を踏み入れたシェルミーは思わず声を上げた。「力一杯時代アナップの錯誤クワロ」

配線が切れてでもいるのか、暗い店内の壁に造りつけられた燭台で、赤黒い蠟燭ろうそくが静かな炎を灯している。本物かイミテーションか、いずれにしても曰く因縁いんねんがありそうな時代があった彫刻のある木製の棚には、セラミックのつぼやら封をされたガラスびんなどが所狭しと並んでいた。

「いらっしやい」

乾ききった口が出すような枯れた声が店の奥から聞こえた。目をこらしたシェルミーは、古びたカウンターの向こうに暗いシルエットがあるのに気づいた。



「お客さま、何をお探しですか」

壊れたタイプライターみたいな喋り方にぶるっと肩を震わせたシェルミーは、心細そうにマックの腕にしがみついた。

「何なのあの人って」

「そー怖がるなって。この界限かいはいであれだけ害のない奴は珍しいんだから」

マックは気にもせずにカウンターに歩いていった。訳のわからぬ星座盤やくすんだ光学ディスク、さびだらけの大仰なナイフといったガラクタが山と積まれたカウンターに肘をつく。

「情報探してんだけど、ある？」

すりきれた黒のベルベットのマントに、深いフードまで被った主人は、闇でかくした顔をわずかに上げた。

「神の眼をもってしても、この混沌の街を見透かすなど不可能事、ましてや……」

「見える範囲でかまわないぜ。死人の眼球めだまを買うくらいの金はある」

「ここでは信用クレジットは通用しませぬぞえ」

スカートのポケットからカードを出そうとしたシェルミーを見透かしたように、主人は風みたいな笑い声をたてた。

「よろしかろう。何の情報クワをお求めかな？」

「そーだねえ……」

カウンターに背を向けてもたれかかったマックは、天井で淡く輝いている魔法陣の紋様を見上げた。

「墓場の景気はどうだ？」

深いフードの内側が、かすかにぼわっと光ったようだった。

「相変わらず——ですな。風は止まったきりそよとも吹かず、消えた光のため影のみが動きまわり、恨みだけが満ちております。死人どものカーニバルも相変わらず盛んな様子——されども、あの時より何者も入っていない故、死に神の生き死にはわかりませぬ」

「なるほど」

ちんぷんかんぷんの顔をしてるシェルミーの横で、マックはしたり顔でうなずいた。

「で、墓場に行きたいんだが……」

主人のすきま風のような息づかいが、一瞬間こえなくなつた。

「あの時より、かの墓場への路はすべて閉ざされました。が、どうしてもというならイシユタルへどうぞ。そして、地図屋をお探しなさい」

「地図屋ね。あんがとよ。これで足りるか」

どこにそんなものを持っていたのか、マックはカウンターの上に女ものの派手な指輪を置いた。

「おお、これはこれは」

「釣りはいい。その代わり、抜け道を貸してくれ。尾けられてるらしいんだ」

「承知いたしました。どうぞあちらへ」

マントがかすかに動いて、店の片隅を指した。ひびだらけのガラスの裸婦像の向こうに、黒塗りの棺が立てかけてある。そのふたが、見えない手に引かれたようにすっと開いた。赤い絹のクッションで裏張りされたその底に、ぽっかりと黒い穴が口を開けている。

「ありがとよ。それじゃ」

主人に手を上げて、マックは歩き出した。シエルミーがあわててついてくる。

「またこんな所通るの？」

棺のドアの向こう側をのぞきこんだシエルミーは、眉をしかめてマックを見た。

「今度は床下じゃないよ」

「んなこと言っちゃって……」

ぶつぶつ言いながら、シエルミーはペンダントのライトを点けた。すっかりどす黒く汚れた建材の壁が照らし出される。

「ほれ、行け」

マックに背中を押されて、シエルミーはしぶしぶ棺の中へ足を踏み入れた。二重壁の間らしい

せまい通路が続いている。

後ろ手にマックのジャケットの裾をしっかり握りしめて数歩ばかり進んだ時、背後でものすごい音をたてて棺のふたが閉められた。シェルミーは悲鳴を上げかけた。

「いちいち大袈裟なんだから」

「だ、だって……」シェルミーは口をとがらせた。「だいたい今の店の人だっておかしかったじゃない」

「ほお、どこが？」

「マントの下、空っぽだった。幽霊だなんて言わないでよ」

「あら、よく気がついたね。そう、実はあの主人は幽霊」

「やだあー！」

「のふりしてるだけ。やばい客が多いからね。マントとフードの中はセンサーだけだ」

「おどかさないでよ、もう」

「墓場ってのは閉鎖区域のこと。風が止まってるってのは浄化や再生の機械も止まったままで、ここ三年間換気なしで空気が停滞しっぱなしってこと。死に神の生き死にってのは、洩れ出した病原体が、もう全滅したのやらそれとも犠牲者を待ちかまえて牙磨いてるのやらわかりませんち

ゆー事だ」

ルナティック・パーティーからキャンサー・サーカスへ戻る幹線道路の歩道を歩きながら、マックは情報の説明をしていた。

「まあ、ここらへんじゃこの程度の情報が限度だろうね。他になんか質問ある？」

「一つだけ、ある」

シエルミーは、上目づかいにマックの顔を見上げた。

「あの指輪、何なの？」

「指輪？ どの？」

「あのお店に置いてったじゃない。お金の代わりに、メイストーンの指輪」

「あ、あれか。——大したもんじゃない」

マックはわざとらしくシエルミーから目をそらした。

「何なのよ」

シエルミーは重ねて訊いた。マックはちらりとシエルミーに目をやった。

「気になる？」

「べ、べつにー。気になるわけじゃないけどさ、だけど……」

あわててまくしたてるシエルミーの顔を見て、マックはぼんと頭をこづいて笑った。

「誰にも言うなよ。さっきのラブホテルで拾ってきた」

えっと小さく叫んだシェルミーは、思わず立ち止まった。笑いながら歩いていくマックの背を、ぷーっとふくれてにらみつける。

「このー！」

駆け出してマックの脚を後ろから蹴とばし、そのまま追いついて逃げ出す。

「あれ、待てこのー！」

二、三步追いかけて、交差点に飛び出したシェルミーを捕まえる——なり、空気静浄システムが口を開けている街路灯の陰に引っ張り込んだ。

「きゃー♡」

一応悲鳴をあげてから、シェルミーはマックが太い灯柱の陰から向こう側を窺うかがっているのに気づいた。

「どしたの？」

肩を抱かれたまま、首を出してのぞいてみる。

「バカ、顔出すな！」

灯柱を背にして肩ごしのぞいていたマックがシェルミーの頭を押さえた。

「——何あれ？」

シェルミーは指差して訊いた。ガラスと鏡のモザイクのような大仰な門構えのホテル・プレシドの前の道路に、大型トラックとバギーのあいこのような装甲車両が停まっていた。

「軍の装甲トラックです……それも中古だの払い下げだのじゃない、ばりばりの現役で制式採用されてるロフトクルーザーの最新型だ」

八輪の巨大な低圧タイヤに載った低く構えた感じの車体に積まれた、高出力タービンエンジンの独特な回転音が低く聞こえている。戦闘用の装甲カバーをおろした運転台には誰かいるらしいが、ビーム防御用に高反射率の分厚いミラーガラスを使っているため影しか見えない。

「いったいどこの軍だ、こんなステーションの中に野戦用の車両なんか持ち込みやがって……」  
車体側面に、認識番号と略号が愛想のない軍用の字体でペイントされている。

「ちょっと待ってよ」

自分の頭を押さえていたマックの手をどけて、もう一度トラックの方をのぞいたシェルミーが頭を上げた。

「どうしてどっかの軍隊が出て来ただけで、あたしたちが隠れなきゃならないの」

「どうして軍隊が俺たちの泊まってるホテルの前にトラック停めてんだらうね……お、出て来た」  
三重の自動ドアのスライドガラスが開き、一個分隊ほどの黒ずくめの市街戦装備の兵が出てきた。三、四人の中で一人だけこれ見よがしに礼装用の軍服を着ているのがリーダーらしい。兵た

ちを見たマックは声を上げた。

「あの顔は星系軍だ！」

「星系軍で顔で選んでるの!？」

「んな訳ないでしょ、装備と雰囲気見れば見当がつくわい」

核恒星系連合軍、通称星系軍。銀河系ほぼ中央部の核恒星系の富裕な国家群が、その強大な資本力をバックに形成した宇宙軍である。本来、核恒星系の諸星系の防衛のために設立されたのだが、その守備範囲の広大さとそれをカバーするための強大な戦力のため、現代では一つの強大な軍事国家と言えるまでに巨大化していた。

「なんでまた星系軍がこんな所に……ガールランド中継点<sup>ジャンクセッション</sup>は範囲一杯で奴らの守備範囲から外れてるはずなんだけど」

大馬力タービンエンジンが重い唸りをあげた。兵員たちを呑み込んだ野戦トラックが発進する。交通の流れも考えずに急加速して、後続のトレーラーに急ブレーキを踏ませて道路に強引に割り込む。

「いっちゃった」

街路灯の陰から白い装甲トラックを見送ったシェルミーがマックを見上げた。

「どうする——あれ、どこ行った」



すぐ背後にいたはずのマックが消えている。探してあたりをきよろきよろすると、ドアを開け放した公衆TV電話ボックスの並びの中にいるのを見つけた。

「どしたのよお」

床面のドアラインに足を置いてすりガラスのドアを開け放していたマックは、受話器片手に左手を上げた。誰を相手に電話しているのかと脇の下からスクリーンをのぞきこむと、実映像ではなくリストの文字がぎっしり流れている。

マックは舌打ちして受話器をパネルに戻した。

「案の定でしたよ、センターポートに星系軍の重戦艦が単独で入ってるそうだ。それも外縁防衛の第七艦隊じゃなくて、中央星区担当の第一艦隊の所属だと」

「なんで？」

ボックスから出てきたマックに、シェルミーはきょとんとした顔で訊いた。マックは苦い顔をして、色褪せた人工の空を仰いだ。

「おまえさんの本家がある所でしょ、核恒星系中央星区」

シェルミーは小さく叫んだ。ファイダー・コンツェルンの本社ビル及びファイダー家総帥の居城は中央星区のオニキス太陽系四番惑星を丸ごと所有して本拠地としている。

S 14  
旧要塞区

オールド・イシユタル

「まことに申し訳ございませんが……」

生身の——ロボットでない——クロークを置いてあるホテルは、最高級スリー・スターに限られる。この道のベテランらしい支配人は、まことに申し訳なきさそうな顔をして、シェルミーにクレジットカードを差し出した。

「このカードは、二時間ほど前から効力を停止されています」

「効力停止？」

カードを返されたシェルミーは、その言葉が理解できなかつた。

「——上等じゃない！ VIP用のプラチナ・カードよ、誰が効力停止に出来るっていうの！」

「わかつたわかつた」

マックはホテルのロビーで暴れ出そうとするシェルミーを押さえ込んだ。

「どうも失礼しました。こいつ精神錯乱けの気があるもので——うわっち」

腕に噛みついたシェルミーをなだめながら、マックは年配の支配人に顔を向けた。

「カードの件は仕様がなとして、最上階の部屋に賊が侵入したのはそちらの手落ちでしょう。それとも、ホテル・ブレシドは正体不明の武装した一個小隊が苦もなく入れられるような警備をしているんですが」

「申し訳ありませんが——」

支配人は狡猾ことうかつそうな笑みを浮かべた。

「当ホテルではそのような事故は発生しておりません」

「なに？」

「さきほど、核恒星系連合軍の方がお見えになって同じ事を訊かれましたが、最上階のスイートルームは現在空き室になっております。ここ一週間、宿泊されたお客様はいらっしゃいません」

「なによこの……」

「落ち着けての、こら」

マックは猛り狂むさどおうとするシェルミーをつかまえてロビーのソファに押し込んだ。

「つまり、我々はこのホテルには泊まってないと、こーゆー訳ですな」

「そういう事になります、はい」

「あんなたち何考えてこの……」

「いーから黙ってなさいっての」

シェルミーをソファに押し戻してマックは身を乗り出した。

「持ち主不明の荷物がホテルのどっかに落ちてませんでしたかねえ」

「さて、持ち主不明の……何せ当ホテルは、身分の明らかでない方がおいそれと入れるような所ではございませんから」

わざとらしく考え込んでいた支配人は、顔をあげた。

「おお、そう言えば届け出のないお客様の忘れ物をカウンターで預かっていたように記憶しております」

支配人は手を上げて指を鳴らし、ロビーの壁に直立不動の姿勢をとっていたベルボーイを呼んだ。

「あー君、例のものをこれへ」

一礼して下がったベルボーイは、キャスターを押し戻って来た。

「あー、あれ」

シェルミーは声を上げた。忘れもしない軍用トランクケースと、マックのズタ袋マチルダが載っている。

「おー、あれだ。感謝しますよ支配人」

芝居がかった身振りで一礼したマックは、シェルミーの肩をつかんで立ち上がった。

「では、用事も済んだことだし、これで失礼します」

ソファから立った支配人にはこやかに頭を下げた。

「良いご旅行をお祈りします。またのお越しをお待ちしております」

「あなたって人は何を考えてんのよ！ あんな無茶苦茶言われてどうして黙ってられるの!? だいたいあの態度どーゆー訳!？」

「ったくぎゃーすかとうるさい子だねえ」

とりあえず荷物を持ってホテルから出て来たその前の路の上で、シェルミーは早速マックにかみついていた。

「あのねおまえさん、目の前の自分が置かれてる状況ってものを、どの程度理解してる?」

「何のことよ!」

喚き散らしたシェルミーが、息を切らしながら叫んだ。マックは頭を抱えた。

「少なくとも見積もつても、地元のコネクションにおまえさんのところのコンツェルン、それに星系軍なんて最大手までおまえさんのこと追いかけてるんだぜ。このさいホテルの事なかれ主義を一杯利用するべきだと思うんだけどね」

「どーゆーことよ」

シエルミーは口をとがらせた。マックは天を仰いだ。

「VIP用のプラチナカードが使えなくなっただけは、おまえさんの所みたいな大手のコンツェルンが手を回したんでしょお。星系軍が乗り出して来たのは、コンツェルンと軍が手を結んだのかどうかわからないけどね」

「だから？」

「だからってね、おまえさん」

マックはあきれ顔でシエルミーを見た。

「これだけ追っ手が増えりゃ充分でしょ。コネクションと軍隊二つに狙われてまだこの街を歩いていられること自体奇跡みたいなものなんだ。ホテルが俺たちのこと知らないってんなら、そうしといた方が得でしょ」

「コネクションと軍隊二つねえ」

シエルミーは顔をしかめて、道路へ首を巡らせた。

「あんまり実感ないんだけどな」

「そうでしょうよ」

マックは、目に手をあてて指の隙間からシエルミーを見た。

「こっちもそれで困ってるんだ。とほほ、えらいのスポンサーにしちまった」

四六時中レールと車体が悲鳴をあげているようなモノレールに乗って、マックとシエルミーは旧要塞区の西にあるイシュタルの牙へ降りていった。

その昔は大型船の建造・補修用の大ドックだったのだが、設備の老朽化と外部ブロックの増設によって本来の機能を失って廃棄され、今は単に「大穴」と呼ばれている巨大な吹き抜けの空間。ウエストサイドからガールランド最下部までのさしわたし一キロを越える巨大な井戸である。

壁面にらせん状に造り付けられたレールにそって、車輪駆動の旧式なモノレールが走っている。太古の恐竜のような壁面の構造物と、その間できらきら光っている市街区の明かりをみながら三ブロックも降下すると、落書きだらけの車体のモノレールは壁面の中へ入っていった。ブロックとブロックの間の壁の隙間や地下、上層部、また場所によっては街を下に見ながら通る高架を経て、イシュタルの牙の西のはずれにあるステーションへ到着する。

「ひっどい乗り心地!」

ジェットコースターのプラットホームみたいな高架の駅から、いつ崩れてもおかしくないような細い階段で降りてきたシエルミーは、すっかり化粧パネルが剝落して天井の構造物や梁がむき出しになった天井を見上げた。

「あーああ、お尻が痛くなっちゃった!」

「百年も前から、乗客サービスだの路線整備だのという言葉には縁がないからな」

マックはロボット制御で走り去っていく四両編成の小型モノレールを見送った。

むき出しの太陽灯が、恒星末期のような赤黒い光を落としている。廃材や屑鉄を山と積んだ巨大なダンブが、轟音とともに滑走路のような広い道を走り抜けていく。

「またずいぶんと淋しい所ねえ」

シェルミーは、角ばった巨大な倉庫が並ぶ街並みに溜息をついた。トラックやトレーラーはよく走っているが、歩いているのはあまりいない。

「武器屋の街なんてこんなもんさ」

マックは歩き出した。

「ここなら、カートリッジ一発から重戦艦まで何だって買える」

「重戦艦だって……戦争でもやる気？ あ、待ってよ」

先に行ってしまったマックを、あわてて追いかける。

「武器はいいけど、いったい何買うつもり？ もうカード使えないのよ」

「そんなバカ高いもん買おうってんじゃないんだから安心しなさいって。さて、ここでいいかな」  
マックは、モノレールの高架の下のひとときわ大きな倉庫の前で立ち止まった。

「うっわー」



屋根の上の巨大なネオンサインを見上げたシエルミーが低く声を上げた。「すっごい趣味」

パニーガールが大型のビームバズーカを持って、おいでおいでと手を動かしている。

マックは、倉庫の前に展示してある陸戦隊からの払い下げらしいスージー社あたりの対空戦車の横から、極彩色のアーチをくぐって中へ入っていった。『本日特別セール！ 三割・四割・五割引き!!』の垂れ幕をあきれ顔で見上げていたシエルミーがあわてて後を追う。

「すっごー……」

ガーランドジャンクショッ中継点の全域から——のみならず、外からも武器の買い付けに客が来るマーケットである。商人風やら商社風、海賊や山賊風までが、明るいライトの下に展示してあるというよりは放り出し、積み上げてある感じの武器の山を眺めながら商談している。その武器の山の統制のなさど汚れ具合を見たシエルミーは、若い女店員と話し込んでいたマックの袖をひっぱった。

「こんな所で大丈夫なの？」

「ジャンク屋とスーパーマーケットのあいの子みたいなもんだからね。荷物貸して」  
「えっ」

シエルミーはモノレールのステーションから引きずってきたトランクケースに視線を落とした。軽く腰を屈めて持ち上げたマックは、自分のズタ袋ともどもトランクをキャスターに載せた。

「んじゃ、よろしく」

「かしこまりました」

作業衣姿の女店員は、キャスターを押して整備工場の方へ消えた。

「何頼んだの？」

「<sup>トレイサー</sup>追跡発振器の点検」

「ええ？ だって、調べたじゃない」

ダウンタウンから旧要塞区へ降りる、がたびし揺れるモノレールの中で、簡単な荷物点検は済ませていた。マックの指示で、ホテルで返してもらった荷物に星系軍あたりが発振器をつけていなかったかどうか確かめたのである。なんもんあるわけないでしょ、とのシェルミーの文句通り、収獲はなかった。

「プロがど素人にわかるような仕掛けはしないとと思うんだけどね」

うさんくさそうに見えるシェルミーに言い訳して、マックは柵や作業台<sup>ワーク</sup>で埋められた倉庫の中を歩き出した。

「何探すの？ 戦闘機？ それとも戦車？」

「全面戦争の戦略兵器」

「正気？」

「まさか」

マックは、旧型の機動戦機やら宇宙戦闘機などが天井から吊り下げられているのを見ながらあつさり言った。

並んでいる兵器類の種別も用途もほとんどわからないシエルミーは、解っているふりで周りの機械を見ている。

「まずは……」

「まずは？」

「タイプVの——おまえさんの手持ちの大砲用のカートリッジを一箱、出来れば耐用期限内のを」

「撃てれば何だっていいじゃない」

「これだ」

マックは難しい顔で腕を組んだ。

「次に、閉鎖区域突入のための装備を揃える」

「どんなの？」

「地図が必要だな。それに、対生化学兵器用に強化された防護壁を突破するための強力な大砲」

「正気？」

「そーよ」

「地図や大砲だなんて、未開惑星にでも探検に行くつもり？」

「似たよーなもんでしょ。——もつとひどいか——ん？」

マックは、携帯用重火器の展示台の終わり近くになって足を止めた。大口径の対戦車ライフルやビームバズーカ、ミサイルランチャーなどの、並の生活ならばまず使い道のないゲテモノじみた飛び道具が山と積まれている。

「何かいいのあった？」

さつきよりは武器のサイズが大きくなったことくらいしかわからないシェルミーが、マックを見た。

「いや……そのプレタポルテの対空ミサイルランチャーとライトラインの長距離<sup>ロングレンジ</sup>ライフルの間の粒子砲……」

「どれ？」

素人目に大型ライフルとビーム砲の区別がつかうわけがない。マックは、オリブドラヴのミサイルランチャーと黒色の大型ライフルの間に立てかけてある金属地むき出しの太い物干し竿を指した。

「なに？ これ？ おっきなデクノボー」

「デクノボーじゃありません、機関砲です。——うえ、機載用のスーパーラップだ」

マックはそばをうろついていた、白髪のマッドサイエンティスト然とした親父<sup>おやじ</sup>を呼んだ。

「このスーパートラップ、使えるのかい」

「へえ、お客さんお目が高いねえ」

親父は腰のホルスターからポケットコンビューターを出してキーをたたいた。

「こいつは——使えますよ。重戦車くらいなら一発で吹っ飛びませ」

「そりゃそーでしょーよ。これは——機動歩兵用のドラゴン・ファニーの四七〇〇だろ」

「お客さん詳しいねえ」

スコープ・アイを額に上げた親父は、粒子砲に手を触れた。

「けど、ちょい違いませ。こいつぁ同じドラゴン・ファニーでも戦闘機や何かが使うとる七六

〇〇用じゃけん」

「やっぱり……」

マックが昔乗っていた宇宙戦闘機ベアトリーチェが同じ粒子砲を機首に六門積んでいた。機動歩兵用に、同型式を出力低下したものがあつても知つてゐる。

「だけどね親父さん、どうして戦闘機用の粒子砲なんてあるわけ？」

「ベアトリーチェのⅢ型だったかⅤ型だったか、旧宇宙軍のスクラップが入荷した時に、うちの物好きがよつてたかつて組みあげましてん。どうでつか、安くしときませ」

怪しげな辺境なまりをまくしたてる親父に、マックは考え込んだ。

「スーパートラップのドラゴン・ファニー七六〇〇か……使えるのかい？」

「戦闘機用や言うても、一門だけですしな、照準用モーターだのごっつい管制装置だのは全部とつぱずして軽うしてありますさかい、持ち歩きは楽でっせ」

「しかし機載用のジュネレーター持ち歩くわけには……」

携帯用の火器はエネルギーを封じ込めたカートリッジ式が一般的だが、戦闘機や戦車のような強力なエンジンを搭載しているものはエンジンに付加したジュネレーターから火器へエネルギーを供給するものが多い。ベアトリーチェもⅡ型以降はその型式を採用していた。

「お客さん通でんな。安心しなはれ、ちょうど、ぶっ壊れた試作品の機動スーツの出物がありましてな——どこぞの宇宙軍が長時間作戦用に特注したもんらしいんやけど、これのバックバックがやけに高出力のエネルギーバックをつけとりまんねん。そやさかいエネ・バックだけスーツからひっぺがしてこいつと組み合わせましたら——そりゃパワーブースターはずしとりますから、オリジンより二割かたパワー落ちしとりますが、ばっちり使えましたぜ」

「ほーお」

マックは、全長二メートルはありそうな粒子砲に手をかけた。

「お客さん、撃ってみますかい？」

「何ちゅー重い」

戦闘機用の粒子砲を人間が振りまわそうというのだから重いのが当然なのだが、マックはぶつぶつ言いながら粒子砲をかつぎあげた。機関部の下のパッドを肩にのせて、長い砲身を標的ターゲットに向ける。

「大丈夫？」

そばで、オーバーサイズの借り物のゴーグルを額に上げたシェルミーが二〇メートル先のターゲットを見やった。重戦艦からとってきたような防護バルジの射的台の前に、どこかの装甲車両からはがしてきたらしい傷だらけの複合装甲板が五枚重ねで置いてある。

「どんな具合ですか」

粒子砲の機関部の横に追加装備された、対空ミサイルランチャー用らしい電子／光学併用式のごついターゲッтスコップをのぞくマックに、メカニックの女の子が心配そうに訊いた。

右肩にのせた粒子砲を押さえて、左手でダイヤルをまわして距離を合わせたマックは、今度はトリガーグリップを押さえて機関部の後部へ右手をのぼした。

「本当に出力最大マキシマムパワーで撃つっていいのかい？」

「メカの方は保証します。ただでもパワーダウンしてますし」

機関部の後ろからのびた大容量エネルギー伝導用のフレキシブルチューブが、床のエネルギー

バックにつながっている。機動歩兵用のバックバックから分解したもので——バックバック丸ごととなると、普通の人間が背負えるものではない——簡単な出力調節機構がつけられている。

「ただ、お客さまの方は……」

メカニックは少し口ごもった。「粒子砲っていっても、これくらいのクラスになると結構反動もありますし」

「口径二〇〇だよね——よし、エネルギー送ってくれ」

作業衣姿の女の子は屈んでエネルギーバックの回路を開いた。

のぞいているスコープの中のスクリーンの隅に表示されている出力係数が一気にはね上がった。機載状態でドラゴン・ファニー七六〇〇の限界出力は一四〇パーセント、ありあわせのエネ・バックを接続した中古品の場合は——。

「パワーゲージは？」

「このエネ・バックだと八〇が限度です」

「了解。ゴーグルして」

シエルミーに目くばせしてから、マックはスコープの円環レティクルの中心にターゲットを捉えた。

額からシューティング用のレンズ面の広いサンクラスをおろし、大口径のビームライフルから拝借してきたらしい太いグリップのトリガーを引く。



すさまじい発光に、スコープ内のスクリーンに自動的にフィルターがかかった。出力八二パーセントで発射された粒子ビームは、熱を感じられるほどの光を放った。

「……終わり？」

スコープから目をはなしたマックを見て、シエルミーはゴーグルをはずした。マックはひょうと口笛をふいた。

「装甲車を二台貫通だって。ほんとにあれ戦闘用の装甲板かい？」

マックは、簡単に三〇センチの穴をあけて四枚も貫通された装甲板へ顔を振った。五枚目もかなりえぐられて、穴からはうっすらと煙が立ちのぼっている。

「戦車用の——アクサス・クラスの戦車の側面装甲板です。最後の一枚は前面ですけど」

メカニックは、試射台のコントローラーに手を触れた。ガイドレールが動いて、装甲板を固定した台が動いて来る。マックは、巨大な粒子砲をライフル用の試射台にバランスをとって置いた。眼の前に来た装甲板に開いた穴をのぞく。

「確かに装甲板だなあ」

合金や複合材、発泡材料などを多積層構造にした、厚さ十五センチはありそうな装甲板である。溶けた穴から内部の重層がのぞいていて、うっすらと煙をたてている。

「うっかりした所でぶっ放すと外壁に穴開けちまいそうだね。しかし——これじゃ売れんわな」

「あは、やっぱりわかりますか？」

メカニックの女の子は困ったような顔をした。マックはしたり顔でうなずいた。

「いくら長射程の粒子砲でも、手持ちで、こんなありあわせのスコープじゃがたつと命中率が落ちる。これだけでかいと白兵戦じゃ小回りがきかないし、偏向フィルターを丸ごと解除したから発光も見られたもんじゃない。破壊力だけは言うことないけどね」

「売れなくて困ってるんです。今、特別セール中ですしこれは現品限りで、すっごくお安く納めてますけど」

メカニックは、ディスプレイ付きのポケットコンピューターを出してキーに指を走らせた。

「こんな具合です」

ディスプレイに出た数字をマックに見せる。

「このエネ・バック特注品でしょ」

マックは床に置いたままのエネルギー・バックを軽く蹴とばした。背負うための合成素材のベルトがベルト留めしてある。

「容量は？ 何発くらい撃てるのかな。第一、撃ち止めにしたらこのデカ物、ただのデクノボーにならない？」

「それだったら心配ありません」

メカニックは笑った。「使い切っても、再充填できます。弾帯ごと持ち歩くよりかさばりませんし」

「そりゃ弾帯やカートリッジと持ち歩くよりはね……」

グリップに手をかけて、小型軽量化されているというふれこみのエネ・バックを持ち上げてみた。

「おーお、中身の詰まったトランクだあ」

「もっと足の幅広げて！」

「スタンスう？」

「脇しめる！ 両手をしっかり固定して、アゴひいて！」

「一度に言わないでよ！ 訳わかんなくなっちゃうじゃない！」

試射台の前で、大きすぎるような閃光防御用のゴーグルを付け、軍の放出品らしいぶかぶかの手袋をはめたシェルミーがライトラインをかまえている。

「サイトと照星を標的にあわせる。息を整えてターゲットをにらみつけ、その気になったらトリガーを引く——ほれ、肩から力抜いて」

隣の試射台に、パーツの山からグラムいくらで買ってきたライトラインの部品を散乱させてい

るマックは、椅子に浅く腰かけたまま肘をつけて口先だけでシュルミーにあれこれ教示していた。「とにかく、問題のありそうなパーツは全部取り換えて組み直したんだ、それで当たりが悪けりやお前さんの腕のせいよ」

「うるさあい！」

出来る限り慎重に、十五メートル先の装甲板にありあわせのペンキで描かれた同心円のターゲットに狙いをつけたシュルミーは、引き金をひいた。

「ひくんじゃない、絞るの」

「きやつ」

タイプVのカートリッジを一度の発射で使い切る最大出力にボルトを合わせたライトラインが、鋭いビームを放った。

全エネルギーを発射回路にまわしているから、ライトラインには反動軽減のためのマズルブレイキヤリコイルバランサーなどない。シュルミーは、全力発射の反動でライトラインの銃口を腕一つ分もはねあげた。排挾口エリエクシジョン・ポートから使用済みカートリッジが飛び出す。

「なっにい、これ」

シュルミーはあらためて両手で支えたライトラインをしげしげと見た。

「すっごい手応え……他の銃みたい」

「それがライトライン・ミリタリーの本来の威力です。しかし……」

装甲板のターゲットを見たマックは、難しい顔でサングラスを額にあげた。

「本当にあのターゲット狙った？」

「なによお」

かろうじて装甲板の上端をかすめた弾着点を横目で見て、シェルミーは目をそらした。

「ちゃんと当たったじゃない」

「ターゲット描いた板にはね。直径の倍もずれた所に」

「うるさい」

「ねえ、銃を換える気は、ない？」

「えっ？」

シェルミーはきょとんとして、思わずライトラインを抱きしめた。マックはライトラインを指した。

「それじゃ大きすぎるんだ、おまえさんには。パワーも必要以上にありすぎる。もっと小さくて扱いやすい、護身用くらいのがいいと思うんですけどね」

「やだ！ 絶対やだ」

ライトラインをひしと抱きしめたまま、シェルミーはくるりと背を向けた。

「あたしこれじゃなきややだ！」

「あっそ。それじゃ次だ。マニュアル・セフティ安全装置のレバーをフルオート的位置にする」

慣れていればグリップを握ったまま、右手の親指一本で切り替えられるのだが、シェルミーは左手でやっとレバーを動かした。

「かまえて。十二一ダース発入りの弾倉、はじめにチェンバーに入れといた分を撃っても差し引き十二発丸ごと残ってる。フルオートだとそれがたて続けに連射されるわけだ」

「今みたいのが十二発連続う？」

シェルミーは、いささかぞつとしない顔でライトラインを構え直した。

「ライトライン・ミリタリー、モデルⅧの全力斉射だ。自分の持ち歩いてる武器がどの程度のパワーを持つてるのか、しっかり覚えるように」

「はいはい」

生返事をして、シェルミーはライトラインを支える手にぐっと力をこめた。息を止め、トリガーを引く。

「うわたたたたたあ！」

「やっぱり」

全弾斉射の反動で、ものの見事に頭の上まで銃口をはねあげて尻もちをついたシェルミーに、

マックは目を覆った。

「致命的に腕力が足りませんね」

「あー、びっくりした」

床にへたりこんだままのシェルミーが、ふうと息をついてマックに顔を向けた。

「どお、当たった？」

マックは黙ってターゲットの装甲板からシェルミーの頭上にまで連続した弾痕を指で示した。

「よくもまあ天井がぶち破れなかったもんだ」

「あんな小さい所に当たるわけないでしょ！」

「なにもど真ん中ぶち抜けて言ってるわけじゃないでしょ」

マックは溜息をついて、まっさらのターゲットを見やった。

「十五メートル先の直径一メートルの的中へ命中させてほしい、と言ってるんだ。——無理な

注文ですかねえ」

「できっこないわよ。えーと、どうやるんだっけ……」

ストップバーをはずして、危なっかしい手付きで空になった弾倉マガジンを落としたシェルミーは、試射

台に置いてあった次の全弾装填済みの弾倉マガジンを勢いよく機関部にはめこんだ。

「頼むからターゲット描いた板に当ててくれよ」

「わかってるわよお」

「ライトラインの軍用エネルギー・カートリッジ、タイプVHL強装弾二箱、ライトライン社系のビームガン及びライフルのパーツを一キロ、試射室の使用二時間、——標的代はサービスです。それにドラゴン・ファニー七六〇〇と機動歩兵用エネルギー・バック一式、——店長、この値段でいいんですか」

カウンターで品物のリストをレジスターにうちこんでいた店員が、店の前の装甲車の横で客の相手をしていた店長を呼んだ。

「あー、そいつはお客さんの勝ちや」

店長は商談の片手前に、正面入り口そばのカウンターに叫び返した。

「赤字商売や、これやからもうからん」

「はあい、わかりました。それと——このお荷物のチェック」

女店員は、下から出したトランクとズタ袋をカウンターに置いた。レジのディスプレイに出てくるデータを読み上げる。

「チェックは四種、スキヤナーは八種使いました。トランクにはマイクロトレーサー二つ、それに軽微な追跡用の放射性塗料が底面から検出されました」



「中和しといてくれた？」

「痕跡も残ってませんわ。こちらの袋には、何もありませんでした」

「あれま」

マックは気のぬけた顔で店員から目をそらした。「安く見られたね、これは」

「以上で、これだけになります」

軽い音のチャイムとともに、カウンターを挟んだ客側のディスプレイに細目と合計金額が出た。「必要経費、よろしく」

ジャケットをひっかけまわしはじめたシェルミーに代わって、マックがカードを出した。ガーラ  
ンド中継点他、半径五〇光年に数千の支店を展開しているというふれこみの大手銀行シャトルス  
ターの光電子カードである。

「クレジットカードですね、かしこまりました」

「大丈夫なの？」

レジに出ている金額の桁数を気にして、シェルミーがマックのジャケットを引っ張った。

「前の仕事の分が入ってれば何とか……」

レジスターのスリットから戻ってきたカードを受け取ったマックは、カードのタッチセンサーに触れた。液晶の表示窓に残額が出る。

「おーお」

のぞきこもうとしたシェルミーの目の前でくるりとカードを裏返し、怪訝けげんそうに見上げた額を  
ぺんぺんとはたく。

「余計な心配はせんでもよろしい。えーと、ちょっと訊いてもいいかな？」

「なんでしょう？」

店員はにこやかに対応した。

「ここらへんで一番詳しい地図屋は？」

「一番確かなのでしたら、中央街区のレファード不動産へどうぞ。ただし、アヴドールのビルで  
すから気をつけて下さいね」

「アヴドール？」

マックは思わず訊き直した。シェルミーがマックをつつく。

「何だっけ？」

「地元コネクション。えーと、オフロードーかコンバットバギー、レンタルしてもらえる？」

街はずれの、廃材を寄せ集めて作ったような安ホテルに宿をとった。

「人間の住むところじゃないわよ！」

「いちいちうるさいお嬢さんだねえ。人間、ホコリじゃ死なないから安心しなさい」

「そんなこといったってえ」

シエルミーは、貨物船からはがしてきたような細身のパイプ作りのベッドにトランクを放り出し、その足でベランダの大窓に手をかけた。これもどこから持って来たのか、放射線か高熱で所がステンドグラスのように変色した一枚ガラスを観音開きに開け放つ。ブーツを踏み出したとたん、足元でじやりっと音がした。

「うっわー」

思わずガラス扉に手をかけて室内に戻り、さして広くないベランダに視線を落とす。一面に玉砂利でも敷きつめたように細かい金属片やら何やらが散らばっている。

「何てとこだろ」

見渡しても、装甲車専用みたいな駐車場やら武器屋の展示場ばかりが目につく。色気と食い気で売っているダウンタウンヤルナティック・パーティーとは対照的である。

シエルミーは、ベッド二つに申し訳程度の調度品しか揃そろっていない室内へ振り向いた。

「ねえ、あたしやっぱこんな所嫌だ」

「ぜーたくいわないの。俺たちやおたずね者よ。こんな場末の無人ホテルでもなけりや、あっという間にアシがつくぜ」

壁際の、スクラップ置き場から盗んできたようなボロいコンピューター端末の前にカフェバー用らしいスツールを持って来て陣取ったマックは、シュルミーを見もせずトレィサにスイッチを入れた。「あのど高級ホテルから戻ってきた荷物にも、しっかり追跡発振器つけられてたでしょ。ここに来たのはもうばれてるんだ、のんびりしてるわけにはいかない」

旧式のうえに老朽化しているらしく、予熱にたっぷりと時間をかけて、ディスプレイにやっと絵が出てきた。コンピューター・グラフィックのイメージイラストのもやもやに、毎度ご利用ありがとうございますの文字がかぶさる。

「さーてと、このボロボロ本当にコンピューターネットワークにつながってるのか」  
「何やってんの？」

単調な外の景色に飽きたシュルミーがやって来てディスプレイをのぞきこんだ。マックは、二、三回同じキーを叩かないと用をなさなしいかれたキーボードを相手に、何事か打ち込んでいる。「とりあえずサービスで解る範囲で、喉への侵入経路を探す——えい、まともに入力も出来んのか、今どきキーボードなんて」

サービス用のコンピューターは、音声入力が普通である。苦勞してやっと要求を打ち込むと、ずいぶん待たせてからコンピューター作画の線ワイヤフレーム図が浮かび上がった。

「これは？」

「イシュタルの牙、旧要塞区ブロックナンバー東の五五〇四一——ここより先のデータは入っておりませんか？」

マックはキーを叩きなおした。

「こりゃ手間かかりそうだ。イシュタルの喉関連のデータ全部にロックがかけられてんのか、それとも丸ごと抹消されたか」

「どことつながってるの？」

「公共サービスのコンピュータネットワーク。それでは、アプローチをかえて……」

ガーランド中継点<sup>ジャンクション</sup>は、ほぼ銀河標準時に同期した二四時間制の最もポピュラーな暦によって動いている。もつとも場所ごとに時差があったり、港灣地区<sup>ベイエリア</sup>や月色広場<sup>ルナティック・パース</sup>などの風俗営業地帯のように昼も夜もなく動き続ける街もある。

イシュタルの牙を含む旧要塞区では、全域と同じ二四時間周期の太陽灯コントロールを行っていた。夕刻から夜にかけてゆっくり天井の太陽灯の照度を落とし、朝には逆に回路を少しずつ開いて照度一杯にもっていく。昼間は照度一定のままで、高級な恒久照明システムのように惑星の自転を模して天井の太陽灯の照度や照射方向を変えるようなことはない。

本物か人造物か、葛のからみついたベランダに肘をついて、シェルミーは夜景を眺めていた。

昼間なら金属地むき出しの建物や武骨な装甲車両ばかりが目立つイシュタルの牙も、天井の太陽灯が消えた夜は細かい光の海になる。

天井の消え残りの太陽灯が深夜モードで星のような細かい光を放ち、パネルが地上の灯火を反射する。地上では型式もエネルギー源も統一されない街灯や窓明かり、そして光熱費節約のためか最低限度まで光度を落としたネオンサインや幽霊のようなホログラフの光が連なり、天と地の双方が淡い光の海を鏡で合わせたように広がっていた。

他の部屋から、音の割れた陽気なアコースティックが聞こえている。

「夜なら、少しはきれいなだけだな」

溜息をついて、シェルミーは手すりから離れた。

部屋の中には、コンピューターのプリントアウトの紙が散乱していた。通り路の用紙を拾い集めながら、シェルミーはずっとコンピューター相手にキーボードをたたいていたマックに近づいた。

「どお？」

「だーめだ」

マックは、ディスプレイに出ているイシュタルの牙中央市街区らしい細密地図にプリントアウトのスイッチを押して、頭の上で手を組んだ。シェルミーは傷だらけの丸テーブルの上にプリン

トアウトの束を置いて、オートメーションのルームサービスでとったコーヒーポットを取った。安物のプラスチックカップにコーヒーを入れ、うろ覚えの分量の砂糖とミルクのカプセルを入れてマックに渡す。

「お、ありがと」

プリントアウトした紙に、ディスプレイと同じ絵が欠落なしにプリントされているのを確かめて、マックはスイッチを切った。

「五回に一回はミスプリが出るから——うえ」

コーヒーを一口飲んだマックは、シエルミーから顔をそらした。

「あれ、分量間違えた？」

「甘過ぎ……」

「そーお？ 貸して……ちようどいいじゃない」

マックのコーヒーを一口飲んだシエルミーは小首を傾げた。マックは化け物でも見るような目でカップを見ている。

「まあいいや、飲んどけ。俺はちょっと出掛けてくる」

「どこへ？」

シエルミーは大きく目を開けた。マックは肩をすくめてみせた。

「怖い所」

レファード不動産のある年代物の雑居ビルは、階層ごとに広告看板アド・スペースをきらめかせながら中央街区にそびえていた。

「だからね」

街灯のこわれた、ビルとビルの中の暗い脇道に突っ込んだ小型の中古バギー、スージィのビルフォックス311改造のオープンシートで、マックは額を押さえた。

「そこらへんのコンピュータ端末と俺の腕じゃ、ネットワークを突破してがっちり封鎖されるイシュタルの喉のデータを盗み出すことは出来ない。仮に突破した所で、閉鎖ロックアウト区域関連のデータは丸ごと消されてるかもしれないね。となると、封鎖前封鎖後のデータをきっちりおさえるはずの不動産屋にもぐりこむしかないでしょ」

「一人で出来るわけないでしょ」

助手席パシジャーのシュルミーは口をとがらせた。

「しっかり銃や何かまで持ち出してさ、もし見つかつたらどうするつもり？」

「地元コネクションのビルにもぐりこもうつてのに、おまえさんみたいな有名な、連れていける？ 不動産屋って言ったって、実質はコネクションの資金源だぜ」



「大丈夫よ」

シエルミーは、慣れた手付きで太腿のホルスターからライトラインを抜いてみせた。マックは暗い夜空を仰いだ。

「危ないからしまつときなさい。だいたい、ドロボーや強盗の経験ある？」

「あるわよ、たくさん」

あつさり答えたシエルミーを、マックはぎよつとして見た。

「あたしね、学校の寮からしよっちゅう脱走してんだ」

マックは軽い頭痛を感じてこめかみを押さえた。

「一度も見つかったことなかったんだから」

「わかった。わかったよ。それじゃ重要な任務を与える」

「なに？」

シエルミーはうれしそうに身を乗り出した。

「大切な仕事だ。これがないと非常に危険になる。いいか、ここであの雑居ビル見張ってくれ」

「それから？」

「戻って来たらすぐ逃げられるように待っていてくれ」

「それだけ？」

「それだけ」

シエルミーはがくつとうなだれた。

「ま、待て、落ち着け」

あわてるマックの鼻先にライトラインの銃口を突きつける。

「連れてけ」

「わ、わかった、わかったよ。わかったからその大砲ひっこめろ！」

シートへのヘッドレストに手をかけて、マックはバギーの低いシートから道路へ降り立った。シートをはねあげ、その下にある車載工具のケースを開く。

「どっか壊れたの？」

シエルミーは所々迷彩塗装のはげたコンバットバギーのボディを見まわした。

「警報切るの」

マックは巨大なワイヤーカッターを持ち出した。緑石を踏んでマンホールのふたをはねあげて、ボケットから出したビル周辺の配電図のプリントアウトを街灯にすかしてみる。

「単純な配線で助かったぜ」

「これで単純？」

シートから降りて、道路上の配電ケースの中をのぞきこんだシエルミーは声を上げた。高容量

伝導管やファイバーケーブルなどが数種類数十本も埋めこまれている。

「えーと……これかな」

細いデータ用のファイバーケーブルを引っ張り出して、ワイヤーカッターで切断する。合成被膜の中から、細い銀の髪のようなファイバーが束になって垂れ下がった。

「おまえさんの大砲貸して」

シュルミーに手渡されたライトラインのパワーボルトを最弱レベルに調節したマックは、銃口をファイバーの切り口に押しつけた。

「どーすんの？」

「警報焼き切るの」

ビームを発射する。暗い街角に一瞬だけ鈍い光がフラッシュした。発射時の熱で溶けたファイバーケーブルが玉になる。続いて反対側のファイバーにもビームを撃ち込む。

「さーて、行こうか」

シュルミーにライトラインを返して立ち上がったマックは、バギーのリヤゲートに積みこんできた粒子砲にかぶせた防水布のシートをはがした。

「殴り込みに向くエモノじゃないんだがね」

「自分で選んだんでしょ」

シェルミーは、うれしそうにライトラインをビルめがけて構えた。

「わあ、ドロボーってはじめでなんだ。わくわくしちゃう」

「俺はドキドキしてるぜ」

「大丈夫なのこれ？ 崩れたりしない？」

「体重が心配ならダイエットでもするよ——あた、蹴とばすな」

マックとシェルミーは、雑居ビル裏の半壊したような非常階段を足音を忍ばせて登っていた。

マックはスーパートラップの粒子砲を肩にかつぎ、シェルミーはライトラインをしっかりと握りしめている。

その昔、銃撃戦でもあったのか所々に弾痕や融解跡のある細い階段を三階まで登る。

「ま、なんつードアだ」

装甲車両のスクラップを流用したようなごつい耐爆装甲のドアを、一応ノックしてからマックはハンドルに手をかけた。

「ごめんください」

細めにドアを開けて中をのぞく。脇の下から首を出したシェルミーがマックを見上げた。

「誰もいないね」

「営業時間はとくに終わってる」

臨時に配線したような電灯が点々と続く廊下に、人影はなかった。清涼飲料や軽食の自動販売機やゴミ用のコンテナなどが薄汚れた廊下に散在している。

「きつたない所……ねえ、どうせ忍び込むならもっときれいな所にしよう」

「それじゃバギーで待っててくれ」

ドアを開けて、マックは廊下へ足を踏み入れた。

「あ、そのマット踏むなよ」

「え？」

「感圧式の警報が……」

「あ、ごめん」

うわずったシュルミーの声に、行きかけたマックはぎくつととして振り向いた。シュルミーはひきつった笑いを浮かべたまま、一步踏み出した形で硬直している。

「踏んじやった……」

「あらま」

ワンテンポ遅れて全館に、神経にさわるような電子音の警報が鳴り渡った。

「おーお、うるせー呼び鈴だこと」

「どどどーさんの？」

「家間違えましたって帰ろうか」

肩のスーバートラップの安全装置をかついだまま片手で解除して、マックはずかずか歩き出した。階下や上の方で何やらどたばたと聞こえはじめた。

「えー、ここだったかな」

中ほどの、全体的にゆがんだ感じのブレハブドアの前で立ち止まったマックは、ドア本体よりはるかに頑丈そうな二重電子ロックシステムを軽くたたいた。

一歩下がって、よっこらしょっと粒子砲を向ける。

トリガーに指も当てないうちに、内側からドアが開いた。マックはすかさず飛び出してきた大男の目の前にスーバートラップの砲口を向ける。

「何だあ——あ!？」

「こんばんわ」

「な、なんだてめエは!？」

余熱済みの砲口を向けられた男は、毒づきながらもたじっと後退った。

「客です。ここ、レファード不動産でしょ」

砲口で男を室内に押し戻したマックは、素早く店内に目を走らせた。きんきらのシャンデリア

の下に安物の応接セット、ドアが開きつ放しの奥の事務所から、さらに二人ばかり走り出て来た。「早くドア閉めて」

いっばしの強盗きどりでライトラインを構えて入ってきたシュルミーに指示して、マックは出て来た男どもに出来るだけにこやかに笑いかけた。

「こんばんわ。あの、アパート探してるんですけど」

「営業時間はとくに終わってんだ、このやろー！」

巨大な粒子砲をかついだマックにいささかたじろぎながら、片方が喚いた。

「すいません、急ぐもんでね、ご迷惑おかけしまして」

「ここがアプロードのビルだって解ってんのか！」

マックは面倒臭そうな顔をして、二人の方へぐいっとスーバートラップの砲口を巡らせた。

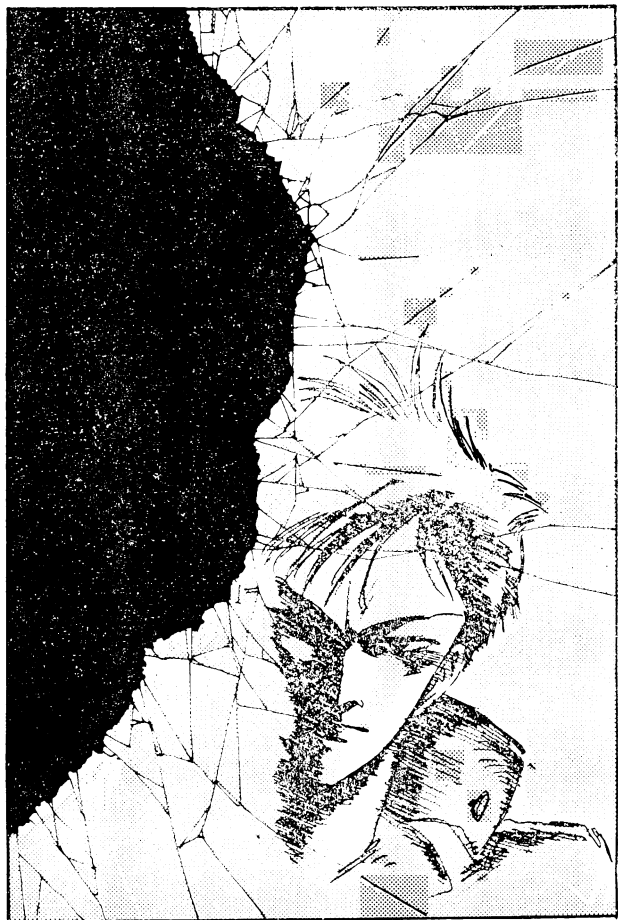
「知らなきゃこんな大砲持ってくるか——おっと」

照準から外れたとたんに飛びかかって来ようとした大男に、マックは素早くスーバートラップを回した。

「わぎゃ」

砲身のリーチ内へ入っていた大男は、振り回されたスーバートラップに殴りとばされた。

「あーあ、やっぱり『動くな』とゆーべきであったか——あーこら！」





マックは奥の事務所へ戻りかけた一人にあらためてスーパートラップを向けた。

「客をほったらかして行っちゃうの？ 電話？ さっき事故があつてね、ここらへん一帯不通になつてるよ」

マックは、慎重な面持ちで二人に向けたターゲットスコープをのぞいた。

「さっきの話の続きだけど、アパート探してるんだ。地図見せてくれない？」

従業員は、顔を見合わせた。

「ここ、隣の部屋は？」

マックは、動かない従業員にアゴで指して訊いた。

「お、応接間と、詰所が」

「あっそ。それじゃ大したもんはないんだ」

ダイヤルをまわしてパワーを落とすと、マックは長大なスーパートラップの砲身を体ごとまわして発射した。

音よりは震動のような発射音とともに、粒子ビームが安普請の壁を貫く。かなり遠くの壁まで貫通した音が聞こえた。

「はらあ」

素早くスーパートラップを戻したマックは、大穴が開いて向こうのビルまで筒抜けになった壁

を見やった。

「ごめんね、ずいぶんパワー落としたんだけど。で、地図だけど……」

「つまんなあい」

握ったライトラインで両肩を叩きながら、シェルミーは声をあげた。

「ゴートーやドロボーやるってからさ、楽しみにしてたのに、なあんにもやることないんだもん」  
「そのセリフはここ出るまでとっとこーね」

音声入力型の、わりと新し目のコンピューターのコンソール相手に喚きちらしているマックがシェルミーを軽くこづいた。

「まだ何も手に入れてないんだ」

マックはすうっと息を吸った。コンピューターのマイクに口を近づける。

「イシユタルの喉、封鎖時のデータだ！」

入力レベルを示すライトゲージがわずかにまたいた。ディスプレイに、先刻と同じ文字がなめらかに打ち出される。

音声微弱につき識別できません。再入力して下さい。

「バカにしてんのか、この電子頭脳は」

「どーなの？」

言われもしないのに、シュルミーはありあわせの手錠でドアにつないだ従業員二人にライトラインを向けた。

「バカにしてキーワード抜いてあるの？」

「わわわ、よせ、やめろ！」

照準の定まらない大口径ビームガンを向けられた男は、あわてて首を振った。

「中古の安物を値切ったんで、認識回路がおかしいんだよ！俺たちのせいじゃない！」

「ふーん……信じられる？」

「単にボロであるっていうのは説得力があるね」

マックはもう一度マイクに叫んだ。

「イシユタルの喉、関連データだ！」

音声微弱につき識別できません。再入力して下さい。

「このやろお！ イシュタルの喉のデータを出せてんだあ！」

音声微弱につき……

「イシュタルの喉だったのが聞こえないのか！ とっとと封鎖時のデータひっぱり出せ！」

マックは壁にたてかけてあった粒子砲に手をかけた。と、今までと違う字がディスプレイに流れ出た。

イシュタルの喉、封鎖時関連データ、了解しました。なお、音声入力回路は敏感につくられていまずので、囁き声でも充分に入力可能です。不必要に大きな声は機械をいためますので、ご注意ください。

「かわいくないっ」

淀みなく打ち出された文字を読みとったマックは、両手を握りしめるなり粒子砲を抱えあげた。「ぶっ壊してやる！ このかわいくないコンピューター、根性焼き直してスクラップにしてやる」粒子砲の出力を上げたマックに、シェルミーはおもしろそうに悲鳴をあげた。

「きゃー、落ちて着いて、せめてデータが出てくるまで待ってえ」

「イシュタルの牙からイシュタルの喉への閉鎖に関するデータだ！」

スーパートラップの砲口をびたりとコンピューターにあわせたまま、マックは叫んだ。

「十秒以前に耳を揃えて吐き出さなけりゃ、丸ごと鉱物資源に戻してやる！」

「やめてくれ、そいつはうちの事務所が一番高価な備品なんだ！」

男が叫び終わらないうちに、コンピューターはスリットから素晴らしい勢いでメモリーディスクを吐き出しはじめた。

「はあ……」

従業員二人は目を丸くして従順に作動しているコンピューターを見つめた。

「うちのコンピューターをこんなに見事に使いこなしたのは、あんたが初めてだぜ」

「言うこと聞かないメカは扱い慣れてるんだ」

粒子砲を壁にたてかけたマックは、床にまき散らされた光学ディスクをまとめて拾い上げた。

「しかしディスクごと吐き出すとは思わなかったぜ。えーと、どれがどれだ……」

乱暴に書きなぐられたラベルを確かめて、マックはめぼしいディスク二、三枚をジャケットに入れた。

「はい、おじやましました。ご協力ありがとうございました」

「無事に帰れると思ってやがるのか！」

従業員が毒づいた。

「この部屋——この階全部、うちの連中が完全装備で押さえてるぜ。少しでもましな死に方したかったら、今のうちに降伏しな！」

「大丈夫？」

シュルミーは心配そうな顔で天井を見上げた。この部屋に入ってから、他の部屋からの物音は活発に聞こえても直接の手出しはない。地元コネクションの本拠ビルと知っているだけに、そのおとなしさがシュルミーには不気味だった。

「そうだね」

マックは軽くうけ流してスーパーラップをかつぎなおした。

「無事に帰れるかどうか心配だね——館内放送借りるよ」

コンピューターの横のパネルの私設電話に手をかけたマックは、従業員の男に心配そうな顔でふりむいた。

「こいつ正常に作動する？」

「バカにすんな、オーディオ代わりにだって使えるぞ！」

「その分コンピューターに金かけりゃいいのに」

スイッチを入れて、全部の回路を開放したマックはシュルミーに意味ありげにウィンクして、ポリウムを一杯に上げた。

『ひえーっひえっひえっひえ！』

「ど、どしたの？」

いきなり狂ったように笑い出したマックに、シュルミーはぎょっとして顔を見直した。マックは心配ないというようにOKサインを出してみたが、狂ったような笑い声がビル中に響き渡っている。

『ひえーっひえっひえ、見てくれよこれ、半メガトンの熱核反応弾だぜ、モノホンの爆弾だぜ』

「え？」

『みんなア、聞いてくれてるんだろオ、俺ア一人じゃ淋しいんだ、一緒に死んでくれよ、なあ』  
熱に浮かされたように喚きたてながら、マックはシュルミーを手招きした。

『半径一キロはすっかり溶けてなくなっちまうんだ。へ、へ、信じられるかい、百万度の火の玉だぜ』

やっど何を言っているのか了解したシュルミーに、マックは受話器をまわした。口の前で、喋れというように指をひらひらさせる。ニコツとしてうなずいたシュルミーは、ここぞとばかりに力一杯悲鳴をあげた。

『やめてえー！ お願い、こんなのウソよ！ やめてちょうだー！』

『へ、へ、ちゃんと制限装置もつけたんだ。聞いてくれよ、原子時計だからばっちり正確だぜ。へ、へ、ちゃんと、確実に数が減ってやがる、もう誰にも止められるもんか』

マイク部を手で押さえて、口を離れたマックはシュルミーの耳元に手短に囁く。

「適当に光線銃ぶっ放して」

床や天井にぐるっと指をまわしたマックにうれしそうにうなずいて、シュルミーは嬉々としてライトラインを構えた。

「わあ、やめろ、やめろ！」

腕も腰も定まらない素人がぶっ放すビームガンほど怖いものはない。顔面蒼白の従業員にこやかに手を振って、シュルミーは壁から化粧パネルを張った天井めがけてトリガーをひいた。

機能性や機動性など二の次にして、ただパワーのためにのみ設計されたライトライン・ミリタリーの口径七七の高エネルギービームが、ビルの数階層分を貫いた。夜の街にあぎやかなビームの光芒が起つ。続けて二発目、三発目が浅い角度で斜めに飛び出し、向かいのビルの広告灯を破壊した。

支店長の指揮のもと、侵入者に対する迎撃態勢を整えていた構成員に動揺が走った。ビル内の各所に設置された館内放送用のスピーカーから、うわごとのような狂人の台詞セリふがいやでも耳に入



ってくる。

『た、た、たった五分だけ。あと五分で、きれいな核反応がおきて、ここらへん一帯全部溶けて、蒸発しちまうんだ、ひえひえひえひえひえひえ』

『ただのデマだ、聞くな！』

管理職一筋の支店長が汎用トランシーバーに声を漚からした。三階廊下にサブマシンガンやピムライフルを抱えて配置されていた構成員二人が顔を見合わせる。

『核爆弾だと……』『やっぱ狂ってやがるんだ、こんな所に殴り込んできやがって』

『もーお誰が来たってこの時限装置は止められないんだ、どんなメカニックだってこのおれが作った爆弾は分解出来ないんだあ』

夜の街に、拡声されたマイクの声が響いている。寝静まっていたはずの周辺のビルにまで灯が入りはじめた。

『楽しみだぜえ、あと三分と三〇秒、二九秒で、ここらへんのブロックがそっくりガーランドジヤク継点シクシジョンから消えちまうんだ。こんな面白いことが他にあるもんかあ』

再び、シエルミーによるビームの乱れ撃ち。安いパネル材を簡単に貫通するビームが夜の闇に幾筋もの光跡を残す。

『逃げんなら今のうちだぜえ。あと二分と五九秒だあ。逃げられるもんかあ、ひえっひえっひえ』

「いい」

「なんか……」

シエルミーはしみじみと感心したようにマックを見つめた。

「すっごく似合ってる」

「ひよほほほお——……あ？」

つば飛ばして喚きまくっていたマックは、妙な顔をしてシエルミーに目をやった。

「うるせー」

シエルミーは肩をすくめてニコッと笑った。

「素敵よ」

「どーも。さて」

ワイヤレスのインカムを待機用のホルダーに置いたマックは、脇のスーパーラップを抱え上げた。最低レベルのパワーでパネルをぶっとばす。

「今の演説どれくらい効いたと思う？」

「さあ……あたしならすぐ逃げるけど」

「それじゃ、ここのチンピラどもがおまえさんくらいまともである事を祈りましょ。んでは、どうも、お邪魔しました。これで失礼しますわ」

手錠でつないだ従業員二人にバカッ丁寧に頭を下げたマックは、スーバートラップのパワーダイヤルを上げた。

「さあ、帰ろうか」

「どーやって？」

「強行突破しかないでしょ。ついで」

気休めにかけておいたドアのロックを、解除ナンバーもわからないからスーバートラップで破壊する。安もののプレハブドアを蹴り開いたマックは、長大な粒子砲をたてにして飛び出すと同時に照準もなしに発射した。続けて反転し、倒れ込みながらも一発。迎撃準備のためか照明が消された廊下をフラッシュした粒子ビームは、前と後ろの突き当たりの壁に大穴を開けた。

「派手ねー」

ライトライン片手のシェルミーが事務所から出てきた。マックは気抜けした顔で通路から立ち上がる。

「反応なし？ 逃げちゃって来てた？」

廊下の突き当たりまで小走りに行ったシェルミーは、スーバートラップの開けた大穴から外をのぞいてみた。

「わー」

「どうした？」

「見て。すごい、パニックになってる」

「へ？」

マックは表通りを見下ろした。向かいのビルから、次々に慌てふためいた群衆が吐き出されて  
いる。

「あ……こりゃ効きすぎた」

マックは顔をしかめた。

マックがビル外部のスピーカーまで動員した迫真の放送によって、周辺一帯は大騒ぎになって  
いた。爆弾キチガイが自作の核を持ってコネクションのビルにたてこもったというハッターが、  
予想外に効いたらしい。

「いいや、爆弾犯人は早いとこズラかろう」

所々に弾痕があったり、武器が散乱したりしている階段を一気は一階まで駆けおろる。

すでにみんな逃げ出したのか、ビルは怖いくらい静かだった。

コミュニーターやバスが狂ったようにとばす表通りのストリートから裏道へ駆け込み、停めてお  
いたコンバットバギーにすべりこむ。

「案外楽だったわね」

「それがどーも気になる」

高出力の水素ガスタービンエンジンをかけながら、マックはあたりを見回した。

「簡単すぎるんだ……ま、いやか」

ヘッドライトをつけ、トランスミッションを逆進<sup>リバース</sup>へたたきこむ。バックで表通りへ出るためにヘッドレストに手をかけて頭を後ろへまわしたマックの隣で、シェルミーが悲鳴をあげた。

「え？」

マックはびっくりして目を戻した。ヘッドライトが照らす闇の中から、逆に強力なサーチライトが二人の眼を灼いた。

「な、なんだあ？」

キャタピラの爪が路面を擦る音<sup>すり</sup>を聞いて、マックは後ろも見ずにアクセルを開けた。全輪駆動の低圧タイヤは空転もなしにビルフォックス改造のコンバットバギーを後ろ向きに急加速した。

「きゃー！」

つんのめったシェルミーが、対衝撃緩衝用にラバーマウントされた計器類のパッドに頭をぶつけた。

「何なのよお！」

表通りに出た瞬間に、滑りにくい低圧タイヤで無理にバックスピンをかけ、タイヤに耳ざわり

な悲鳴をあげさせて進行方向を整えたマックは、街灯の下へダッシュしてきた怪物を見て、一瞬発進を忘れた。

「アクサスの追跡戦闘車だ……」

大きくノーズダイブして路面を削りとりながら急停車した軽戦車は、ぐいっと二連装の砲塔を旋回させた。対空にも使える二門のビーム砲がコンバットバギーめがけて角度をとる。

「んなろ！」

トランスミッションを素早くパワー重視の野戦モードにたたきこみ、マックはエンジンを全開にした。

「きやあ！」

戦車めがけての急発進に、二人の体がぐっと耐Gにもなっていないバケットシートに押しつけられる。ビルフォックスのバギー特有の機敏性を生かして急なハンドル操作で戦車の鼻面を抜けたマックは、そのままミッションを市街モードをとばして高速モードにたたきこんだ。

キャタピラを左右逆進させてコマのように急旋回したアクサス追跡戦闘車は、急加速してコンバットバギーを追ってくる。

「なによあれ！」

乱暴な運転にシートにしがみついたままのシェルミーが、息を乱して叫んだ。

「見りゃわかるでしょ、戦車だよ！ それも原子戦仕様なのな！」

マックはアックス級の戦車のデータを思い出そうとしていた。装甲車輛に関しては古株のバイヌール社製、初期型が出回ったのはかなり昔で、それだけ数も多くいろんな所に普及している高速戦車である。基本設計が良かったためか、未だに改良されて生産が続けられている。

「まいったねえ」

車の消えたバイバスを疾走しながら、マックは運転席のバックミラーを探した。が、すぐにレンタル屋で見た時にすでになくなっていたのを思い出して、ちらちら後方を盗み見る。

「さすがコネクションだ、化けもんみたいな車持ってやがる」

「ビーすんのよ！」

シエルミーは、蒼ざめた顔をシートから半分出して、追ってくる戦車をにらみつけていた。砲塔両脇の大口径ビーム砲が生きてるような動きでバギーに狙いをつけようとしている。

「逃げられんの!？」

「無理だね。後ろに追突注意って言ってやって」

すぱっと進路を変えたバギーの横に、大出力ビーム砲が斜めに突き刺さった。溶けて蒸気になった路面が爆発のような煙を散らす。

「このォ！ このお！」

ホルスターからライトラインをひっぱり出したシュルミーは、追走する戦車めがけてフルパワーのまま撃ちはじめた。

「危ないからやめなさいって」

いくら標的がでかくても走る車の上からシュルミーの腕では当たる訳がない。また命中したところで、いくらライトラインのモデルⅦでもアクサスの前面装甲が相手では傷をつけるくらいが精いっぱいである。

「そんなんじゃないよ」

「それじゃどおすんのお！」

全弾を撃ち尽くしてもまだしばらくかちやかちやと引き金をひいていたシュルミーがマックに喚いた。

「逃げ路探して」

「え？ どうやって？」

シュルミーは強風に乱れる髪をかきあげてシートの上をまわりを見まわした。

「何のために高い金だしてコンピューター付きのバギー借りたの」

「あ、そーか、えと、えーと」

センターコンソールとダッシュボードに、助手席を囲むように配置された三インチから一〇イ



ンチまでの数面のCRT、液晶ディスプレイを全部オンにする。

「えと、ねえ操作盤がない！」

「キーボードなんか使えないでしょ！ ヘッドレストからマイク出せ！」

マックは急ハンドルを切ってパイパスの高架道路から立体交差のインターチェンジに突っこんだ。戦車のくせに高い運動性を売り物にしているアクサス軽戦車は、難なく片側四車線のパイパスからインターチェンジについてくる。

シートの頭当<sup>ヘッドレスト</sup>てから口元へ、細いフレキシブル・ジョイントにつながれたマイクを引っ張り出したシェルミーは、コンピューターに叫んだ。

「逃げ路探して！」

ナビシート正面の一番大きな一〇インチ・ディスプレイに、即座に？が出てきた。

「航法<sup>ナビ</sup>コンピューターの慣性航法装置<sup>INS</sup>オンにしろ！」

ビルが詰まったせまい路地裏へバギーを突っ込ませながらマックが叫んだ。

「スイッチどれ!？」

「探せ！」

ダッシュボードに手をかけて、シェルミーはセンターコンソールへかがみこんだ。簡単な略号のみが表示された各種スイッチ類が、これでもかといつた感じで詰まって並んでいる。なんとか

それらしいスイッチの一群を見つけたシェルミーは、適当にいくつかのスイッチを入れた。作動ランプがぼっと点灯する。

「キャア！」

頭上を、機関砲の連射らしい光跡がぬけて左右のぼろビルの外壁に火花を散らした。

「いちいち喚くな！ 逃げ路はまだか!?」

「地図！ 現在位置、早く！」

シートに首をすくめたまま、ジョイントの先のマイクを引き寄せたシェルミーが手早く言った。いくつかのディスプレイに、たて続けに表示が出た。正面に地図及び現在位置の表示、小型ディスプレイには周辺区域の関連データが映る。

「わかったわ！ 今の場所はイシュタルの牙、コレットシティ——」

「街の名前なんぞどーでもいい！ あのバケモンを煙けむにまけるような道路みちを探してくれ！」

「どんな道よ！」

「どんなんでもいい！ 下水道でも地下道でもモノレールでも、とにかく、あいつが追ってこれないような！」

「そこ右に入って！」

シェルミーは、強力なヘッドライトに照らし出された街並みにちらりと見えた細い裏道を指し

た。地図を読みとった訳ではない。戦車の全幅より狭ければ追いかけてこれないだろうと考えたのである。

「確かなんだろうな！」

「確かよ！」

喚き返して、ディスプレイで道を確認しようとしたシェルミーは口ごもった。現在位置を示す輝点が道路の上にはない。

「言っとくが地図の道路は信じるなよ」

マックは歩道のゴミ用コンテナをタイヤで蹴りとばして、崩壊寸前のマンションとビルの間的小道に割り込んだ。

「ここじゃどんな正確なの作ったって、一週間もすりゃ古地図になっちまうんだ。ハイウェイとメインストリート以外は信用するな！」

「だ、だって、走ってるよ」

住人がダストシュート代わりにでも使っているのか、ゴミだらけの狭い路地で時々タイヤをひっかけながら走っているバギーを、後方から強烈な光が照らし出した。通りから路地裏へ、アークサスの粒子砲がバギーへ振りおろされる。

「ちッ」

マックは舌うちした。車幅ぎりぎりのまっすぐな路地裏に、逃げ場はない。

「つかまってろ！」

「これ以上何やるのォ!？」

シェルミーの悲鳴に近い台詞が終わらぬうちに、マックは左の壁めがけてタイヤをぶつけるようにハンドルをきった。レンガに似せたぼろマンションの壁面をハイグリップの低圧タイヤが噛む。

「わわあ！」

左側のタイヤが壁面をつたって持ち上がるのと同時にアクサスの粒子砲が発射された。片輪走行気味に斜めになって疾駆するバギーの背をかすめる。

「こら、落ちてくるな」

急角度でほとんど横倒しになったナビシートからずり落ちてくるシェルミーを左腕で押さえて、マックは片手運転で車を戻した。反動でシェルミーが跳ねあがる。

「び、びっくりした」

呆然自失のいでやとそれだけ呟いたシェルミーは、突如として湧き起こった大音響に悲鳴をあげた。

「な、なんだ」

もうすぐ路地裏を抜ける、と思いながら振り返ったマックは、アクサス戦車が自身の車幅より二割がた狭いはずの路地裏へ突進しはじめたのを見た。

「正気なのか、あの連中は!？」

キャタピラとフェンダーで両側の外壁を削り取って路地裏を破壊しながら、戦車が追いつがってくる。路地裏から抜け出したコンバットバギーは、そのままがらんとした空き地へ飛び出した。「なに!？」

薄暗い天井のピンライトに照らされた一帯を見渡して、マックは顔をしかめた。倒壊したビルやスクラップなどが所々に散乱しているくらいで、戦車から隠れるような遮蔽物は何一つない荒れ地である。

「くっそ……まじった……」

戦車が外壁を削りながら突進する耳ざわりな騒音が迫ってくる。市街モードから高速モードへミッションをたたきこんで加速したバギーは、荒れ地を一直線に走りはじめた。

「どこだ、ここは!？」

「え、えーと」

言われたシュルミーが、はっと我に返ってディスプレイを見直した。

「東側の旧公園区……」

「公園？ このだだっ広いスクラップ場が!？」

「ね、ちょっと、この先ないわよ？」

「なに？」

シエルミーは、髪を押さえて必死にデイスブレイを読みとった。

「街はずれ——この階層もうすぐ終わっちゃう！」

「せこい町」

イシュタルの牙そのものが、旧要塞区と「大穴」にはさまれて南北に細長く発達したものである。東西方向への距離は、そんなにない。

「ならいい。上か下の階層か——でなけりやとなりのブロックへのバイパスは？」

乱暴に消されたらしい地図の白紙エリアに、かすかな文字を読みとったシエルミーは、デイスブレイに照らされて蒼ざめた顔をあげた。

「あるわけないよ……この先、イシュタルの喉だもん」

荒野にのびた二連装のサーチライトの光がバギーを捉えた。路地を抜け出したアクサス戦車が、キャタピラや車体に食い込んだ外壁や外装材の破片をまきちらしながらバギーめがけて全力で加速する。

「くそ……」

マックは、低く取り付けられたドライビングランプもヘッドライトも届かない、はるか彼方の闇を睨みつけた。ちらつと隣席でディスプレイをのぞきこんでいるシュルミーの横顔を見て、リヤに積んだスーパートラップに目を走らせる。

「ハンドルよろしく」

「え？」

シュルミーは聞き違いかと思つて顔をあげた。

「運転替わつて」

シュルミーの腕をつかんでハンドルにそえさせたマックは、バギーの後ろからスーパートラップを引きずり出しにかかった。

「ちょ、ちょっと待つてよ、やったことない」

助手席から体をのばして無理にハンドルを握らされたシュルミーが、シートの後ろへ体をまわしているマックへ喚いた。

「ちゃんと前見て。逆襲してみるから」

「え？」

「とにかく運転席へ来い。これだけ広けりゃ大丈夫だろう」

戦車の粒子砲が車体の助手席側をかすめた。一瞬だけ逆光で浮かび上がったシュルミーは、き

つとマックを睨みつけた。

「知らないからね！」

マックがアクセルを一杯に踏みつけたままのバギーで、シェルミーは運転席側のシートに手をかけて腰をあげた。変速レバーだのスイッチだのが並んでいるセンターコンソールを乗り越え、運転席のフロアにブーツの爪先を入れる。身を沈めていたマックはシェルミーの体の下をくぐって助手席に手をかけた。

「まずい！ ハンドル切れ！」

ヘッドライトに照らし出された荒地地の基床パネルが、爆発事故でもあったようなクレーターになっているのを見たマックが叫んだ。

「えー!？」

片ひぎをセンターコンソールについた不安定な姿勢のまま、シェルミーはパワーステアリングのハンドルをいきなりこじった。

「きゃあ」「わあー！」

速度感応式の安全装置が連動しなければ、バギーは急ハンドルで横転していただろう。左タイヤが持ち上がるような急転をしたバギーは、そのままスピンのした。予想外の動きを戦車のサーチライトが追跡出来ず、荒地地の間の中へバギーのライトだけが横薙ぎの光をくるくると回りなが



ら全方向へ投射していく。

「く……この」

どさくさまぎれにシートに叩きつけられたシュルミーの前へ手をのばしたマックが、助手席からハンドルを切ってカウンターをあててバギーを立ち直らせた。

「右のベダルから足を離さないで。今みたいにハンドル動かせば曲がる。何か言い残す事は？」

「おっもしろーい！」

喜々として叫んで、シュルミーはステアリングを握った。

「一度やりたかったんだ、こういうこと」

いきなり、まわりが明るくなった。再びサーチライトの領域内にバギーを捉えた戦車が追ってくる。

「とばすわよお！」

シュルミーはアクセルを一杯に踏みこんだ。マックはシートの後方からスーバートラップの長大な砲身を抱え上げた。

「さて、事故ると喰われるのとどっちが早いかな」

体をひねってシートに逆に体を落ち着けたマックは、エネルギー伝導用のフレキシブル・チューブをつないだ粒子砲を後方に向けた。途端にシュルミーがバギーを乱暴に曲がらせた。バギー

をかすめた戦車の粒子ビームがスクラップの山を四散させる。

「だめだ、こりゃ」

マックはスコープから目を離して、細目で強力な二眼のサーチライトをにらんだ。ビルフォックス・バギーのフレキシブル・サスペンションはよくショックを吸収するが、ターゲット越しの照準では微震動が多すぎる。

「あたりやイチコロなんだが……」

スコープを使わずに目測で照準をつけて、マックは粒子砲を発射した。戦車手前の基床パネルに当たって破片を飛び散らせる。

「へた！」

後ろを見たシエルミーがマックに叫んだ。

「うるせ！」

二射目を撃とうとして、ドライバーシート運転席を見たマックは声をあげた。

「後ろなんか気にしないで前向いてろ！」

「いーじゃないのよお」

ぶつぶつ言いながら、シエルミーは顔をもどした。腹いせとばかりに乱暴にハンドルを切る。

後を追うように、サーチライトの光の中に機関砲の弾着煙がたて続けに立つ。

「わ、わー」

「この！」

スライド気味に横すべりしたバギーの上で強引にスーパーラップを振りまわしたマックが粒子ビームを発射した。地面と並行に走ったエネルギー束が高速走行中の戦車のキャタピラを砕いた。動輪が吹き飛ぶ。

「やリィ」

一瞬、右へ車体をとられて旋回しかけたアクサス軽戦車は、駆動力の半分を失って派手に横転した。砲塔上のサーチライトが点灯したままもぎ取られ、レーザーサーチャーやリーダーアンテナが飛び散る。逆さになったまま砲塔で滑り出した戦車は、スピンしながらスクラップの山へ激突した。

「わあ、やったの？」

体ごと振り向いたシエルミーの肩を押さえたマックは、強引に前を向かせた。

「後ろを向いて運転しないように」

「だって、終わったんでしょ」

「一応はね」

マックは親指をたててみせた。

「あれえ？」

シエルミーは妙な顔をした。

「……じゃ、これ、何の音？」

「音？」

言われて、マックは耳を澄ませてみた。さっきまでやかましかったキャタピラの音が消えて、パギー自身の水素ガスタービンエンジンの高速回転音しか聞こえない。

「風か？」

「じゃなくて、何かひよろひよろ言ってる変な音……聞こえない？」

「聞こえない。いいから、スピード落とす気ない？」

「聞こえないはずないよお。後ろから。見て」

「へえへえ」

肩をすくめて振り返ったマックは、背後の荒れ地の上空に、消え残りの照明ではない光を発見した。

「——なんだありゃ？」

目を細くしてにらみつける。しばらく、ちらちら動く青白い光を見つめていたマックは、やがて目を戻してシートに座りなおした。

「良い耳だね。チョッパード」

「チョッパードって何？」

ちらりとシエルミーを見たマックは、もう一度スーパードラップを抱え上げた。

「対地攻撃用の浮遊兵器」  
フロート・アーマー

S  
15  
デッド・ゾーン  
閉鎖区域

チョッパーは一機だけではなかった。

本来、精密射爆が要求される都市部での対地攻撃用に開発された、空対地浮遊機である。対地攻撃用のビーム砲やミサイルランチャーなどを照準装置、各種センサー等と一まとめにして、強力なホバーシステムの上に載せたもので、空飛ぶ重戦車の仇名で知られている。

三角形のキノコのような対地攻撃用のチョッパーが六、七機、サーチライトや赤外線照射装置などで地面を照らし出しながら、最大高度一五〇メートルほどの荒れ地の上をふらふらと飛んで来ていた。型式も年代も塗装まで雑多で統一されていない。

「なんでそんなのがこんな所にいるのよ!？」

「パイロットに訊いてみたら? とにかく逃げ出せ!」

シェルミーはゆるめていたアクセルを一杯に踏みこんだ。チョッパー群は気のぬけたようなタービン音を高く唸らせて、加速して差をつめてくる。

「軍の連中じゃないな」

がっちりとは編隊を組むでもなく、てんでばらばらに追ってくるチョッパーどもの動きを見たマックが呟いた。

「コネクションだ。まったく、あんな飛び道具まで持ち出して……対空戦車でもレンタルしとくべきだったな」

シエルミーがいきなり悲鳴をあげた。急ハンドルを切って横へ逃げ出す。

「どうして曲がった？」

「行き止まり！」

シエルミーはマックの前に人差し指をつき出した。

「え？」

左側を見上げたマックは、ディスプレイに目を落とした。現在位置はイシュタルの牙の東側一杯。

荒れ地に、巨大な壁がそそり立っていた。

「境界壁まで来ちまったか……」

「なんなの、この壁！」

「イシュタルの喉を閉鎖した壁だよ」

マックはスーパーラップのターゲットスコープを調節しながら答えた。

「この壁の向こうに、六〇〇万人からの死人の街が眠ってる」

「逃げ道は!？」

「ない」

言いながら、マックは空中のチョッパーを狙ってスーパーラップを差し上げた。助手席側、わずか一〇メートル横に、急ごしらえの溶接のあととも生々しい巨大な壁が蜓々と続いている。

「どーすんのよ!」

壁沿いにバギーを走らせながらシュルミーが叫んだ。

「今考えてる」

壁際の地面は、それまで以上に荒れていた。フィン付きの卵形のホバーシステムの両側につけられた高照度のサーチライトを受けて、マックはポケットからシューティング用のサングラスを出した。

「一度、降伏してみるか」

「正気!？」

シュルミーはびっくりしてマックの顔を見た。スーパーラップでチョッパーを狙う顔はサーチライトよけのサングラスのため表情が見えない。



「ひっかけて脱出するにしても、星系軍やコンツェルンよりは楽だ。——けど、コネクションがこんな航空兵力抱えてたとはな」

「本気なの!？」

「多少はね。七機のチョッバー相手じゃ、間に合わせのスーパートラックと中古のコンバットバギーでどうなるもんでも——うわ!」

シエルミーは予告もなしに乱暴な急ブレーキをかけた。後ろを向いていたマックは背中から放り出されそうになってあわててシートにしがみつく。

「こら、何で止まる!？」

「降りてよ!」

シエルミーは負けじとばかりに叫び返した。急停車してしまったバギーに、チョッバーが急接近してくる。

「本気で降伏するなんて言ってるんなら降りてよ!」

「……あのね」

「降りないの!? それじゃあたしが降りる!」

「ちょっと待ってっの」

マックは立ち上がりかけたシエルミーの腕を押さえた。

「なによ！ あたし死んだって手エ上げる気ないからね！」

「へーへ、まことに立派な気概でおそれいます」

風を切るような回転音が迫ってくる。

「いいから車出して」

「どーする気よ。白旗掲げてあいさつしに行くの!？」

「いいから走り出せ！」

びっくりするような大声で、マックが喚いた。

「降伏するのはまだ先の話だ！」

シュルミーは、あっけにとられてサングラスをかけたマックを見つめた。

「それともここでおとなしく捕まる気か、急げ！」

怒鳴られたシュルミーは、反射的にアクセルペダルを床まで踏み込んだ。四輪駆動の低圧タイヤを一瞬空転させて、バギーは蹴とばされたようにダッシュした。

加速Gに逆らってスーパートラップを持ち上げたマックは、目測で先頭のチョッパーに狙いをつけた。

「ったく、とんだロスだ……何とかして一機も落とさないうで逃げ切りたいもんだが……」

命令が徹底されている軍ならともかく、寄せ集めのコネクションでは命令無視など日常茶飯時

である。マックはともかく、シエルミーは生かして捕まえろとの命令が出ているはずだが、一機でも僚機が撃墜されたりしたら残りが命令に従う保証はない。残りのチョッパー全機が手加減なしでバギー破壊にかかるはずである。

「ナビゲーターやってんでしょ！」

「今は砲手<sup>ガンナー</sup>です」

「逃げ路探してよ。この壁なんとか越えられないの？」

「バカ言え、こりやイシュタルの牙と喉の境界壁だぞ。三年前の騒ぎでがちり封鎖されて、細菌一匹逃げ出せないように……越えられりやずいぶんと手間省ける……」

ぶつぶつ言いながら、マックは不動産屋から頂いてきた記憶ディスク<sup>メモリー</sup>を三枚続けてコンピュータ・システムのディスク・ドライバーに放り込んだ。フレキシブル・ジョイントの先のマイクをひっぱり出す。

「現在位置における境界壁の封鎖状況を出せ」

光学ディスクのインデックスをスキャンしたコンピューターが、サブディスプレイに境界壁の透視図<sup>アプクセス</sup>を呼び出した。

「ほ……こりやまたがちりしとるわ」

ブロックとブロックとの間の境界壁は、基本的にステーションの外壁と同じ構造で作られてい

る。ステーションの外に向かって増設され続けたガーランド中継点ジャンクションの場合、実際の外壁を境界壁代わりにしてブロックを建設した場合が多い。

基本的には真空及び各種宇宙線に耐える材質で、古い地区ほど厚い。バースのかかった3D作画のちやちなコンピューター・グラフィックを見たマックは、境界壁の実物を見上げた。

「外壁の一番薄い部分を図示しろ」

高速走行中のバギーと同調した、現在位置の境界壁を表示していたディスプレイの中で、突然に壁が流れ出した。数秒間、超高速で流れ去ったディスプレイは、境界壁の一部を図示して静止画になった。

「大昔の保守点検用エアロック——外壁の厚さは？」

ディスプレイに細かいデータが表示された。

エアロックの外側にブロックが増設されて機能を失ったため、ありあわせの外装パネルで封鎖されてそれきり忘れられている。エアロック及び関連施設そのものが放棄されて何世紀もたつて、三年前の大封鎖時にも手をつけられていない。

「これだ。よし、座標固定、現在位置と連動させろ。おい」

シェルミーに、逃げ道が決まったぞと言おうとしたとたん、先頭のチョッパーが放ったビーム砲が地面に巨大な火柱を作った。右後方からの衝撃波がバギーをあおり、シェルミーとマックは

狭いシートで首をすくめた。

さすがに基床部から下方ブロックへの貫通を恐れてか、パワーはずいぶんと落としてあるらしい。が、その有効径と破壊力は軽戦車の粒子砲ごときとは比較にもならない。

「あいつら本気よ！」

「まだ威嚇射撃だよ」

マックはスーバートラップをチョッパーめがけて差し上げた。

「逃げ道が見つかった。後三分ばかり今のままぶっ飛ばして」

「逃げられるの？」

シエルミーがうれしそうに訊いた。マックは、震動が多すぎるためターゲットスコープを使わず、肉眼で照準している。

「まだわからん。戻って支度し直してるヒマないからね、直接イシュタルの喉に突っこむ」

「キヤー♡」

シエルミーのうれしそうな悲鳴を横に聞きながら、マックは粒子砲を発射した。

たて続けに数本の火柱が進路上を塞いだ。いつクラッシュしてもおかしくないジグザグ運転でビームの弾着をくぐりぬけたバギーが、そそり立つ境界壁から急角度で離れた。

「ほんとにここでいいの」

「コネクションの連中が正しいデータを持ってたんならな！」

境界壁という背水の陣を失ったバギーに襲いかかろうとするチョッパの動きを粒子砲で抑えようとするマックが喚き返した。二、三機かたまっているチョッパーめがけて、狙いもつけずにスーバートラップを発射する。走行中の車両から飛行機を撃つのは、よほどの名人でもなければ狙って当たるものではない。

「その鉄骨に沿って曲がりこめ！」

地面から斜めに突き立っている構造材をかすめるようにして、バギーが急ターンした。

「うわっ、未だあ！」

壁に向けて直進をはじめたバギーの前に、何をとちくるったのか一機のチョッパーが超低空でふらふらと割り込んできた。

シェルミーの声でとっさに前を向いたマックが、至近距離からチョッパーへ粒子砲を発射した。片舷のスタビライザーを吹きとばされたチョッパーは、安定を失って急激な横すべりを起こした。バギーはろくな減速もせずの開いた空間を抜けて、壁めがけて一直線に加速する。

ディスプレイ上の構造図と現在位置が重なった。マックは背後からのチョッパー群の砲撃も無視して腰を浮かした。フロントグラスの上から、エアロックがかくさされているはずの壁に狙いを

つける。

「このまま直進だ！」

「ぶつかっちゃう！」

「寸前でフルブレイキ。突破口はこっちで開ける！」

言ってる間にも、地面から天井までの一面の巨大な境界壁は、のしかかるような勢いで迫ってくる。

「アクセルゆるめるな！」

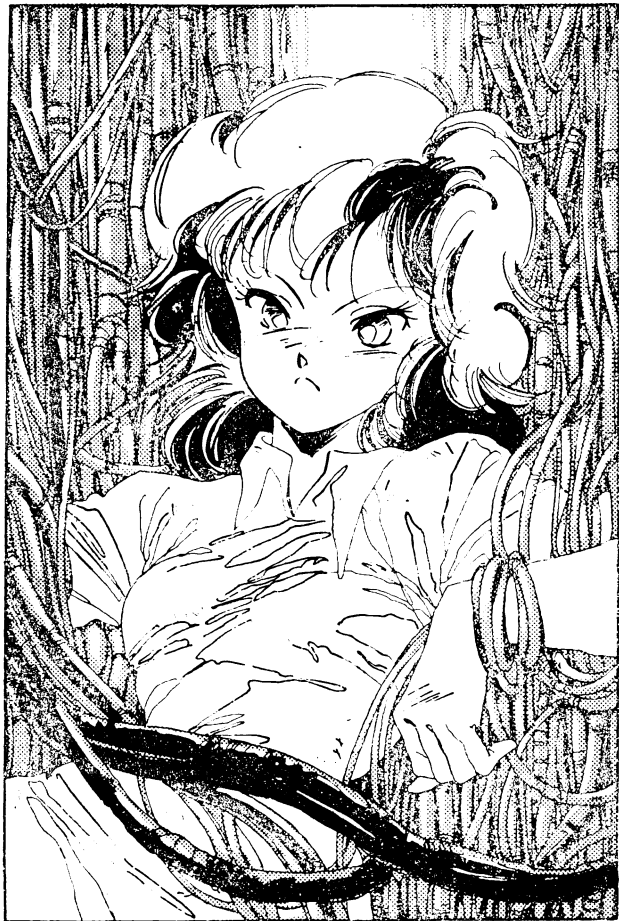
「知らないからあ！」

半ばヤケで、シュルミーはバギーを壁へ突進させた。マックは進路上の一点めがけてスーパーラップを連射した。簡単な外装処理を施されただけの外壁に、バギーが突入した。

「きゃあー！」「うぎゃあ！」

粒子砲の直撃でスカスカになっていた外壁をあっさり突破したバギーは、その勢いのままかつてのエアロックの外側ハッチをつきぬけて、内部機構に突っ込んだ。ボンネット部分がつぶれてもショックを吸収し切れず、マックとシュルミーは機構の中の暗闇に放り出された。

「あた……」





自分の指先も見えないような闇の中で、マックのうめき声が聞こえた。

「おい……まだ生きてるか」

「——」

深い息がそれに応えた。

「突入寸前にフルブレーキかけろって、言わなかったっけか？」

「忘れてたわよ、そんなこと——あ、痛<sup>いた</sup>あ」

とんでもない方向からシェルミーの声が聞こえた。

おそらくエアロックの内側<sup>イシゲ</sup>ハッチらしい壁にたたきつけられたマックは、床に落ちたままの姿勢で息をついた。

「動けるかい？」

ずいぶん上の方で、何やらもそもそと動く気配があった。やがて、小さな明かりがぼつんと灯った。ペンダントのライトを点けたらしい。

「わかった、それ以上動くな！」

目が慣れるまで、マックはそのライトに照らされた暗い壁を見ていた。ゆっくりと腕を動かしてみる。骨は折れていないらしい。

マックは慎重に立ち上がった。体の上から下へ自己診断をして、骨折などの重傷がないことを

確かめる。

「ほぼ異常なし、と」

「はやく助けてよお」

バギーから放り出されて、天井や壁に縦横に走っていたワイヤーやファイバー類にからみとられて身動きのとれないシェルミーが声をあげた。

「どっか痛い所は？」

クモの巣よろしくからんだワイヤー類に縛られてぶら下がっているシェルミーに、マックが訊いた。

「からだ中！ 早くこれ、何とかして！」

「はいはい。その元氣なら心配することもなさそうだ」

シェルミーを抱きかかえるようにして、マックはワイヤー類をほどきにかかった。

「さ、急ごう」

「どっか行く所あるの？」

やっと床をブーツで踏みしめたシェルミーは、乱れた髪を気にして指で梳すいている。

「何のためにこんな所へ突っ込んだの」

マックは、貫通した粒子砲の焦げ跡が二、三カ所に付いている内側イシナハッチを手で示した。

「このドアの内側が、おまえさんお望みの死人の街——閉鎖区域よ。さ、早く——でないと物好きな連中が、この自殺行為の跡を確かめにくる。早いとこバギーから荷物を出して——」

マックは言葉を切って、外側ハッチの残骸にくいこんだ、スクラップと化したバギーを見やった。前面はすっかりつぶれている。

「おーお、悪運が強いこと。よくも生き残れたもんだ」

マックは、エアロックの破片やバギーの部品を蹴とばしながら歩いていって、潰れたボンネットを乗り越えた。ナビ・シートのディスプレイを覗きこんでみる。ディスプレイは、一つ残らずブラックアウトしていた。

「ま、壊れん方がおかしいわな。さて、使える荷物だけでも回収して、出かけようか」

「ね、ほ、ほんとにこの道でいいの？」

「さあね」

心配そうなシェルミーの問いに、マックは手にもったセンサーから目を離さない。

二人は、リヤのトランク内でかろうじて破損を免れたハンディ・タイプのサーチライトを頼りに、どことも知れぬ狭い通路を進んでいた。一杯に拡散させたライトの光が時折照らし出す天井や壁面の把手は、かつてここが無重力帯であったことを示している。

通路が狭すぎて二人でならんで進めないために、持てるだけの道具を持ってマックの後をついでいるシェルミーが、小型の高圧ポンペを提げた手でマックの背を突ついた。

「ここ、どこらへん？」

「さあね。——安心していい、スピリット五五なんて菌も、有毒ガスもない」

重いスーバートラップをエネルギー・バックごと背負ったマックは、振り向きもせずには答えた。「もつとも、この材質劣化の進み具合からすると、最近二、三世紀は誰も通っていないようだな」

現在はジャンクションの奥深く埋没したイシュタルの周辺区域が、かつては外縁部だったことを示す名残の区画ハッチが、サーチライトの白い光に照らし出された。無愛想な手動式らしく、棒型のハンドルが頑丈そうなハッチの表面に太いパイプを走らせている。

「またあ？」

シェルミーは、今までにくぐった気密シャッターや区画ハッチを数えてみた。シャッターや隔壁の中には、開閉機構がぶっ壊れていて、マックのスーバートラップで強引に突破したものも二つ三つある。

マックは、すっかり古ぼけた気密ハッチのバーハンドルにそっと触れてみた。表面処理のゲルコート材がはらりと剥げ落ちて、下の色褪せた金属地がむき出しになった。

「動くかな」

かまわずにハンドルに手をかけたマックの腕を、シエルミーが押さえた。

「待って……」

「どしたの？」

マックは手持ちのサーチライトでシエルミーの顔を照らし出した。妙に白く、蒼ざめている。

「音……聞こえない？」

「音？」

はっとして、マックは今通って来た通路の奥へサーチライトを向けた。シエルミーは指先を震わせながらハッチを指す。

「ヤロー、もう追っかけて来やがったか——ん？」

「そっちじゃなくて、こっち」

「え？」

か細いシエルミーの声に、マックはハッチヘライトを当てた。

「音？ こっちから？」

暗い中でもはつきり蒼白とわかる顔で、シエルミーはうなずいた。

「ほんとに？」

もう一度うなずく。

「何の音——!？」

言いながら耳を澄ましたマックは、はっとして耳をそばだてた。

かすかに——空耳かと思うほど、かすかに何かの音が聞こえてくる。連続して、途切れずに、リズムを持って。

マックはもう一度、シュルミーの顔を見た。出来るだけ優しく笑ってみせる。

「戻るか？」

シュルミーは、閉じられたままの気密ハッチへ目をやった。一度、目を閉じて深呼吸をすると、マックに向いて強張った笑みを浮かべた。

「行く」

「あっそ」

マックは、ハンドルを握る手に力を込めた。永い間、誰の手に触れることもなかったハンドルは、束の間抵抗してからするとまわりはじめた。

「この次の奴が、最後のハッチのはず」

「待って」

マックの手を、シュルミーが押し止めた。

「あの……幽霊って信じる？」

「俺は見たものしか信じない主義だ」

宇宙空間で幽霊が出るのは、さほど珍しいことではない。

マックは旧式な小判型のハッチを奥へ開いた。とたんに、それまでよりはっきりと音楽が聞こえてきた。

シエルミーとマックは顔を見合わせた。リズムセクションの一六ビートが壁の向こうから鳴っている。

「パーティーでもやってるようだね」

「うそ……でしょ」

マックは通路をライトで照らし出した。突き当たりに、今開いたのと同じ型式のハッチがある。

「どこにつながってるの？」

遠くから聞こえてくる音楽を気にしながら、シエルミーはハッチをすかしてみた。

「イシユタルの喉、西の市街区、二階層目の床下あたりか一階層目の天井か……」

最後の通路に足を踏み入れたマックは、センサーをちよつと振ってみた。

「よし、きれいなもんだ。ここにも有害成分はない」

行きかけたマックは、うつむき加減にハッチに手をかけたまま動こうとしないシエルミーに振り向いた。

「どうした？」

シエルミーは不安そうな顔を上げた。マックは肩をすくめた。

「これが最後のチャンスだ。今ならまだ間に合います——戻る？」

シエルミーは、口をとがらせてマックを睨みつけた。隔壁を乗り越えて、ハッチを閉じて歩いて来る。

「大したもんだ」

小声で呟いて、マックは歩き出した。最後のドアのバーハンドルへ手をかける。ハンドルは意外に簡単に動いた。隔壁から、ハッチを押しえつけていたシャフトが抜ける。

「ん？」

シャフトが抜ければ、自動的にスプリングの力で開かれるはずのハッチは、ぴくりとも動かなかった。

「こいつもイカれてるらしいな。錆びついてて動かない」

マックは、サーチライトをシエルミーに渡して、肩にかけたスーパートラップをおろした。

「下がってろ。こいつも吹き飛ばす」

通路の中ほどまで下がって、マックはスーパートラップを抱え撃ちに持ち上げた。

「タンクのマウスピースくわえて。気密部分はここで終わりだ」



言われて、シエルミーは傷だらけの中古のエアボンベを肩にかけた。垂れ下がったホースの先のマウスピースを口にふくむ。

マックも、背のエネルギー・バックの下にジョイントで固定したエアボンベからホースをひいた。宇宙服及び循環システムを持たない小型機用の超高压エアボンベ、活動可能時間は常用で十二時間。節約や時間延長は、個人差と努力にかかっている。

マックは粒子砲を発射した。膨張した光がハッチをまわりの隔壁ごと吹き飛ばした。いつも通りきつく目を閉じて耳を押さえていたシエルミーは、おそるおそる目を開けた。通路の先に、不気味な闇がぼっかりと口を開けている。

奇妙な沈黙があたりを支配した。次の瞬間、騒々しい喋り声が闇の中に反響する。

『やゝあ聞いてくれたかな。曲は「ヘルプ!」、古い時代のクラシックになっちゃってる曲だ。

ここで最新のニュースをお知らせしよう。ベルネードのご機嫌がよくないらしいんだ……』

「こいつだ」

マックは、スイッチが入りっぱなしのまま海賊放送ダンシング・スターをがなりたてているマルチバンド・ラジオを拾い上げた。ディスクジョッキーは、母星ベルネードの太陽風擾乱による電波状態の不良を告げている。

「まだ、鳴ってたの？」

シェルミーは、おそるおそるマックの拾い上げたラジオに近づいた。

「三年間も？」

「高級な燃料電池になると、百年間も放送衛星ラジオ・スターを鳴らせる奴もあるさ」

マックはラジオのスイッチを切ろうとして、やめた。次の新曲を鳴らしはじめたラジオを、そつと床に置く。

「消さないで置いてくの？」

「そ」マックは立ち上がった。「そこらへんで、聞いてる奴がいるだろうからね」

一瞬きよとんとしてから、シェルミーは悲鳴をあげてマックを追いかけた。

マックは、腰の後ろに手をまわしてボンベのコックを開いた。呼吸器感染であるというスピリット五五に対する、気休め程度の対策である。

「それじゃ、行ってみようか」

マックは、先に立って破壊した隔壁をのりこえた。街の地下にあたる広大な“床下”へ入る。

「相変わらず有毒成分はなし、と」

ハッチを吹き飛ばしたために、サーチライトの光束の中にもうもうと埃ほこりが立っている。エアセ  
ンサーを振って大気チェックをしたマックは、たっぷり三〇メートルは飛んでいたハッチの残骸

を軽く蹴った。

「うえ……」

「待ってよ」

先に行ったマックに、ライトを持ったシュルミーが小走りに追いついてきた。妙にしかめっ面のマックを見上げる。

「どしたの？」

マックは肩をすくめてシュルミーを見た。

「いや……何でもない」

もう一度ハッチの残骸を蹴って、マックは歩き出した。

最後の区画ハッチは、内側から溶接してあった。

「よっと」

埋設されたケーブルやチューブを点検するための地下通路の出入り口のマンホールを持ち上げて、マックは道の角から首を出した。一方が蝶番ちょうつがいになっている長方形の蓋ふたをストッパーがかかるまで押し上げて、くわえていたセンサーを手に取る。

「ほお……循環を止められたわりにはきれいな空気だ。ひょっとしてこのセンサー、壊れてるの

か」

少し酸素が少ないくらいで、他に異常を示すわけでもないセンサーの液晶ディスプレイを軽くはじいて、マックは作りつけの梯子から道路に出た。

「誰よ、生きては入れない死人の街だなんて言ったの」

シエルミーが上がってくる。

「ちゃんと生きてるじゃない」

「おかげさまで」

マックは、街を見渡した。所々にぼつんと光が点いたり、明るいショーウィンドウがあったりする。

「ねえ……」

ぶるつと震えて、シエルミーがマックに寄りそって来た。

「どうしてまっ暗じゃないの？ エネルギー、外から全部切られちゃったんでしょ」

「自家発電や燃料電池がまだ生きてるんでしょ」

マックは、夜間照明も消えて真の闇になっている天井を見上げた。

「融合炉や大型のエネルギー・バックなんかは、ほっといても二年や三年で消えるもんじゃない」  
「ふうん」

シェルミーは薄気味悪そうな顔で、所々にぼつんと灯の点いている暗い街並みを見まわした。

「往生際悪いの」

「無茶苦茶いうな……さて、ここはどこでしょう」

マンホールを蹴り戻して、マックはその表面にサーチライトをあてた。スリップ防止のためのグルーピングと一緒にブロックナンバーが彫つてある。

「どこ？」

「第二層、ネオ・サイオン市西——四二七。元のイシュタルの喉が、レティシア崩壊で流れ込んだ避難民で一気にふくらんだ時に新しく出来た街だ」

「へえ……」

マックを見上げたシェルミーは、彼が妙に優しい顔で街並みを見ているのに気づいた。

統一のとれない、新しい建物が、交差した道の両側に続いている。

工費節約と工事期間短縮を最優先にした複合カプセル住宅やプレハブビル、エアドーム。消えかけた街灯や、住む者がいなくなっても灯され続けているライトやショーウィンドウの照明が、三年越しの夜に包まれた街で点々と光っている。

「ここ、どんな街だったの？」

街という器だけで、生き物の気配がまったくない死んだ静寂の怖さにマックの腕をつかまえた

まま、シェルミーが訊いた。

「人口六〇〇万、三階層三二ブロック。今の規模になったのは七年前、それまではスタジアムだの遊園地くらいしかない、閑静な住宅地だった」

観光案内でも読んで聞かせるような無感情な口調で、マックは続けた。

「でかい美術館やら古い公園、貧乏大学なんかもあって、自称芸術家や劇団員、旅行者や放浪者なんかのたまり場にもなっていた。——そう何回も来たことがあるわけじゃないが……悪い所じゃなかったな」

「こらあ……」

シェルミーは、いたずらっぽいやつでマックの腕を抱きしめた。

「何かあったなあ、ここで」

「え、なんだ？」

「白状しろお。そんな顔、はじめて見ちゃった」

「あつそ」

マックは、げんなりした顔でシェルミーから目をそらした。

「俺が生まれたのが、旧サイオン市シティだったんです。——崩壊前のレティシアのね」

シェルミーは、握ったこぶしを口にあてた。

「ごめん……なさい」

「いいさ。——お、いいもんがあった」

サーチライトに、車道から一段高くなった石畳風の歩道に片輪をのりあげたまま傾かいている小型のコミューターが照らし出された。

「まだ動きまますかな、と」

シェルミーを置いて足早に歩いていったマックは、屋根付きフルカバードの二座席を照らしてみた。

「あらま」

「どお？」

追いついてきたシェルミーを見て、あわててサーチライトをそらす。

「どしたの？」

シェルミーは、コミューターの横からシートのもーターパネルをのぞきこもうとした。とっさにマックがシェルミーの真正面からライトを照射した。

「うわ、まぶし」

「だめだ、こいつ、ぶっ壊れてる」

「なによ、どこもおかしく……え？」

ぶしつけないサーチライトの光に手をかざして、無理にコミューターの中を見たシェルミーは、

そのまま硬直した。

「あーあ、言わんこっちゃない」

瞬時に白くなったシェルミーの顔を見て、マックはライトごと顔をそらした。

「ほれ、行くぞ」

細い手首をつかんで、強引に歩き出す。

「い……い……いまの……」

引っ張られながら、シェルミーが口をばくばくさせた。

「はいはい、ご覧の通りです。だから壊れてるって言ったんだ」

「だ、だって……」

「あの程度でおたついでるようじゃ、幽霊屋敷スリライ・ハウスとやらにたどりつく前にショック死するよ。あんなのの同類が、まだいくらでもいるんだから」

足早にコミュニーターから遠去かるマックに手を引かれて、シェルミーは傾いて停まったコミュニーターに振り返った。

シートの上で、青黒くミイラ化した死体が二つ、抱きあって折り重なるように座っていた。白と黄色の、不思議な鮮やかな服の色だけが眼の裏に焼きついている。



## S-6 幽霊屋敷

スリラー・ハウス

「相変わらずスピリット五五は検出されませんな」

マックはセンサーをポケットに放り込んだ。

「制御不能だの何だのと言っても、れっきとした戦略兵器だ。任務終了したんで自滅したのかな」  
スピリット五五に関するデータは全くといっていいほどなかった。

ゾンビー・メーカーやタランチュラ・シリーズなどの古株の生化学兵器と違ってかなり新しいものらしく、イシュタルの喉での流出事故以前にも実戦での使用記録はない。以後の使用記録も見当たらないところがさらに不気味で、傍系や改良型が使われた形跡もない。

最初にスピリット五五の流出事故をキャッチした病院のデータにしてからが、イシュタルの喉封鎖の直後に起きたというコンピュータの事故で軒並み消失している有り様である。スピリット系の細菌兵器を研究開発していたのは星系軍関連の民間会社らしいが、それも「らしい」というだけで確定情報ではない。

「だいたい、スピリット五五って、どういう病気だったの？」

暗い街並みなるべく見ないようにして、シェルミーが訊いた。

「神経細胞を破壊する、毒ガスみたいな奴だったらしい」

マックは、辺境部の中継ステーションで聞いたイシュタルの喉封鎖のニュースを思い出していた。

それまで風土病で植民惑星が丸ごと全滅したり、ワクチンが間に合わずに住民やスタッフが一人残らず死んでゴースト・タウンになった宇宙都市の噂は幾度となく聞いていたから、よくガーランド中継点ジャンクションが死ななかつたもんだと思つた覚えがある。満足な検疫体制の整っていない初期の開発惑星や辺境のステーションでは、伝染病や風土病の発生は珍しいことではない。ただ、事故による（らしい）生化学兵器の流出というのは、そう滅多にあることではなかつた。

「もし伝染すると、まず手足の震えが来て、しびれたりして、それから発熱、昏睡——最後は心臓停止か呼吸停止でオチだ。潜伏期間は二〜三時間、発病から死亡までに十二〜三十六時間、死亡率は確認されている限り一〇〇パーセント。即効性で待ち時間が少ないとこなんざ、さすが生化学兵器あがりの病気ですがね」

「病氣ってゆるんじやないわよ、そんなの」

「さいですか」

二人は、幹線道路沿いの歩道を歩いていた。街灯が点きつ放しになっていたり、窓明かりが消えていなかったりで闇に閉ざされる心配はない。

道路一杯にスリップして横倒しになった大型のパネルトレーラーが、運転席をドラッグストアの店先に突っ込んで黒焦げになっている。

中央分離帯を乗り越えた低い車体の高速型コミューターが反対車線の車と正面衝突して潰れている。

最初の感染患者が出てから、イシユタルの喉の最後の一人が死に絶えるまで、計算ではほぼ一週間しかかからなかったはずといわれている。一つの街をわずか七日間で死の街に変えた死に神の鎌の跡は、至る所に残っていた。

事故や破壊のあとを乗り越えたり迂回しながら進む。

「ちょっとお」

道をふさいだタンクローリーへよじのぼったシェルミーが、先に飛び降りたマックへ声をかけた。

「今、どこらへんなの？」

「まだネオ・サイオンの街ん中だ」

タンクの接続部から道へ降りるシェルミーへ手を貸しながら、マックは答えた。

「スリラー・ハウスまであとどれくらい？」

車道へすくと飛び降りたシエルミーが周りを見渡す。ビルの陰や道端に、人の形のシルエツトがいくつか転がっているが、シエルミーはすぐ目をそらした。

「今のペースじゃあと二、三時間かかるな」

「にさんじかんー？」

シエルミーが大仰に驚いた。

「なんとかならないのお。疲れた」

「はいはい。そこらへんで一休みしてくかい？」

マックは、街角でランタンを点けっ放しにしたままの人気の失せたカフェテラスを指した。シエルミーはちよつとばかりうらめしそうな目付きでマックを睨む。

「やあだ。そんなのより、コミュニーターとかモノレールとか、ない？」

「誰がモノレールを動かしてるんだ、誰が。道がこんな感じじゃミニカーやコミュニーターじゃ動けんし……ん？」

かちり、と何かが噛みあうような音が聞こえたような気がして、マックは顔を上げた。

「なんだ？」

シエルミーが、声のない悲鳴をあげてマックにしがみついた。どこかで、モーターらしい機械

が動き出す音がする。マックは、はっと気づいて、クラシカルな開拓星風のカフェテラスの切妻屋根を見上げた。

「ん——？」

懐古調の、緑色に塗られた板張りの屋根に時計塔が建っている。ぼんやりとした青白い光に包まれた大きなアナログ式の時計盤が、ゆっくり開きはじめていた。

「な……なんなの一体？」

「残念でした、幽霊じゃありません」

マックは優しくシエルミーのおとがいに指をあてて、大時計に顔を向かせた。

「見てごらん。どこの誰だか知らないが、クラシックな趣味の奴がいたもんだ」

「え……」

オルゴールの静かなメロディが、意外に大きな音量で流れはじめた。硬直して目を見開いたシエルミーは、ごくんと息を呑んだ。

四方に開いた時計盤一つ一つの中から、複雑なハーモニーのオルゴールによって小さな舞台がせり出してきた。騎士や職人や姫君といった、古い星の伝説に出てくるような人形が機械仕掛けでくるくる回りながら姿を見せる。

「うっわあ♡」

シェルミーは声をあげた。

「すっごおい」

「よく動いてるもんだな」

時計台を見上げたまま、マックが言った。少し色褪せた衣装をつけた人形が舞台に出揃った所で、一度停止した。オルゴールにあわせて体ごと一礼し、また回りながら舞台の奥へ戻っていく。

「ねえ……」

シェルミーはマックに寄りそったまま、時計の中へ消えていく人形を見ていた。

「あの人形たち、ずーっとああやって踊ってるのかなあ」

人形が全員戻ると、時を告げる鐘が鳴りはじめた。オルゴールが最後のメロディを繰り返しながら、音量を下げていく。

「時計は正確に動いてるようだし——」

マックは、時計の時刻を自分の時計儀と見比べた。外観はクラシックだが新しい機構を使っているらしく、ほとんど狂っていない。

「燃料電池が切れるまでは働いてるだろうな」

「なんか、かわいいそうみたい」

マックはうんざりした顔であたりを見た。

「お、いいもん見つけ」

テラスの横に、カフェレーサー風に改造したエアバイクが停めてあった。

「あれを借りていこう」

「そばに持ち主、いるんじゃない？」

「あいさつすればいいさ」

マックは、ダンスツールKZ九〇〇の改造らしいエアバイクに近づいた。案の定、キイはついていない。

「動くの？」

シェルミーは、ごついカウルをつけたエアバイクのメーターパネルをのぞきこんだ。

「さて、どーでしょ」

マックは、手持ちの小さなレンチを使って、エアバイクのサイドカバーをはずしにかかった。

シェルミーは、シートに触れてみた。硬めの黒い高分子材料のシートに、指のあとがつく。

「うわー、ホコリだらけ」

「長年ほったらかしだったからねえ」

カバー内の配線をいじっていたマックは、結線を直結にした。パネルに灯が入り、メーターが生き返る。

「電圧／電流は異常なし、ガスは八分目——上等だね。エンジンはかかるかな」

マックは、クリップオンハンドルのスタートボタンに手をかけた。軽くスロットルをおりながらボタンを押すと、スターターがまわり出す。何度かしゃくるような音をたててから、大きな爆音が街角に響いた。

「よおし、かかった」

ハイチューンされたらしい水素タービンエンジンは、やがて高周波の回転音とともに排気が安定した。

「オッケ、三年間ほうりっぱなしにしちゃ、いい調子だ」

ブレーキレバーをひいて、テールカウルの減速用エアブレーキと逆噴射フラップの作動を確認する。メーターパネルにも異常はない。マックはエアバイクにまたがった。

「後ろに乗って。行くよ」

「汚れるからやだ」

シエルミーはぶつぶつ言いながら、タンデムシートの埃をバンダナでぬぐった。横座りに腰をおろす。

「しっかりつかまって」

バックステップのスキッドブレーキをはずしたマックは、大径のヘッドライトをつけた。暗い



街に、一直線に光がのびる。

「行くよ」

エンジン出力をあげて、前後のホバーノズルのフラップを開く。エンジン音に爆発するような低音が加わったと思うと、エアバイクは前後のホバーノズルからの噴射でふわりと道から浮かびあがった。

「お、いい感じ」

母屋であるレティシアにいたところは、マックもよくエアバイクをぶっとばしていたクチである。横滑りする感じで車道に出たマックは、ダンストールKZ九〇〇のエンジンを一気に全開にした。

「わは！」「な、なに!？」

二割がた容量アップされているらしいタービンエンジンは、エアバイクを一気に前傾させた。前後のホバーノズルからの加速態勢のフラップで整流されたジェット噴射が頭の血を後頭部に集中させるような加速で二人をシートに押しつける。

「す……ぶ……」

振り落とされないようにマックに力一杯しがみついたシェルミーが、かろうじて言葉を絞り出した。

「わあっと」

交差点で傾いだまま停車したバスが、エアバイクのバランサーで対地角度一定に保たれるヘッドライトに照らし出された。あわてて逆噴射ブレイキをかけると、今度は加速時と逆に大きくフロントが持ち上がり、前方に整流されたジェット噴射が強力な制動をかける。

「まともに走れないのお！」

「道が道だからね」

乗り越えるほうが早いと判断して、マックはアフターバーナーに点火した。水平に戻った車体が炎を噴いて躍りあがった。あつという間に低空飛行並みの高度をとってバス上空を跳び越える。

「悪くない性能ですよ、これは」

アフターバーナーを切って、道路上に降下したエアバイクを操りながら、マックは車両状態をチェックした。よほどの好き者がチューンしたらしく、かなりの性能アップがなされている。

「調子もいい。これならあつという間に目的地に着ける」

「ゆっくりでいいわよ！」

巡航に入って、かすかに前傾したまま疾駆するエアバイクの上でシェルミーが喚いた。

「それより、人のこと、落とさないで」

「へーへ、気をつけましょ」

近代的な雑多な建築が並ぶ中で、幽霊屋敷スリラー・ハウスは異様なたたずまいを見せていた。

闇に閉ざされた街の中に、周囲からの照明によって浮き上がらされた白い古城が、時代を超越して付近の空気まで静止させているように見える。

「これが、かの有名な幽霊屋敷だ」

おどろおどろしい字体の、ホログラフの看板が出ているがっちりした城門の前にエアバイクを停めて、マックは降り立った。スーパートラップをエネルギーバックごとバイクの後ろに固定する。

「妖怪博物館とか恐怖の館とかいろいろと言われてたけどね、要は怪奇物専門の蠟人形館よ」

「中、どうなってるの？」

シェルミーは、薄気味悪そうな顔で城壁を見上げた。所々に砲眼や窓が開いているが、中の様子はまっ暗で見えない。

「中？ お化け屋敷だよ。——お化け屋敷、知らない？」

「知ってるわよ！ 妖怪や化け物の人形がいて、幽霊のメーカーキャップした俳優さんがうろついてるの」

「その通りです。もっとも、並の規模じゃないし、ほとんどの化け物は無茶苦茶精密に作られたロボットだって話だけどね」

「ロボット？——じゃ、生きてるの？」

「さあ？」

マックは、幽霊屋敷スリラー・ハウスからシエルミーに目を戻した。

「で、おまえさん、ここで何をやるんですか」

「あの……ね」

シエルミーは、困ったような笑みを浮かべた。

「ここに住んでる、占い師のおばあさんに会って、ペンダント見せろって」

「はあ？」

マックはまじまじとシエルミーの顔を見つめ、それから、何重にも鋌びょうが打たれてぴたりと閉じられている、分厚い鉄の城門を見上げた。

「占い師——だと？」

「そ」

シエルミーは後ろ手に手を組んで、マックから目をそらした。

「占い師のばーさんねえ。おまえさんのじーさんとやらは、ここの状況を知っててお宝の手がかりばらまいてくれたの？」

「さあ……」

「手まわしのいいじーさまだ……占い師のばーさんねえ……」

「何よ、おばあさんっていうだけなんだから、生身の人間とは限らないじゃない！ アンドロイドの人形かなんかで、魔法つかいのおばあさんや妖術つかいのおばあさんがこの中にいたっておかしくないじゃない！」

たて続けにまくしたてるシェルミーに、マックは両手を上げた。

「へーへ。仰せの通りでございます。それじゃ古今東西の妖怪の巣だっという、この中に入ってみる？」

マックは、城門のすみの通用門を指した。こちらの鉄の扉は半開きに開いているが、中の様子はやはり暗くて見えない。

「行くわよ、もちろん」

歩き出したシェルミーは、門の前で立ち止まった。暗い城内を、何とか見すかそうとする。

「どうした？ 行かないの？」

後ろに立ったマックが、シェルミーの背をこづいた。シェルミーは、背後のマックの顔を見上げた。

「ここ、幽霊屋敷なんでしょ？」

「看板にもそう書いてあります」

「幽霊屋敷の中じゃ、本物の幽霊が出てわからないね」

マックはシュルミーの頭をぼんとたたいた。

「おまえさんも悪趣味なこと考えるね。全部が全部ロボットだと思えば大丈夫さ。さあ、行こう」

シュルミーの肩を押すようにして、マックが歩き出した。シュルミーは暗い城内をじっと見つめたまま、肩におかれたマックの手に自分の手を重ねた。

「いらっしやいませ」

「え？」

シュルミーは思わずマックの手を握りしめて立ち止まった。

「や、やだ、何か言った？」

「いや、俺は別に何も……」

「イシュタルの幽霊屋敷スリラー・ハウスへようこそ」

一瞬の沈黙の後、シュルミーは力一杯悲鳴をあげた。暗がりの中で、人影がゆらりと動いた。

「お二人様ですね」

「落ち着いて。落ち着きなさいってば」

マックは背後から、半狂乱になったシュルミーの口もとを押さえこんだ。

「よく見ろ、幽霊じゃない」

「やあ、どうも。私、案内人です」

通用門の暗がりの中から、黒いスーツを着て帽子を目深にかぶった、葬儀屋のような雰囲気  
の男が現れた。

「ただ誰この人……」

がくがく震えながら後退あどきったシェルミーが、震える指先で黒い影のような男を指した。

「案内用のアンドロイドだよ」

「久しぶりのお客様ですね。スリラー・ハウスへようこそ」

案内人は大仰な身振りで一礼した。

「アンド……ロイドなの？」

目深に被った帽子のために表情がよく見えない。シェルミーは男の顔をのぞきこもうとした。

「私ゃただの案内人ですよ」

男は古風なネクタイをしめた胸の前で手を振った。

「さあ、中へどうぞ」

「そうさせてもらうか。えーと、大人一枚に子供一枚……」

通用門に掲げてある料金表を見上げたマックを、シェルミーがじろりとにらみつけた。

「こどもー？」

「大人二枚だそうだ」

「はい、毎度どうも」

石造りの通路の両側に、キャンドルに似せた明かりが続いている。炎のようにちらちらと揺らめいているが、レーザーホログラフの炎は触れても熱くない。

「気味が悪い……」

マックのジャケットの裾をしっかりと握りしめて、シェルミーがついてくる。

「そーゆー場所なんだから、しかたないでしょ」

突然、ばさばさっといくつもの羽音が聞こえた。悲鳴をあげたシェルミーがマックにしがみつ。石造りの廊下に、甲高い笑い声が反響した。

「コーモリだよ、コーモリ」

赤い光を放つ眼がいくつも流れる。キャンドルが作り出すわずかな明かりに、いくつもの黒い影がよぎった。壁際に寄ったマックが、石壁をなでてみる。

「ほら、赤外線センサーが埋めこんである。人が通りかかると体熱を感知してコーモリが飛びまわる仕掛けだ」

「あー、び、びっくりした……ひい！」



シェルミーの顔をかすめるように、コーモリが一匹飛びすぎた。首をすくめたシェルミーがマックの首ったまに抱きついた。

「ぐ……ただのロボットだって言うてんでしょうが。く、首を絞めるなあ！」

「あ、ごめん」

シェルミーはあわててマックから離れた。

「この中のって、全部ロボットやアンドロイドなの？」

「確かそうじゃなかったかな」

「それじゃ……」

シェルミーは薄気味悪そうな顔で暗い廊下の先へ目をやった。

「この中にいるのって、まだ、全部、生きてるわけ？」

「よくは知らんが……」

マックはこめかみを指でかいた。

「……まあ、そういうことになりませうな。ロボットやアンドロイドなんかが使ってるリチウム・バッテリーや燃料電池は、そう簡単に切れるもんじゃないし、ましてやこの住人は三年間ずっと眠ってたわけだから、そんなに消耗してないだろうし、ここは修理点検用のロボットシステムも徹底してるし……」

「もういいわよ！」

シェルミーは声をあげた。

「早くいこう。こんな趣味の悪い所、あたしもうやだ」

「いやだっていうんなら、戻った方がいいと思いますけどねえ」

マックは、未だ方向を指した。

「これから、どんどん趣味悪くなるよ」

「うえ」

シェルミーは妙な声を出した。

「いいわよ。それなら早く占い師のおばあさん見つけよう」

意地を張って、先に一人で歩き出す。が、シェルミーは呻き声を聞いたような気がしてはっと立ち止まった。

「な……に？」

「だ……出してくれえ」

しわがれた声とともに、壁の鉄格子からミイラのような腕が出てきた。

「み、水をくれえ」

「や、やだ、何なの」

たじつと後ずさったシェルミーが、反対側の冷たい石壁に背中をぶつけた。壁に作りつけられた石牢の中に、目ばかりぎよろつかせた骸骨のようなミイラがシェルミーに骨ばった腕をのばしている。

「ふむふむ」

地下牢の横の説明板を読んだマックは、壁にはりついたまま動けないでいるシェルミーに声をかけた。

「地下牢のマン・イーターさんらしい。こう書いてある。『エサをあたえないで下さい。あなた、あなが食べられます』」

「こんなのしかないのお!？」

何とか獲物をつかもうと、自分の目の前でむなしく宙をまさぐる鉤爪かぎづめのついた節くれた指を見て、シェルミーは泣きそうな声をあげた。へなへなと石畳へへたりこむ。

「もう、やだ」

「ほれ、立って」

骨ばったミイラの手をぺたんと叩いてひっこめさせたマックは、シェルミーに手をさしのべた。

「お楽しみはこれからよ」

「お楽しみ?」

シェルミーはマックの顔を見返した。

「これのどこが楽しみなの？」

「あら、お化け屋敷ははじめてですか？」

「……」

シェルミーは黙りこんで、通路の先を見た。

「え？」

ろうそくの炎だけに照らされた暗い通路を、踊るような影が横切った。ひっと息を呑んだシェルミーが、マックにしがみつく。

「あ、あれも、仕掛け？」

「さあて行きやわかるさ」

マックは歩き出した。もう一度、陽炎かげろうのようなおぼろげな影が通路をよぎる。

「ユユユーレーよ、帰ろう！」

思わず硬直したシェルミーが、マックを立ち止まらせた。

「気をつけて見てなきや気がつかないもん。あんなあやふやな仕掛けなんかしてあるはずない！

ユーレーよ、本物のユーレーよ」

息もつかずにまくしたてたシェルミーの顔を、マックはしげしげと見つめた。

「よくもそれだけ理由を思いつくもんだね。いいさ、雇い主はおまえさんだ。戻りますか？」  
シェルミーは、マックの顔を見上げた。口をゆがめて何か言おうとする。マックは、わざとらしくうなずいて大げさに耳を傾けた。

泣きそうな顔をしてから、シェルミーはきつと牙をむき出した。

年に何人かショック死する客が出るといい、以前、手違いから閉館後一晩、城内に閉じこめられてしまった若いグループは翌朝までに全員が白髪になってしまったという。

石造りの階段に飾ってあった古い貴婦人の肖像がいきなり笑い出したり、てっきり雰囲気作りのために置かれていると思っただ本腕の巨大な甲冑に追いかけられたりして息も絶え絶えになりながら、二人は幽霊屋敷スリラー・ハウスの二階にたどりついた。

「まだ先があるのお」

複雑な彫刻が施された大きな扉の前で、シェルミーが息をついた。

「あと三階……」

「三階もあるの!？」

「地下一階の地上三階。精神異常を起こさずにフルコース消化するには丸一日かかるって話で、普通は一階分クリアしたら終わりになるらしいんだけどね」

マックは、案内人から買った四枚つづりの切符をひらひらさせた。

「しっかりフルコース券だ」

「もう充分よ」

「この街じゃ幽霊屋敷スリラー・ハウスの中も外も大して変わらないんだがね」

マックは、重い木の扉をぎいーっと開いた。

「——ん？」

扉の中には、赤い皮の服を着た男がつっ立っていた。

「なんだ？」

男は、わなわなと痙攣けいれんをはじめた。口をかつと開いたかと思うと、ぎしぎし音をたてながら口まわりがもりあがる。

「おー、変メタモルフォーセス身とはまた豪勢な……」

「何よこれ!？」

「見てな、何か他のもんに変身してみせるらしいから。新開発の超高級品だよ。噂は聞いたが、本物を見れるとは思わなかった」

言ってる間に、男の顔にすさまじい勢いで剛毛が生え揃そろってくる。

「ばば化けものお」

「あら、狼男ですよ、知らない？」

「おーかみおとこお？」

すっかり獣じみた顔になった男は、一声吠えて、ひっこんだ。部屋の中から、ビートの効いたポップスが聞こえてくる。

「さ、他の連中の顔も見にいこう」

「帰りたいよー」

泣きそうな声で言っ、シエルミーはマックに連れられて一つめの部屋に入っていった。

「わあ……」

豪華なシャンデリアの下で、古風なディスコ・パーティーが行われていた。回転するミラーボウルの下で、若者たちがプロのダンサーのように見事な踊りを見せていた。カップル同士で、思い思いに回り、跳ぶ。だが、シエルミーは、何となく違和感を感じてマックの顔を見上げた。

「ねえ……何かおかしくない？」

「まともであるはずがないでしょお」

だしぬけに音楽が途切れた。ストップモーションをかけられたように、ダンサーたちの動きが止まる。

シエルミーのすぐ目の前でステップを踏んでいたカップルが、うつろな視線を向けた。死人に見つめられたような薄気味悪さをおぼえて、シエルミーはマックの手を探った。

「どうしたの……何がはじまるの？」

「さあ？ まだバンフレット買ってないから……」

仮面のように無表情だったダンサーが、かすかに笑った。次の瞬間、目の前のカップルの頭がはじけ飛んだ。

「ええー!？」

かつてダンサーだったものの顔の下から、まったく別のものが姿を現した。粘液質のどろりとした複眼がシュルミーとマックをねめつける。

「おえ」

昆虫類と原生動物をかけあわせたようなグロテスクな造型に、マックは口もとを押さえた。人間の皮をかぶっていた化け物は、その口からしっとりと濡れそぼった半透明の触手を何本も吐き出した。どろりと垂れ下がった触手が、獲物を求めるようにもたげられる。

「どーする？」

マックは、一言も喋らなくなったシュルミーをこづいた。反応がない。

「最後まで見てく？——あれま」

顔をのぞきこんだマックは、シュルミーの目の前で手を動かしてみた。

「硬直してる。しょーがありませんね」



マックは、ぶるぶる震えて動けなくなったシェルミーを抱き上げた。壁に沿って歩き出す。

音楽が、途切れた時と同様にリズムも刻まずに再開した。やかましい電子楽器がホールを騒音で埋める。

重そうな自動ドアが奥へ開き、次の暗い部屋へ入ったところでシェルミーはやっと悲鳴をあげた。

「何だったのよ、今のは!」

「実に惜しかったな。黙って見てれば、あそこで踊ってた連中全員が化けて見せてくれたろうに」

「悪趣味! ゲテモノ好き! あんなの好きなんて人間じゃない!」

シェルミーは一通りののしってから、まわりを見た。

パーティー会場のホールだった一つめの部屋とは違って変わって暗い部屋である。天窓に似せた照明が、月明かりくらい光を落とす中に、いくつもの人影が見えた。

「何なのこの部屋?」

「何なんでしょーね」

マックは、手近の影を見上げた。身長二メートルを軽く越す巨漢の顔は、縦横に縫い傷がのたくっている。極く初期の人造人間のモンスターらしい。

そのとなりには、腰の曲がった老婆が、曲がりくねった杖を持って立っていた。つばの広いと

んがり帽子をかぶり、鉤鼻が口の前まで垂れている。

「魔女ですな。よー出来とる」

魔女に一礼して、マックは次へ歩きかけた。

「お客さん」

いきなり、涼やかな声が聞こえた。びくっとしたシェルミーがマックの腕をつかんだ。

「ねえ、誰かいる！ 今の聞いたでしょ？」

「はいはい、どなたかいらっしやるよーですねえ」

マックは、声のした方向の闇を透かしてみた。

「こちらですよ、お客さん」

小さな丸テントが建っていた。黒いびろうどの地に、金や銀の糸で複雑な紋様がぬいどってある。

「怖がることはありません、ただの占い師です。いかがですか」

シェルミーとマックは思わず顔を見合わせた。

「占い師だって……」

「お目当てのかどーかわからんが」

マックは、シェルミーを引っ張って歩き出した。

「行ってみよう」

小さなテントの幕をはねあげる。天井から吊るした小さなランタンの灯の下に、水晶球を前にした長い髪の女性が座っていた。

「おー、久々の美人……」

見どれかけたマックは、シェルミーにつかまれていた右手の甲をいやというほどつねられた。「占いはいかがですか？」

黒いドレスの占い師は、たおやかな笑みを浮かべてテーブルの上の水晶球に手をそえた。

「過去、現在、未来、水晶球に映る限りどんなことにもお答えできます」

「行く」

シェルミーがマックの腕をひっぱった。

「人違いよ」

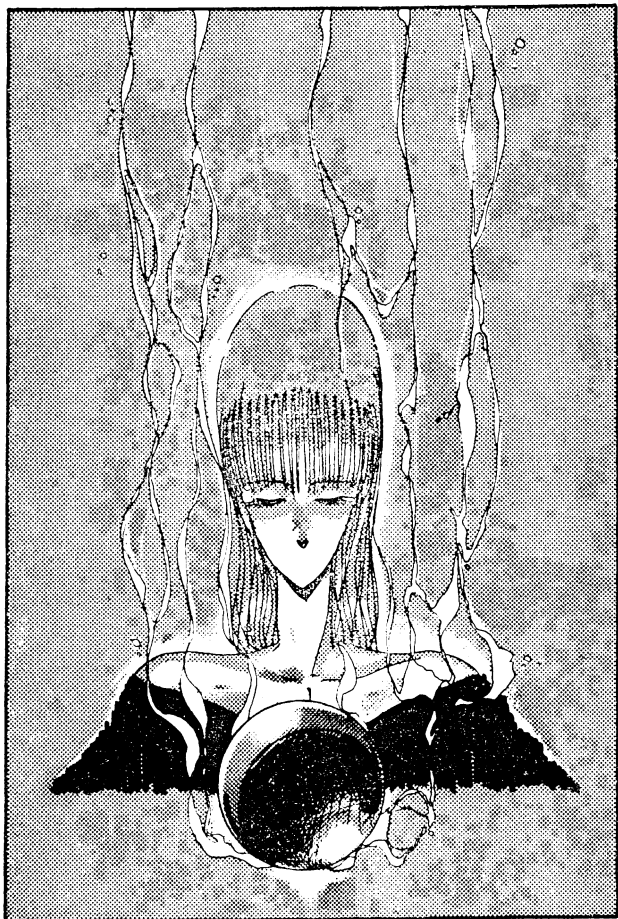
「人違い？ どうして？ 幽霊屋敷スリラー・ハウスの占い師だぜ？」

「おばあさんじゃないもの」

「ねえ、つまんない事訊いて申し訳ないけど」

マックは占い師に顔を近づけた。

「年いくつ？」



「は？」

回路に一瞬乱れが生じたように、占い師は目をぱちくりさせた。それから、謎めいた笑みを浮かべる。

「二〇世紀も前から、数えていませんわ」

「だそーだが？」

マックはシエルミーに目を戻した。

「訊くだけ訊いてみたら？」

ぶすーっとマックをにらみつけて、シエルミーはターフルの前の彫刻のある椅子に座った。

「占ってもらいたいのは、星の行方。虹の橋のたもとに埋まっている、星のかけらの掘り出し方」

「何て暗号だ」

マックが首をひねっている前で、占い師は水晶球に手をかざした。

「では……あなたが提督の血に連なる方なのですね。待っていました」

「おい……」

マックとシエルミーは、もう一度顔を見合わせた。

「当たり前だぜ」

「それじゃあなたなのね」

シエルミーは、思わず身を乗り出した。

「光の源を、お探しなさい」

目を閉じた占い師は、夢見るような口調で言った。

「なにそれ？」

「光の源から0300、妖精の巣より星三つ。伝えるべきことは、これだけです」

「ふん……」

マックは、腕を組んでテントの入り口にもたれかかった。

「よくよく謎かけの好きなじーさまだったんだな。光の源より0300、妖精の巣より星三つ、か……」

「どういう意味なのよ」

「さあね。暗号は、解読しないと意味を成しません——うわ！」

妙な気配を感じてテントの外へ目をやったマックは、とっさに転がり出た。間一髪のタイミングで、重い両刃のトマホークが木目風の床面パネルにくいこんだ。

「な、なんだ、物騒な……」

さきほどの人造人間のモンスターが、長柄のトマホークを振りおろした姿で静止していた。

「何の騒ぎよ！」

テントから飛び出してきたシュルミーが、そのまま凍りついた。いつの間にか、部屋の全域に散っていたはずの人形たちがテントを囲むように集まっている。

「狂い出したの？」

いくらスリラーハウスのアンドロイドといえども、客に直接危害を加えるようなプログラムはされてはいないはずである。

「——ちがう」

マックは立ち上がった。

「こいつら生身の人間だ」

「にんげんー!？」

「幽霊ならもっと風流に出てくるよ。何者だてめえら！」

怪物たちが、低い声で笑い出した。内側から外側へ、わずかずつ笑い声が高くなっていく。

「ちょっと、まずい……」

マックはシュルミーを引き寄せた。

「一瞬、こっちの立場忘れて見得を切ってしまった。こいつらが何者かってより、逃げよう」

「逃がさないよ、シュルミー・エル・フィダー！」

りんとした声が響いた。テントのすぐ前にいた年老いた魔女が、帽子とマントを脱ぎ捨てると、

夜目にもあざやかな銀髪が流れ落ちた。

「でっ、出たあ」

マックが、幽霊でも見たような声を上げた。

「え、えと、誰だっけ」

切れ長の目をした銀髪の美女の名を思い出せないシュルミーが、マックにささやいた。マックが素早くシュルミーの耳に口を寄せる。

「ブラッディ・コニーだよ！ 地元コネクションの大幹部だ——どうしてこんな所に……」

「さあ、観念しなさい、お嬢さん」

コニーは、血まみれという通り名の語源にもなっている、飾りのついた抜き身の細剣レイピアをまっすぐシュルミーに向けた。

「おじよーさんてのは何よ！」

シュルミーがコニーにかみついた。

「あなたのコンツェルンから手配書がまわっているのよ、お嬢さん」

冷たい目で、コニーはシュルミーをねめつけた。

「あなたを引き渡せば、けっこうな報賞金が入るのさ。もっとも……」  
コニーはくるりとレイピアをまわした。



「あなたが探しにきた宝物の在り処<sup>か</sup>を教えてください。っていうんなら、この街から逃がしてあげてもいいんだけどな」

「イーだ」

シェルミーは思いっきり舌を出した。

「誰があんたみたいなきんぎんメッキのおばんなんか」

「あばー」

マックはひろげた指で目を覆った。ブラッディ・コニーをおばん呼ばわりして、ただで済んだ話は聞いたことがない。

「さすが……」

コニーの目がすうっと細くなった。

「音に聞こえた大提督フリント・フィダーの孫娘だ」

マックは、スーパートラップをエアバイクに置いてきたことを後悔した。スリラー・ハウス幽霊屋敷の中であのか物を持ち歩くわけにはいかないが、あの高出力粒子砲が手許にあれば、肉弾戦にならない限り何とか出来る。マックは活路を求めて怪物たちの包囲網を見た。

コニーは、なめらかな動きでレイビアをシェルミーに向けた。

「では、それなりのおもてなしを受けてもらおうかしら」

レイピアが、窓から差し込むイミテーションの月の光を反射して振り上げられた。

幾重にも取りまいた怪物たちに突撃命令が下される。

「け、いつの間にかこんなに数揃えやがったんだ」

マックは低く身構えた。手に手にビームライフルやらメガランチャーやらをもった怪物たちがじりじりっと包囲網を締めにかかると。

「はん！」

一声あげて、シュルミーは軽く体をひねった。次の瞬間、太腿のホルスターから抜き出したライトラインの銃口がコニーに向けられる。

「さあ、どーだ」

マックは軽い頭痛を感じて額に手をあてた。シュルミーは、射撃の命中率は悪くてもライトラインに触り慣れている分動きが早い。

「これだから素人は……」

あさっての方に舌を出してから、マックは覚悟を決めた。

「ちょっと注意しときますがね、このお嬢さん素人だからね」

怪物たちの間に、かすかな動揺が走った。コニーは、かすかに笑みを浮かべてシュルミーを睨みつけている。

「どこに撃つか、わからないよ」

プロの戦闘において、常識知らずの素人ほど危険で厄介な存在はない。しゅっという息を吐いたような音を聞いた気がして、マックは振り向いた。

「！」

トマホークを振りかぶった大男がすさまじい勢いで打ちかかってきた。マックはとっさにシェルミーの体を抱いて横っ飛びにジャンプした。

「な、なにー？」

思わずトリガーをひいたシェルミーのライトラインからあざやかな火線が走った。抱えられているもので、急角度で照射が変わるビームが部屋を横薙ぎにした。思わず床に伏せた怪物どもの上を走り、壁をスライスする。

「危ないから振り回すな！」

シェルミーを抱えたまま走り出したマックは、転がった怪物どもの上を飛び越えた。床から、二、三発のビームが体をかすめる。体当たりで開けようとした飾りつきの木扉に、銀の光が突き刺さった。

「この街からは、逃がさないよ！」

重いドアを貫いたレイピアの柄が、細かく震動している。

かまわずに、マックはシェルミーごとドアに体当たりして回廊へ転がり出た。後を追う何本ものビームをくぐりぬけ、高い天井画のある回廊を走り出す。

「ひへへーい」

部屋の中からマックを狙ったように、鋭いビームやレーザーがぶすぶす壁を突き抜けて回廊を何重にも横切る。ステップを踏んで盲射ちをよけたマックは、踊るように回廊を駆け抜けた。

「五体満足で逃がすんじゃないよ！」

コニーの声とともに飛び出して来た怪物が、逃げるマックの後ろ姿めがけてビームを乱射する。うち一人は回廊に片ひぎをついて、肩のミサイルランチャーから小型ミサイルを発射した。

「このっこのっこのっ！」

抱かれたままのシェルミーが、マックの肩ごしに腕をまわして追っ手にライトラインを乱射する。ミシリットの風切り音を耳にしたマックは、大きくダイビングしてふかふかのカーペットが敷きつめられた床に自分から転がった。

緊急発射のために目標固定を忘れたらしい。急にはずれた目標へ進路修正するでもなく飛び過ぎたミシリットは、急上昇して天井に命中、爆発した。

「走れ！」

いくつもの天井画が裝飾された梁に囲まれた天井から、構造材やパネルの破片が降りそそぐ。

爆煙の中へダッシュしたマックを、放り出されて伏せていたシェルミーはあわてて追いかけた。

「何であんな連中がこんな所にいるの!？」

「化けて出て来たんだろ! んな事考える前に走りなさいっての!」

破片や細かい部品が落ちてくる。もうもうたる煙をやっと駆けぬけると、天井が落ちたらしい大きな落下音が背後から回廊を揺るがした。

「えーと、確かここらへん……」

白煙の向こうから撃ってくる火線を気にも止めず、マックは急ブレーキで止まった。ステンドグラス調に彫刻の入っているガラスから、外をのぞく。

「よし、ばっちり」

マックは、金色のとめ金はずしてガラスを開け放つと、窓わくに飛び乗った。

「ちょっと手を貸して」

「え?」

何のことやらわからずに差し出されたシェルミーの左腕を握って引き寄せると、そのまま外へジャンプする。

「な、何なのお!？」

窓からひきずり出されたシェルミーは頭から落ちた。ぴたり壁に向けて停めたエアバイクに飛

び降りたマックは、悲鳴をあげて落ちてきたシェルミーを受け止めて乱暴にタンデムシートにおいた。

「しっかりつかまってる！」

車体横のエネルギー・バックとスーパーラップの固定を確認してからエンジンを始動した。ヘッドライトが至近距離から幽霊屋敷スリラー・ハウスの石壁を照らす。シェルミーがシートに座りなおしたかも確認せずに、マックはターピンを全開にした。その場で車体を浮かせ、腰をひねって定ポイントポイントをかける。くるりと向きをかえたエアバイクは、ジェット的全開で逆立ち寸前にまでリヤを浮かせながら急発進した。

幽霊屋敷スリラー・ハウスの砲眼から撃ちおろされた火線が次々に路面につきささる。左右に素早くフラップの向きを変え、激しく車体をドリフトさせながら弾着を抜けたマックは、一直線に幽霊屋敷スリラー・ハウスから逃げ出した。

## S-7 最基底湖<sup>ボトム・レイク</sup>

「閉鎖区域<sup>デッド・ゾーン</sup>の中まで縄張り<sup>シ</sup>にしてるなんてね、さすがコネクション<sup>マ</sup>」

スクラップだらけの暗い道路をとばすエアバイクのタンデムから後ろを気にするシエルミーが喚いた。

「のんびり感心してる場合!? これからどこ逃げるのよ!」

「あいつらどっから入って来たんだ? 閉鎖区域<sup>デッド・ゾーン</sup>に人が入ったなんて、聞いたことなかったぜ」

ヘッドライトに浮かんだコミュニターの残骸を軽くジャンプしてよけたマックは、バックミラーに目を走らせた。遠く、追ってくるらしいヘッドライトがちらちらと動いている。

「安心しなさいって。こういうゴーストタウンの荒れ道<sup>ラロード</sup>じゃ、エアバイクより速く走れる乗り物なんか無いんだから」

マックは、建物の上空を見上げた。古い地区のため比較的低く出来ている天井はすべてのエネルギーを切られて、死んだパネル越しに構造材を見せている。

「もつとも、連中がここにまでチョッパー持ち込んでるっていうんなら、話は別だがね」

言っている間に、エアバイクとは別の種類の駆動音が追って来た。スクラップや起伏に見えかくれしていたヘッドライトが、距離を詰めてくる。

「来たよ。チョッパーじゃなさそうだ」

マックはエアバイクのスクロトルを全開にした。アフターバーナーを使えば五割がた最高速を上げられるが、その分あつという間にガス欠になるので使えない。

追跡車からの粒子砲がビームを放った。闇の街にあざやかな輝線をひいたビームが道路わきの建物に命中、爆発する。

「今度は大丈夫なんでしょーね！」

スピードが上がったために、声が風で流される。マックは叫び返した。

「出口さえ見つかりゃな！」

「えー!？」

「今さら来た道に戻るわけにいかないし……」

マックは一人呟いた。ガーランド中継点ジャンクションから完全に隔絶されている閉鎖区域デッドゾーンに、開いているド

アはないはずである。

闇の中に光が走った。正面からのライトの強烈な照射が、いきなり二人の白いエアバイクを捉



えた。

「ンなるー!」

車体を起こしてエアブレーキを開き、逆噴射による急制動をかけたマックは、ウィリー気味にフロントを上げたまま急ターンして横道へ入った。最後にちらりと横目で見たのは、二台並んで待ち伏せしていたコンバット・バギーが急発進する姿だった。

ビルとビルの中の狭い間道をぬけ、出た所に転がっていたリムジンを飛び越えて、着地と同時に急ターンの急ターンをかける。

「どこ走ってるかわかってんでしょうね!」

ライトラインごとテールカウルのアシストグリップに手をそえたシエルミーは、体をひねって後ろを見た。飛び越えたリムジンは急速に小さくなって闇に見えなくなる。

「どこ走ってるかって!?!」

往復二車線のストリーートの真ん中をぶつとばしながら、マックは答えた。

「決まってるでしょ! 閉鎖区域の中です!!」

シテイの中を走るハイウェイへのジャンクションの標識が、ハイビームにしたエアバイクのヘッドライトに照らし出された。

ハイウェイに上がるかどうか考えてまだ結論が出ないうちに、進路上でライトが点灯した。三、

四台並んで道を封鎖したホバークラフトやバギーのヘッドライトが白いダンスストールKZ九〇〇をまともに照らし出す。

「くっそ」

他に道はない。マックはやむなくエアバイクをジャンクションのインターチェンジにのせた。ゆるいループを登りきり、片側四車線の高架高速道路に出る。

「ブラッディ・コニーが指揮してるだけのことはあるね」

ハイウェイ上は、街路にくらべて障害物がほとんどない。マックはスピードをあげた。

「うんざりするくらいばっちり、車を配置してる」

「感心するなつてのに！」

シエルミーは、マックの背を殴りつけた。

「追っかけて来たわよお」

障害物が多い市街地では、飛べるエアバイクが圧倒的に有利だが、なめらかなハイウェイ上では車輪駆動でもさほどの差が出ない。エアバイクを追ってハイウェイに上がってきたコネクションの車両群を後ろに見ながら、シエルミーは抜いたままのライトラインを握りしめた。

「撃っていい？」

「振り落とされないようにしろ」

シェルミーは、マックの腰にしがみついたまま右手一本でライトラインを後ろに向けた。とたんに風で銃身がもつていかれそうになる。

「ねえ、この道どこに行くの」

「下の階層だ。行き止まりじゃないでしょーね」

ハイウェイがゆるい下り坂になった。と思う間もなくヘッドライトにトンネルの入り口が照らし出された。ハイウェイの行く先が、地下に向かって潜っている。トンネル内にシャッターでもおろしてあれば、逃げ道はない。

かまわず、マックは照明の消えたトンネル内へ突っ込んだ。

坂の頂点へライトラインを向けていたシェルミーは、追うヘッドライトが現れると同時に盲射ちする。坂の入り口で軽くジャンプしたバギーが、リヤのミサイルポッドから地対地／空小型ミサイルを発射する。夜目にもあざやかな噴射煙が迫ってきた。

「ミ、ミ、ミサイルよミサイルよ」

シェルミーが悲鳴をあげてライトラインを乱射するが、彼女の腕で当たるはずがない。

マックは、エアバイクを軽くドリフトさせて進路をずらすと、そのままトンネルのカーブの内側に急激に切りこんだ。

フライトホーミング  
能動追跡型らしいミサイルは、自身の軌道からはずれた標的を追って旋回しようとして曲がり

きれずにトンネルの壁にぶち当たった。トンネル一杯に広がった爆炎が、一瞬だけ壁のディテールを照らし出す。

カーブを抜けると、トンネルから出た。ゆるい傾斜のハイウェイが下層の天井から地面まで、何重にも重なったループ橋で結ばれている。

曲率一定の塔のような立体ループを下りながら、マックは眼下の街へ目をやった。ほとんど一面闇の街に、所々にまだ消えていない灯が見える。

「さて、どこへ逃げたもんか……閉鎖区域クローズド・ゾーンの中じゃいくら逃げても逃げられるもんじゃない!?」

いきなり、視界を黒い影が遮った。次の瞬間、白光が二人ごとエアバイクを包む。

「チョッパー——待ち伏せだ!」

至近距離から風をまいて、チョッパーのフローティングシステムのタービン音がループ橋に反響する。走るエアバイクのすぐ外からサーチライトを全灯したチョッパーは、機上の二連装粒子砲を振りおろした。

「何よこいつ! 落ちちゃえ! 落ちちゃえ!」

熱線のような強いライトを全身に浴びたシェルミーが、エアバイクにびたり同期してループのまわりを旋回するチョッパーにライトラインをぶつ放す。効果なし。

マックは、肩ごしにちらりと振り向いてシェルミーの顔を見た。

「だめ！」

何も言わないうちに、シェルミーはマックの腰にライトラインを握った腕をまわした。

「失敗したら落ちちゃう！」

「どーしてわかるの！ まだ何も言ってないのに」

言いながら、マックはエアバイクを直進に起こした。高架の防護壁めがけて直進する。

「いけえー！」

噴射全開で防護壁を飛び越えたエアバイクは、地上百数十メートルの空中に躍り出た。しばらく揚力をたよりに直進した後、エアバイクの浮遊原理である対地効果を失って急降下に入る。同時に急な機動を苦手とするチョッパーのサーチライトからはずれた。

「イヤッホウ」「ひい……」

歓声を上げるマックに対し、シェルミーは体を硬くしてマックの背にしがみついた。

エアバイクが、闇の中をループを後ろに見ながら放物線を描いて落下する。メーターパネルに示される対地高度がどんどん減り、闇に閉ざされた街がどんどん迫ってくる。

対地高度が四〇メートルを切ったところで、マックはアフターバーナーに点火した。闇の空に青白い炎を噴き出したエアバイクが、ふわりと浮くように落下速度を落とした。ループからまわ

りこんだチョッパーが、浮遊タービンのうなりを上げた。闇の街に浮かんだエアバイクの逆噴射の炎をめぐけて機体を前傾させて急加速する。

「あれま」

マックは、下向きにしたヘッドライトに照らし出された下の切り通しの路面が、妙な感じで荒れているのに気づいた。

「ちょ、ちょっとお！」

タンデムのシュルミーが追ってくるチョッパーと着陸予定地を交互に見て悲鳴をあげた。

「あれ、道路じゃない！」

「溺れないように鼻つまんで」

マックはアフターバーナーを全開にした。百数十メートルを一気に急降下したエアバイクは、アフターバーナーの炎で水面をわき立たせながら、街から一段掘り下げられたドブ河に着水した。落下速度を殺し切れずに一度噴射ノズルを水中に沈めてから、水柱をたてて飛び出す。騒音が一度に両側の壁から反射してきた。

「上下水道の整備くらいしといてほしかったね」

幅も高さも五メートルほどのドブ河の底を水煙をたてるとばすエアバイクを操りながら、マックは後ろを見た。

「エアバイクでなきゃ沈没するとこだった」

まるで二人を灼こうとするように、サーチライトを全灯したチョッパーが追って来ている。

「濡れちゃう！ わあ、汚れちゃう！」

タンデム用のステップから両足を上げて騒いでいたシェルミーが、マックの首根っこをつかんだ。

「ちょっと、上あがれ！」

「くっ首を絞めるなあ！」

思わず河岸によったエアバイクの横に連続して突き刺さったビームが、水柱の列を作った。

「殺す気か」

片手運転でシェルミーの手を振りほどいたマックは、溝渠の中央にエアバイクを戻して河岸を見上げた。

所々に排水口やパイプが顔を出している河岸から地上まで目測およそ五メートル、うまくタイミングをつかんでアフターバーナーをふかせば飛び上がれない高さではない。

橋をくぐると、溝渠がゆるいカーブを描いて別の溝渠と合流した。エアバイクを軽くバンクさせ、カーブの外側に水煙をとばして河にあわせて曲がったマックは、もう一度後方に目を走らせた。

チョッパーは、ドブ河上の超低空をなめるようにして追って来ていた。上空にもう一機いるらしく、建物の陰から標識灯が見え隠れしている。

「早く上がろーよお！」

足を上げたまま、シュルミーが喚いた。

「こんなとこやだあ！」

「生活排水じゃないんだから水は汚れてないと思うよ！」

マックはヘッドライトに照らし出されて流れる黒い水面を見た。スピードが速いので水質までは見わけられない。

「とにかく上がるぞ！」

ノズルのフラップの対地角度を前進から浮遊モードにしてエンジンをふかす。噴射を水面に叩きつけて、エアバイクは河溝からジャンプした。

「うわ！」

河の上に道路はなかった。両側とも、河幅一杯にまで高層建築がぎっしり建てられており、エアバイクが着地できるスペースはない。

「失敗」

再び五メートル下の河面に着水して水しぶきをあげたエアバイクは、水上の疾走を再開した。



「ドジ！ バカ！ なんで上がれないのよ！」

「濡れる心配より命の心配しなさいっての」

浅い角度で射ちおろされた粒子砲が水面を湧き立たせる。いくつ目の橋をくぐって、マックはもう一度エアバイクをジャンプさせた。

「わっ、何だ！」

河岸と同じ高さへ跳ぶと同時に、右の堤防上からのレーザーの射線がたて続けにエアバイクをかすめた。あわててジャンプを推進に切り替えたエアバイクは水面上へ落ちた。フルカバーどされたフロントノズルで水を切ってから、やっと姿勢が安定する。

「何なのよお」

すっかり水をかぶってしまったシェルミーが、濡れた前髪をかきあげた。

「見たろ！」

マックは、レーザー砲を搭載したバギーが併進していた右堤防の上を見上げた。

「参ったな……がっちり包囲されてるよ、これは」

「参ったなで済むと思うか！」

シェルミーはここぞとばかりにマックの首を絞めあげた。

「なんとかしろ！」

「く、く、首を絞めるんじゃない！」

マックは白眼を剝いてハンドルから両手を離した。コントロールを失ったエアバイクがすさまじい速度で流れる河岸に寄っていく。

「ぶつかろう！」

悲鳴をあげて、シエルミーは手を離した。

「え、なんだと、わわ」

マックはあわててハンドルに手を戻した。進路修正をしようとするが、エアバイクは急ハンドルが効くものではない。

はじかれ、最悪の場合転倒を覚悟したとたん河岸が切れた。

「おー、ラッキー」

再び別の溝渠と合流したらしい。河幅が一まわり広くなる。バイクが安定を回復した。

「しめた！」

水の流れる先を見たマックは指を鳴らした。橋をくぐったその先は、暗渠になって地下水路に流れ込んでいる。バックミラーに目を走らせても、水路上には追跡車はない。

「あれなら追ってこれない」

「あそこ入るの!？」

シエルミーは、不吉そうな目で暗い口を開いた地下水路を見た。

「どこ続いているの？」

「処理場だろ。こんな所でチョッパーやバギーと追っかけっこしてるよりヤマシだ。いくぞ！」  
粒子砲の斉射による水柱を左右によけながら、マックはろくな減速もせず、暗渠につっこんだ。こもった噴射音が反響してわぁんと耳にとびこんで来る。

「うるさあい」

「後ろ！ 追っかけて来ない？」

言われて、シエルミーは振り返った。チョッパーのサーチライトに照らされた地下水路の入り口が、どんどん小さくなっていく。

「大丈夫みたい！」

「耳もとで喚くな……」

風切り音と騒音に負けないように喚き返したシエルミーに、マックは首を曲げた。

「とにかく、しばらくは安心出来るか……」

「またトンネル？」

シエルミーは、ヘッドライトだけに照らされてとんで行く地下水路内を気味悪そうに見回した。  
「また、さっきみたいに待ち伏せされてるんじゃないの？」

「その可能性は充分あるね」

「ねえ……変な音、聞こえる……」

「ん？」

マックは、進路上に目をこらした。激しい水音が反響して聞こえてくる。

「水門だ」

水路の両側から、水門のシャッターが閉じはじめていた。水路を狭められた水流が、盛り上がって流れこんでいる。シェルミーが声をあげた。

「つぶされるう！」

「されてたまりますかっての」

マックはエアバイクを加速した。激しい水煙を立てて、ゆっくり閉じていく分厚い水門の金属壁に突進する。

「わああああー！」

「耳元で喚くなどゆるーのに」

水門が閉じるスピードは、思ったより速かった。水路の高さに余裕がないため、ホバーノズルで盛りあがった水面を切り、エアバイクは間一髪のタイミングで水門を抜けた。

「なに!？」

ヘッドライトに照らされた前面に、巨大な壁がそそり立っていた。反射的に大きくフロントを上げ、アフターバーナーまで動員して逆制動をかけたマックは水面が消えているのに気づいた。素早くメーターに目を走らせ、対地高度計のデジタルを読み取る。その一瞬、マックはメーターが壊れたのかと思った。

壁に衝突寸前で逆進に成功したエアバイクは、そのまま落下をはじめた。

「どっ、どーなってんの!？」

とりあえずノズルを噴かし、垂直降下の姿勢だけ整えたマックにシェルミーが叫んだ。すぐ横を、水路の水が滝になって落ちていく。

対地高度約八〇〇メートル。エアバイクは左右に切り立った崖を見ながら落ちていく。

マックはようやく事態を悟った。

「わかった、心配ない！」

「これのどこが心配ないっていうの！」

落ちていくエアバイクの上でシェルミーが喚く。マックはるか上空でホバリングしているチヨッパーへ目をやった。

「イシュタルの喉のはずれに追い込まれたんだ」

「何なのよこれは！」

「イシュタルの割れ目——ブロックのはじに開いてる、旧要塞区とイシュタルの喉の隙間だ」  
マックは、両側に切り立った崖を見上げた。折り重なった構造材のディテールが、ハイスピードで流れていく。

「どっかから出られないの!？」

「さっきから探してるんだけど……」

マックはちらつと高度計を見た。すでに高度三〇〇を割っている。

「……この下、いったい、何があるの」

あまり訊きたくなさそうな低い声で、シュルミーが訊いた。

「湖がある。——すぐ見れるさ」

マックは対地噴射を全開にした。エアバイクの落下速度が殺され、ふわりという感じで落ち方がゆっくりになる。次いでアフターバーナー点火。ループから街の上に飛び出した時と違ってほとんど前進速度がないから、垂直着陸という一番乱暴な手しか使えない。

アフターバーナーの炎がノズルから噴き出すと、目に見えて落下速度が落ちてきた。

永遠に続くかと思われた左右の断崖が途切れ、底知れぬ闇の空間がそれに変わった。エアバイクは激しい波をけたてて、黒い水面に着水した。一度ノズルを沈めて水煙をたててから、水面上にジェット噴射を叩きつけて走り出す。

ヘッドライトには、ただ一面の油じみた水面だけが照らし出されていた。

「何なの、ここ？」

周辺に、見える限り何もない。ライトの届く範囲に広がる黒い水面上で、シェルミーはマックの二の腕を握りしめた。

「ガーランド中継点ジャンクジョンの底——最基底湖だ。底ボトムレイクの湖って呼ばれてる」

「ボトム……レイク？」

「もともと、ガーランド中継点ジャンクジョンの一番下の部分にあった古いブロックだった。ところが、一番下にあるもんだから——上のブロックからしみ出した流水や工業廃液、生活排水なんかが全部ここに流れこんでくる。何度か洪水騒ぎを起こした挙げ句、結局居住ブロックとしては廃棄された。あとは流れこむ一方で、ガーランド中継点ジャンクジョンの底は、すっかり水没して湖になってしまいました、とこういう訳だ」

「へえ……」

シェルミーは、あまりぞっとしない顔で足元で水しぶきをたてている水面を見下ろした。

「今じゃジャンクジョン中で最大の水源になってる」

「じゃ、あたしがホテルのシャワーで浴びたの、この水!？」

シェルミーは声を上げた。

水といっても、排水が主成分、さらに有機廃液や廃油などが混じっている。汚水といった方が早い。

「浄化システム通ってれば、純水だって出来るけど？」

「そりゃそうだけど……え？」

エアバイクとは別の波の音が聞こえたような気がして、シエルミーは斜め後ろを見た。

「えー!？」

シエルミーの声に、バックミラーに目を走らせたマックはスロットルを全開にした。アクセルの届く限り障害物はない。好きなだけ飛ばせる。

加速を開始すると同時に、後方からのサーチライトが水面上に反射してエアバイクを射た。天井までにそれほど高度の余裕がないために水面上ギリギリまで降下していた二機のチョッパーは、進行方向を特定しないうんぐりしたボディを傾がせて追跡を再開した。

闇の湖上にあざやかに粒子ビームが映えた。

エアバイクをかすめて浅い角度で水面につきささり、扇のような水壁を立てる。

「くっそ」

降りかかる水しぶきの下を全速でかけぬけたマックは、ちらりと後ろを振り向いて二機のチョッパーの位置関係を確かめた。



「あいつら、今度は本気ですよ……」

充分に距離をとった二機のチョップバーからの十字砲火がエアバイクに襲いかかった。急な進路変更でかろうじてビームを避けたマックは、後ろのシェルミーがおかしな具合に動いたのに気づいた。

「黙ってつかま……」

ホルスターにライトラインを戻したシェルミーが、エアバイクのリヤに立てて固定しておいたスーパートラップをはずそうとしていた。

「こら、何はじめる気だ！」

粒子ビームがまたエアバイクをかすめた。二人揃って首をすくめてから、シェルミーは細腕でスーパートラップをはずしてしまった。

「お、重い……」

「よしなきいっての！ 素人に扱えるもんじゃない！」

「喚かないでよ！」

シェルミーは、見よう見まねで横にしたスーパートラップを肩の上にかつき上げた。

「あれ、何とかしなきゃならないんでしょ！」

「そりやおっしゃる通りですがね、おまえさんじゃ無理だ」

「黙って運転してて！」

シュルミーは、横にかついだスーパートラップを腰をひねって後ろへ振り回した。とんで来た機関部に頭をどつかれそうになって、マックが素早く頭を伏せる。

片ひざを横座りにシートにのせて斜め後ろのチョッパーへ粒子砲を向けたシュルミーは、うろ覚えの知識だけで安全装置を解除してメインスイッチをオンにした。

「頼むからやめてくれ」

「うるさい！」

自分としてはかっちり狙いをつけたつもりで、シュルミーはトリガーをひいた。マキシマムバワアの粒子ビームが闇の海へ飛び出した。黒い水面に反射光を映してチョッパーをかすめる。

「あー！」

慣れないスーパートラップを発射したシュルミーは、反動でシートから吹き飛ばされた。

「手を離すな！」

とっさに後ろ手にスーパートラップの銃身をつかんだマックが叫んだ。かろうじて片脚だけをシートにひっかけて踏みとどまったシュルミーは、スーパートラップを撃った姿勢のままエアバイクの横から落ちかけていた。

「お、落ちる、落ちる」

小型<sup>ダイソング</sup>ヨットでも操るような姿勢から、スーパートラップを手がかりに何とか体を立て直そうとする。流れた髪が黒い水面上ではねた。

「やだ、髪が汚れちゃう！」

「あのなー！」

マックは後ろ手に握ったスーパートラップを、力まかせに引き上げようとした。

「髪と体とどっちが大切だ——わ！」

片手運転で動きの鈍ったエアバイクを、粒子ビームが直撃した。

殺傷目的でないため、かなりパワーダウンされていたらしい。水素タービンエンジンにからみついた粒子ビームは、すべてのメーターをショートさせてから制御システムを破壊した。高速回転していたタービンが急速にパワーを失う。

「わわ！」「キャア！」

浮上力を失って降下したエアバイクが水面につんのめった。マックとシェルミーはスーパートラップごと闇の湖に放り出された。

シェルミーをかばいながら水面上を転がったマックは、回転する視界の中で、転倒したエアバイクのヘッドライトが進路上に岸壁らしいものを照らしたのを見た。

水面上を転がるうちに勢いを殺された二人は、冷たい水の中に飛び込んだ。

「ぶは！」

一度水中に潜ってしまったシェルミーは、異様にねばりつくような水面上に浮かび上がった。

「な、なに、この、水！」

「泳げる？」

シェルミーのそばに浮き上がったマックが訊いた。

「すぐ先に岸壁がある。そこまででいい」

水泳は学校の正課で習ったが、シェルミーはあまり得意な方ではなかった。

「どっち！　こーなりゃ何でもやるわよ！」

「こっちだ！」

マックはエネルギーバックごとスーパートラップを抱えたまま、力強いストロークで泳ぎ出した。

岸壁に見えたのは、半分壊れたかつてのハイウェイだった。

境界壁らしい切り立った壁にそって、所々水没しているハイウェイが蜒々と続いている。その上空で、滞空しているチョッパーがシェルミーとマックにサーチライトの強い光を投げかけていた。

水面のすぐ上で防護壁が壊れている所から、マックはシュルミーを引き上げた。

「ひでエ目にあつた」

救助するでもなく、ただじつと監視するようにホバリングしている二機のチョッパーを見上げる。

ハイウェイ上にやつとよじ登ってきたシュルミーは、蒼い顔をしてぺたんと座りこむとたて続けにせきこんだ。

「お、おい、大丈夫？」

「あーっ、気持ち悪い！」

薄黒い水をぬぐって、シュルミーは顔を上げた。

「ご苦労さまね」

「あー！」

ハイウェイ上の闇の中から、聞き覚えのある声が出た。チョッパーが照らし出すサーチライトの光を銀髪で反射しながら、コニーが闇の中から出てくる。シュルミーは声を上げた。

「こいつ！」

「待ってたよ」

とっさにホルスターからライトラインを抜いたシュルミーは、座り込んだままコニーに銃口を

向けた。あわてて射線上のマックが逃げる。

「よく、ここまで来たね。少しは気が変わった？」

「変わったわよ、このいけず！」

両腕で支えたライトラインをぶるぶる震わせながら、シェルミーは叫んだ。

「あなたになんか、絶対、何が何でも、死んだって協力してやらないから！」

「おお、勇ましい！」

サーチライトの光の中でレイピアをくるくるもてあそびながら、コニーは冷たい笑みを浮かべた。

「やってごらんなさい。この湖の中を泳いで来て、そんなものが作動するならね」

言われて、シェルミーは真上にライトラインを向けてトリガーを引いた。——手応えなし。

「えー!？」

「機関部に水が入ったんだよ」

マックは顔をしかめた。

「ただの水ならともかく、ここの水じゃな……水中銃でも作動しなくなる」

シェルミーは、濡れた前髪の間からものすごい目付きでコニーをにらみつけた。

「だが、こっちはきっちり耐酸性の防水までしてあるのさ」

スーパートラップを引きずって立ち上がったマックは、腰だめにした粒子砲をコニーに向けた。

「少々パワーダウンしてたって、この距離なら、あんた一発で蒸発しますよ」

「さっきからチョッパーの粒子砲が狙ってるよ、マクレーン・シーカー少尉」

「あらま」

無名のパイロットのつもりだったマックは、コニーから目をそらした。

「階級までばれてた」

「何よ！」

シュルミーが喚いた。

「撃っちゃえ！ こんな奴、撃っちゃえ！」

「おーお、過激な発言」

「そして、次の瞬間にはあんたたち二人が蒸発する。もし、そのデカブツを発射するまでに意識があれば、の話だけどね」

しばらく、シュルミーの荒い息だけが聞こえるにらみあいが続いた。

「……しゃあないね」

マックは心持ち粒子砲の砲口を下げた。

「命と待遇は保証してくれるんでしょーね」

「あんたたちの態度次第だ」

コニーは勝利の笑みを浮かべた。マックはスーパートラップをおろした。

「オーケイ、コニー、お前さんたちの勝ちだ」

「何ですって！」

シエルミーはぎょっとして立ち上がった。マックは肩ごしに振り返って苦笑いしてみせた。

「こんな所で殺されちゃうわけにいかないでしょ」

「ばかあ！」

シエルミーはマックに殴りかかった。振り向いた胸板をどんどん叩く。

「あわてるなつての」

マックはシエルミーの耳もとにささやいた。

「言ったら、逃げ出すチャンスくらいいつでも作れる。星系軍よりコネクションの方が脱走には  
楽だ」

「……」

シエルミーはマックの顔を見上げた。

「ホントに？」

「ちょっとしんどいけどな」

マックはシエルミーにウィンクしてみせた。



コニーは、ホバリングするチョッパーに軽く腕を振った。

「——え？」

ハイウェイ前の黒い湖水が、にわかには湧き立った。泡が、渦をまいて水中にすいこまれる。

「なに？」

渦が急速に大きくなったと思うと、真つ二つに割れた。巨大な黒いシルエットが浮上してくる。

「——潜水艦!？」

それは、甲殻類のようにグロテスクに耐圧装甲板を張り重ねた、化け物のようなスタイルの潜水艦だった。

「そうか……やっとわかった」

「わかったって何が？」

シエルミーは、赤くなった目でマックを見上げた。

「コネクションの奴らは、あの潜水艦使って、この湖の底から閉鎖区域ブロード・ゾーンに出入りしてたんだ」

「その通り」

甲皮のような司令塔からハイウェイにサーチライトを投げかけ、パウ・スラスターで波を割って接岸してくるグロテスクな潜水艦をバックにして、コニーは答えた。

「完璧な配置だね。さすがブラッディ・コニーだ」

「さあ、ベルシダーに乗艦してもらおうわ」

『そこまでにしてもらいましようか、ブラッディ・コニー!』

突然、何者かの拡声されたしわがれ声が三人の耳を打った。

「なに?」

反射的にコニーはあたりを見回して、プレスレットの通信機を開いた。

「ロック2、ロック3、侵入者を探せ」

ホバリング中のチョッパのコードネームらしい。チョッパは機体を振って、左右に別れようとした。

『その必要はありませんよ。こちらから出て行きます』

ハイウェイの先で、高出力タービンエンジンが始動する音がした。ヘッドライトの光が、湖岸にそってハイウェイ上を一直線にのびた。

「——な、なんだあ!」

第三勢力の出現に、マックは目を見開いて接近してくるヘッドライトを見つめた。チョッパのサーチライトが車体を捉え、バギーとトラックをあわせたような白いシルエットが浮かび上がった。

「ロットクルーザー——星系軍の野戦トラックだ……」

「星系軍の!？」

コニーの顔色が変わった。

「確かか!？」

マックはうなずいた。

「ついこないだ、ダウンタウンのホテルの前で見かけたばかりで……」

「やあ、みなさん、こんにちは」

ヘッドライトの前に、シルエットになって立った小柄な影が手を上げた。

「核恒星系宇宙軍の第一艦隊参謀司令本部所属、リー・ロッシュウォールです」

「ロッシュウォール……?」

「知ってるの?」

シルミーがマックの後ろから訊いた。

「知ってるものにも……ロッシュウォールって、星系軍最強の第一艦隊の総参謀の名前じゃないか」

「おお、わたしの名を知っておられるとは光栄です」

「星系軍が、何の用だい!？」

コニーはレイビアを握りなおした。ヘッドライトに影を浮かび上がらせた男は、笑ったようだ

った。

「突然なんでまことに申し訳ありませんがね、降伏していただきたい」

「降伏？」

シュルミーとマックは顔を見合わせた。コニーは笑い出した。

「上等だねじいさん。あんた本当にあの『怪鳥』ロッシュウォールなの!？」

「怪鳥と呼ばれているかどうかは知りませんがね」

男は、ヘッドライトの中で両手を広げた。

「この壁のすぐ向こうから、我が艦隊の重戦艦が主砲を向けています」

言われて、コニーとシュルミー、マックはハイウェイにそそり立つ境界壁を見上げた。

「ホントなの？」

シュルミーはマックをこづいた。

「センターポートに星系軍の重戦艦が入港してたのは確かだが……」

「ここは確かにポトム・レイクの外側だけど……」

コニーはヘッドライトに立つ男に目を戻した。

「宇宙都市の外壁に穴なんか開けたらどうなるか、解ってるの!？」

「解っておりますよ。少なくともこのブロックは崩壊、あなた方は真空死——その前に主砲の直

撃で、一瞬のうちに消滅でしょう。選ぶのはあなた方です」

男は、大仰に頭を下げた。

「さあ、降伏していただけますか」

シエルミーとマックは、もう一度顔を見合わせた。

ソノラマ文庫<325>

スターダスト・シティ〔1〕

落丁本，乱丁本はお  
とりかえいたします

---

昭和61年1月31日 初版発行

著者 笹本 祐一  
© Yūichi Sasamoto 1986  
発行人 喜久村 繁  
発行所 株式会社 朝日ソノラマ  
東京都中央区銀座4-2-6  
第2朝日ビル (〒104)  
振替番号 東京2-40311  
印刷所 凸版印刷株式会社

---

ISBN4-257-76325-6

# ソラマ文庫 傑作SF

統合ファイル①

座礁、虚の星域 在沢 伸

先進国間のワープ航行開発競争に巻き込まれた久我巨の任務は!? 宇宙時代の諜報戦を描くハードタッチのSFアクション。第1弾!

420円

妖精作戦 笹本祐一

転校生の超能力少女が超国家組織に誘拐された! 原子力潜水艦から月基地まで、同級生たちが繰りひろげる、奇想天外な追跡劇!

450円

妖精作戦PARTII

ハレーシヨン・ゴースト 笹本祐一

学園祭の準備で騒乱状態の学園を襲った、一連の怪奇現象の謎は? 新鋭がハチャメチャに繰り広げる快テンポの痛快SF!

420円

妖精作戦PARTIII

カーニバル・ナイト 笹本祐一

SCFが星南学園にサイコ・クラッシュヤーを送り込み、作戦名「カーニバル・ナイト」小牧ノブ誘拐作戦第二弾の幕が開いた。

420円

妖精作戦PARTIV

ラスト・レター 笹本祐一

厚木基地から南海の孤島へ。次いでシヤトルを乗っとり高度衛星軌道上の機動要塞へ。沖田、榊らはハチャメチャにノブを追う!

420円

若き竜王の伝説

ドラゴン・ロード 嵩峰龍二

真紅の髪を波打させて大宇宙の魔女(ソルジャー・クイーン)が翔ぶ。狂気のベイアクが抱く銀河制覇の野望を阻止できるか!?

420円

アドナ妖戦記①

月神の魔女戦士 嵩峰龍二

愛する人を救い、祖国エルガラの再興を願って戦士アドナは淫邪神バルドスックに挑む。壮大なアトランティス物語・第1弾!

420円

悪霊ステーション

竹河 聖

新米の美人コンピュータ技師が体験した、オンボロ宇宙ステーションでの幽霊事件!? ロマンチックなSFサスペンス!

420円

バミューダ霊海トーム

竹河 聖

アトランティスの古代遺跡の発掘が進むバミューダ三角海域の真つ只中の島に、悪霊の手がのびる。怪奇SFサスペンス・第2弾!

400円

ハートでジャンプ!

岬 兄悟

超格安の貸家に住み込んだばかりに、驚天動地の大騒ぎ。次元航行船ラウリー花丸号に衝突されたその家は、次元移動ができるのだ!

450円

ハートでジャンプ!

岬 兄悟

超格安の貸家に住み込んだばかりに、驚天動地の大騒ぎ。次元航行船ラウリー花丸号に衝突されたその家は、次元移動ができるのだ!

450円



朝日ソノタマ

ISBN4-257-76325-6

C8193 ¥400E

定価400円